

又 雄 殿

尙々此許朝夕は聊秋冷相催し、既に昨夜は月もよろしく何角咄合、沼山の景色噂仕候。
おみやはだか人形と被_レ存、(帯)をび・一重_(單衣)杯不_レ遠遣し可_レ申候。且壽加_(下等)・せか彌_(同上)がま出し可_レ申候。九月
祭り前にはおもしろき反物内藤に頼み置候間下し可_レ申候。以上。

(横井時靖藏)

1107 宿 許

明治元年七月十八日 小楠在京都

一書拜呈仕候。御揃増御安泰に被_レ成_二御暮、奉_二恐悦_一候。此許相替り不_レ申、格別言上之筋も無_二御座、何
も略仕候。私病氣今以勝れ不_レ申、岩佐玄珪・内藤専ら治療いたし聊見込も御座候。自然此療治にて快く
無_二御座_一候へば大坂に下り、フランスの醫者高名之者にて是に懸り養生仕る心得に御座候、御安心可_レ
被_レ成奉_レ存候。内藤も近日軍務局病院懸りの長に被_二仰付、日々出勤仕候。夫故私近邊に引移り申筈に
て屋敷も極り申候。月給拜領仕大分暮し方宜敷、別封之通りさし出申候。色々吟味仕候へば西陣にては
様々のものおりに出し便利之事に御座候。
至誠院様えすきやちとみ、おつせに帶地、おみやに帶地、并に古の一重、壽加・せかにもめんさし出し申
候。根段も付け置き申候間定て御許よりは大分安く御座候と奉_レ存候。又雄へは墨遣し申候、是は長崎人

より送り候ものにて有_レ之候。

新堀隠居も一旦は不鹽梅之處漸々よろしく、二三日より大坂に下り候筈にて有_レ之候。此許にては例の
物すき道具屋せつき様々のかいもの有_レ之、何に金子は不足勿論に御座候。めづらしき所にて咄し合申
候。いまだ歸國之様子は分り不_レ申、此歸りに金子さし上可_レ申候。先此段迄拜呈、何も後便に可_二申上_一
候。以上。

七月十八日

横井平四郎

至 誠 院 様

お つ せ 殿

又 雄 殿

尙々御自愛專一に奉_レ存候。いも・からいも定て根入宜敷事と奉_レ存候。かき當年は大分なり付き候
由、さぞく日々給候事に被_レ存候。

此許にては食ひものに大難澁誠に困入申候。禁酒も最早六十日餘に相成一滴も給不_レ申、勿論何方
えも參り不_レ申、此様なる困窮之旅詰は無_二御座_一候。まんびき(鐘)あをのり・ほしるびどふぞ不_レ遠
御送り被_レ下度、吳々奉_レ希候。最早時候も宜敷無_二申分_一着いたし可_レ申候。以上。

(横井時靖藏)

二〇八 宿 許

明治元年八月二日

小楠在京都

新堀隠居出立にて一書拜呈仕候。秋冷益御機嫌能奉_ニ恐悅_ニ候。隨て私儀相替り不_レ申候。然ば御許飛脚一兩日前に到着、熊本變動い才承知仕候。就ては此許之事何角浮説流言も様々可_レ有_レ之、誠に無_ニ存懸_ニ次第にて御座候。此許太政官は彌以御都合宜敷 主上關東御行幸も内輪御決に相成り、當月二十日比には御發途之御模様相違無_レ之御事に承り申候。關東之方も彌以官軍方盛大にて、白川口と申所に先月中旬より諸軍押つめ諸方之手を合せ打入候手筈にて御國之兵も定てさし向ひ候ものに相聞へ申候。定て大勝利に相違無_レ之候。且又奥州之北方は一旦は諸藩兩端をいだき居候間會津・仙臺より兵を出し、佐竹藩に押し懸け兩藩より重役之者七八人佐竹に遣し色々説得いたし候處、佐竹にて義兵に一決いたし右使者を殺し直に兵を發し會・仙之陣に押し懸け大勝利を得申候。依_レ之其近隣之諸藩津輕・南部等盡く是に應じ、近日に諸藩合兵會津・仙臺に押し懸け報告十日前に有_レ之候。且又越後之方官軍方追々十餘藩より出兵海陸二タ手より押し懸け、此許よりも仁和寺宮大總督にて先頃御出張、昨日は久我公副督にて御出張、内藤も久我公に附屬被_レ張、仰付_ニ昨日罷立申候。大坂より蒸氣船にて越後海軍之方なり。右之次第にて中々官軍之勢甚だ盛にして當月中には諸方之諸軍會津に押つめ候軍勢に御座候。尤仙臺は兩端に相成り國內半分は官軍に内通いたし候。庄内も同様に有_レ之候。只今にては會津にくみし候所は米澤其外近隣之小藩不_レ得_レ止くみし候所

二三藩も有_レ之、是等も不_レ遠に歸服可_レ仕事情にて何に四五日中には白川口・越後・出羽三方の報告可_レ有_レ之相待申候。右之通にて關東平定は來月中旬迄には必定落着可_レ仕候。

主上江城御臨幸は是より治道御施行之 思召にて甚以諸事簡易之御出立に拜承仕候。此許當時出京に相成候大小藩都合四十餘之大名にて賑々敷事に御座候。右之次第にて太政官も諸御役方二タ手に分れ此許・江戸と輪番にて代る_レ相勤候筈に相成申候。江戸は先達て東京と被_ニ仰出_ニ以來は 主上にも御往來にて御政事被_レ遊候筈に御座候。大略右之通りにて此許之御都合は次第に宜敷相成申候。

昨日兵庫より左平太共紙面參り、兄弟平安修行仕御安心可_レ被_レ下候。紙面並寫眞さし上申候。此方之事情大間違のみ相聞え候由にていか斗案勞仕り候事と被_レ存候。然し不_レ遠實情相聞可_レ申候。私よりも先達て書狀は仕出し置候、今比は着仕候事に被_レ考候。尙近日に仕出し候筈に御座候。

(下津休也)新堀歸國にて諸反物一包は御飛脚及_ニ延引_ニ此節さし上申候。外に茶一封取りまぜさし出申候。

一 金子二百兩新堀に遣し置申候。

(津次郎)内百兩は出立前竹崎列世話借用之返辨にて御隠居より直に竹崎に渡に相成候相談に御座候。竹崎には早々御通路可_レ被_レ成候。尤右之内より少々は餘り可_レ申由に付餘分は竹崎より御受取可_レ被_レ成候。

(通知のこと)百兩は隠居不足之由に御座候間遣し申候。御遣錢に兩三度に御取り可_レ被_レ成候。其通りに隠居と相談仕り置申候。定て新堀着之上は御知せ可_レ申、私よりも此段留守に申遣す段咄置申候事。

尤御取りの節は受取書御遣し可被成候。

久々御許之御書狀參り不申、如何と奉存候。又雄不_(み)相替_(ま)出精と察申候。ミイシヤン_(み)來月之祭には帶_(ま)一重も出來、宮參り可仕候。何も此段迄申上縮候。以上。

八月二日

横井平四郎

至 誠院様
おつせ殿
又 雄殿

尙々此許は朝夕大分冷氣相催申候。随分々々御自愛專一に奉存候。私痲疾近日大分宜敷、此節は快氣仕候ものに被_(レ)存大慶仕候。當月下旬頃よりはどふとぞ出勤仕度、大にあへぎ罷在候。必ず御懸念被_(レ)下間敷候。岩佐女将大に力を盡申候。

かき・からも出來申候と奉存候。小供さぞ給可_(レ)申、何も想ひやり申候事。

(横井時靖藏)

二〇九 宿許

明治元年八月六日 小楠在京都

返すく此許大小大名四十三藩出京にて市中賑々敷事に御座候。一體は無事靜成る事に御座候。市

中_(細)しまり等大に行届き申候事。

(飛脚)早立候に付一書奉呈仕候。秋冷愈増御安泰奉_(レ)恐悦候。随て私儀相替り不_(レ)申御安心可_(レ)被_(レ)下候。然ば追々書狀仕出し置新堀隠居迄頼置候處于_(レ)今引懸り居候由、何角御懸念も可_(レ)有_(レ)御座候。御許御書狀も久敷參り不_(レ)申、御國許御役替等うち替り候段想像仕候。此許は太政官彌以御都合宜敷昨日は關東御鎮撫として近々 主上御下向被_(レ) 仰出候。此節は非常之御うち立にて賀茂行幸之御供廻りにて兵隊も無_(レ)御座候程之 思召にて有_(レ)之候。尤江戸此節より東京と被_(レ)定、此許と共に東西之都に相成り候間、太政官も二つに分れ御役方も兩方に相分れまわりく相勤め候様に被_(レ) 仰付候間 主上にも是よりは追々關東御出幸有_(レ)之筈にて此節も年内中には御歸京之筈に御座候。尤御供之公卿方も一人に十人之御連れ人に相定り、大名之御役方少々兵隊にて御供にて御座候。惣て御途中之諸藩政事等一々御聞き糺し御救恤等有_(レ)之 思召之由、關東も諸藩大に官軍に歸順いたし只今之處にては官軍之兵勢大に振ひ不_(レ)遠平定可_(レ)仕候。御國も 左京亮様議定にて江戸に被_(レ)爲_(レ)入日々御出勤被_(レ)成候。兵隊は虎之助殿引率し白川口之方に發向に相成、最早戰爭にも相成候事に被_(レ)存候。白川口は官軍十餘藩押つめ居候由、敵方は會津・仙臺・米澤にて有_(レ)之、其餘は大抵官軍に相成申候。尤仙臺は佐竹藩等と追々及_(レ)戰爭_(レ)毎度敗軍いたし先日之戦には大敗にて家老兩人迄被_(レ)打取_(レ)申候。佐竹は仙臺の後ろにて其方角之諸藩は盡く佐竹に應じ申候。仙臺も國內二つに分れ半分以上は官軍に應じ實に危き容體に御座候。越後之方も官軍海陸よ

り發向是も加賀・越前を初十餘藩押つめ居申候。先日長岡之城を敵方より焼き申候。然し是はさしたる軍にも相成不_レ申候。近日に大舉大勝を奏し可_レ申との報告有_レ之候。い才之儀は追々に可_三申上_一候。私麻疾此節は大分之再發にて一旦は御役御斷も申上候へ共容易に御取り上げ無_レ之趣にて寛りと養生いたし候様被_三仰出_一候間專養生仕候。越前之醫岩佐玄珪に懸り十分盡力いたし呉れ、近來大分宜敷相成り、只今通りにては當月末頃よりは出勤も可_レ仕大に競ひ居申候。明日共は近邊迄參り候打立仕申候。必々御安心可_レ被_レ下候。

下津隱居歸に前にも申上候通り書狀并品物追々遣し置候へ共出立毎々及_三延引_一申候。二三日中には此許出立にて大坂に十日斗も到留當月末迄は是非歸着に相成可_レ申候。其上い才御承知可_レ被_レ下候。先此段迄申上縮候。以上。

八月六日

横井平四郎

至誠院様

おつせ殿

又雄殿

尙々時候御自愛專一に奉_レ存候。大分秋冷、沼山景色宜敷可_レ有_三御座_一思やり申候事。

(横井時靖藏)

二二〇 宿許

へ

明治元年八月九日

小楠在京都

近藤新之介早にて歸國仕、一書拜呈仕候。益御安泰に奉_レ恐悦_一候。(被_レ成_三御座_一説方)先日追々書狀仕出し置候處御隱居手許に引き懸り甚心外に奉_レ存候。前書一通此書一同にさし出申候。此許益御都合宜敷關東 御幸も廿日過には御發京と奉_レ存候。只今御供しらべやら何やら太政官は賑々敷事に御座候。扱越後之方新潟賊方落去と前書に認め候様に覺へ申候。左様にては無_レ之、官軍三方より押懸け日ならず落去可_レ仕報告にて有_レ之候。一兩日中には江戸よりの報告も參り可_レ申候。何様官軍之勢大に盛にて賊方不_レ遠平定可_レ仕候。私麻疾も漸々宜敷御安心可_レ被_レ下候。御隱居今日此許出立、大坂に十日斗到留、何に來月初には歸國と奉_レ存候。反物・茶等のもの仕出し置申候、左様御承知可_レ被_レ下候。

左平太共書狀此許に來着、壯健にて大慶仕候。右書狀等先日仕出し置申候。此節迄は參り申間敷、何に後便には到着可_レ仕候。此段迄あら_レさし出申候。

八月九日

横井平四郎

至誠院様

おつせ殿

又 雄 殿

尙々隨分御自愛可_レ被_レ下候。又雄、作左衛門迄註文之小ツカ(稱)は後便に遣し可_レ申候。おみや帶・一重物等は御隱居持ち歸りにて有_レ之、どふぞ來月祭り前に到着いたし候へかすと奉_レ存候。何方へも宜敷奉_レ希候事。
(横井時靖藏)

二二一 宿 許

へ

明治元年八月十四日

小楠在京都

明十五日新堀隱居出立に付一書呈上仕候。秋冷之砌愈益御安泰に被_レ成_二御座_一、奉_二恐悅_一候。隱居出立も色々引き懸及_二延引_一漸く明日出立に相成申候。然ば此許 御東下前にて太政官も何角賑々敷 御親臨は來月初に相成可_レ申候。いまだ御供之衆も不_レ被_二仰付_一候へども内輪は相定居申候。極々御簡易之御打立にて賀茂行幸位之御議定と相聞申候。當時大名も夥敷上京にて市中賑々敷有_レ之候。關東は追々申上候通彌以官軍大勝利、江戸より五十里白川の城を根城にいたし夫々進撃、棚倉・岩城之二城も乗り取、二本松城に押懸け迄江戸報告有_レ之、一兩日中には吉左右相待居候。越後は長岡城も乗り取り新瀉も同様三條と申所に敵方屯集いたし居候間諸方官軍押し懸け候筈の報告也。三條乗り取り候へば越後一國平定也。奥州之隅は佐竹藩大に勃興いたし庄内と取り合及_二度々_一毎々大勝利にて近隣之諸藩盡く之に應じ候上、新瀉之官軍并其方角之諸藩(藩口家)後ろより押懸前後より庄内をはさみ打之手段之報告也。右之

通り迄相聞候間何に四五日には諸方之報告可_レ有_レ之奉_レ存候。天子關東御親臨は軍事には御懸り合無_レ之、府・縣・藩に御政事御施行之 思召にて決て御親征と申筋にては無_レ之、江戸にも長くは 御滞留不_レ被_レ遊三十日前後には 御出立と申義にて有_レ之候。先々大抵此許之次第右之通にて、い才は新堀より御承知可_レ被_レ成候。

御國許物議沸騰之段い才に承り申候。就ては浮説流言様々と被_レ存、いか斗か御心痛被_レ成候事と奉_レ察候。乍_レ然此許當時之次第にては第一 天子御聰明に被_レ爲_レ在諸公非常に御精勵にて御新政筋漸々御都合宜敷御失政と申も無_二御座_一事にて、關東は前條之通り當中には平定に歸し可_レ申天下之大勢にて一途に相成儀は必定にて不_レ遠靜り可_レ申候。私病氣は岩佐療治にて漸々甘き方に相成り、今一段宜敷相成候へばそろ／＼近邊迄も出られ候事に御座候間來月初 御親臨御前後には出勤も可_レ仕哉と存じ罷在候。い才は鹿之介(下津休也の二男)より御聞取可_レ被_レ下候。

先便に申上候反物并茶等此節隱居持歸りにて段々後れ申候。どふぞおまつりに懸け合候へかすと奉_レ存候。色々病中之樂み古る着抔求め申候。存外古着は高直に御座候へども御國よりは安き由に御座候。何ぞ御註文之物被_二仰越_一可_レ然奉_レ存候。

左平太共へは近日に書狀仕出し申筈に御座候。此許事情等い才申越可_レ申候。彼方先生え慶長小判並むすめ兩人へは慶長一步金外に水晶之玉を遣し申度夫々用意仕候。此節歸國之人の咄しに兄弟之評判は

大に宜敷申、珍重に奉存候。此段迄拜呈、餘は大略仕候。以上。

八月十四日

横井平四郎

至誠院様

おつせ殿

又雄殿

尙々乍末御自愛專一に奉存候。又宮兄弟も元氣と奉存候。又は彌以書物等出精萬々存じ申候。(又難(みヤ子)) 作左衛門え小柄註文に候へ共却て小刀之方可宜との事に遣し申候。(みヤ子) ミイサンへは御くわし遣し申候事。近邊千左衛門初大玄列え可然御傳へ可被下候。以上。

別啓

一 新堀御隠居え金子百兩遣し置申候。右之内到着早々先づ三十兩御手許に返しに相成り、當暮に三十兩、残り四十兩は來春に歸しに相成る約束にて御座候間、隠居歸りの上御受取可被成候。尤急に御入用之節はいつ何時も新堀より御受取被成候筈に相談仕候事。

一 出立前竹崎列(前出)より借用之金子爲返辨二百兩新堀に頼み遣し申候。竹崎え御知せ、同人早々新堀より受取夫々返辨仕候様御咄し合可被下候。尤百兩には及び不申由にて残りは御手許に御受取可被成候事。

一 山形典次郎縁家中より反物頼みにて金子四十兩借用いたし候。山形はいまだ此許に罷在候へ共何に不遠歸り可申、右金子は當暮返辨之約束にて、其時之金子之相場を以て御國札にて返辨之筈に御座候。此段も序に申上置候事。

八月十四日

小楠拜

(横井時靖藏)

二二二宿許へ

明治元年九月十日

小楠在京都

明日上林手代御國に參り候に付一書拜呈仕候。愈御安泰に被成御座、奉恐賀候。隨て私儀相替り御安心可被成下候。然ば此許之事先日住谷歸國にて沼山にも定て參上い才御咄し申上候事に奉存候。(肥後(七)) 爾來彌以御都合宜敷別紙之通りにて御座候。私も次第に快く罷成り、近日は近邊え日々步行仕候。然し一旦之大動搖にて不怪疲勞仕、食禁等今以嚴重に仕、二タたきめし給へ肴類も一旦は一切禁じ申候處近日少づ給候様に相成り大分元氣も付き彌快復仕候。引入百ヶ日餘に相成り候へ共いまだ步行・正坐十分は出來不申候故及内意當月末より出勤仕候手數仕御免達に相成申候。然し關東御幸前には暫くづにても出勤仕度心得に罷在候。前書にも申上候通り酒一切禁絶、岩佐よりも嚴重に申聞中々當分給候事六ヶ敷、最早百四五十日餘も禁じ居候故さしてほしく事も無之、此儘下戸に相成候も知れ不申

御一笑可_レ被_レ下候。

新堀隠居當時は大坂に下り居、來る十五日前後には出立に御座候。此便に種々頼み置き候へ共大延引に相成り九日祭もはづれ残念に奉_レ存候。然し當月中には到着と奉_レ存候間不_レ遠御届に可_レ相成_レ奉_レ存候。上林手代熊本に二十日餘りに到留、直に歸京仕候間此許に御遣しの品物何にても宜敷との事にて御座候。たばこ最早切に及び可_レ申、是は何分急に御遣し被_レ下度萬々奉_レ希候。先日はおいつ御申合のまん引き到着、日々給申候。青苔(油女、魚名)・あぶらめ(記後藤土)杯殊に珍敷ものにて上林手代に御托し御遣し被_レ下度萬々奉_レ頼候。又雄え太平記求め置申候、是は佐藤松喜歸りの節に遣し可_レ申候。お龜衣(裳)しよふも染方に遣し置候へども此節迄は出來不_レ仕、次之便にて下し可_レ申候。莫大拜領も仕候へ共夥敷物入にて殊に諸物價御許よりは四五増陪(ツ)之高直に御座候。左平太共にもとても官府よりは御出方六ヶ敷奉_レ存候間當冬先づ三百金位は遣し不_レ申ては來春よりの手當有_レ御座_二間敷、近日にかわせにて送り申筈に御座候。且病氣にも物入別て多分に有_レ之、出勤仕候へば若黨も四五人小者共に都合十一人外に下女二人の暮し、夫に食客六人遣い錢・衣類迄世話いたし候ものも有_レ之、夫はく大惣之事に御座候。家司役可_レ然者甚ほしく御座候へ共一切手に入不_レ申、是には大困りに御座候。然し珍敷大名に俄に相成り、乍_二自分_一おかしく御座候。先此段迄拜呈、餘は大略仕候。以上。

九月十日

横井平四郎

至 誠 院 様
お つ せ 殿
又 雄 殿

尙々時分柄御自愛專一に奉_レ存候。昨日はお祭客、は何程に御座候哉、想像仕候。此許にても同行の面々に神酒を出し、御噂のみ仕候。近邊何方えも可_レ然御傳へ可_レ被_レ下候事。

(横井時靖藏)

二二三 甥左平太・大平へ

明治元年九月十五日

小楠在京都
二甥在米國

在京中一時重態に陥りたる病氣の快復に向ひたる頃のもの。

一書申進候。時分柄彌相替り無_レ之修行、珍重に存候。然ば土州生歸國持參之書狀大坂より相達、夫々承知いたし候。此許内亂新聞紙にて被_レ致_二承知_一疑惑之次第尤千萬に存候。全く官軍大勝利、一統治平に歸し恐悦之至に候。い才之儀は前後之趣江口相認さし出し候通にて別に申遣さず候。中々不思議之世界に變化いたし何も意外之事共に候。方今會津等は平定、先は禍亂は治り候へ共此よりが治道の初りに能々大切之至は申迄も無_レ之候。然處第一 皇國之仕合は 主上(御十) 非常之御天授日々政事所に御出何角之事共被_二聞召上_一候。拙者共は日々御目通りに壹間位之所に罷出諸事言上仕候。扱々不思議之仕合に

候。御政事之次第輔相三條・岩倉議定公卿參與抽者共大底十人、近日肥前縣公、同役に被_レ仰付_レ大に驚い也。辨事公家大大抵此役にて萬機相決し候。其外は外國・軍務・會計・神祇・刑法等分局有_レ之、其他外治は京都・江戸京都と東西の都に大坂・長崎・箱立・新潟・南都被_レ定東京と稱す。山田等には府を立られ國々天領は縣令を被_レ置候事、右之通にて役人に殊之外事欠き人撰大に困入り誠に乏しき至に候。主上東京に御親臨當月末には此地御發輿極々御簡易之御積り也。御途中は本陣御宿にて御便所出來御居間御疊替迄にて其他は一切御構オカ(肥後方言)むひ無し、尤府・藩・縣にては夫々御政事被_レ布施候筈也。公卿門閥被_レ廢、御攝家と云へ共其人に非れば御用ひ無_レ之、輔相は三條・岩倉之二公、三條は當時在江戸にて此許は岩倉公全權に有_レ之候。此公は非常才力有_レ之、中々大名杯には比類無_レ之致_レ大慶候。其他は公卿・大名共に格別の人體無_レ之、獨り肥前當公いまだ廿斗若輩ながら出類也。昨今參與被_レ仰付_レ拙者共同役也。家中一統大に振い立感心いたし候。

拙者四年來少々痲疾相煩居候處昨冬に至り大分つより、秋堤共療治いたし候へ共勝れ不_レ申、正月初高橋文貞呼び迎ひ同人より外治いたし速に奏功、近邊鐵炮うちにも參り候様に相成候間三月出京參與被_レ仰付_レ殊之外多用朝より夜に入りすわり切り候間再發いたし、七八月頃迄は血便下りよ程六ヶ敷有_レ之候處岩佐玄珪治療にて漸々甘快、昨今は十に八九分宜敷候故出勤いたし候。尤酒も一切禁じ居專養生にうち懸り居候。何に來月中には平愈可_レ致必ず_レ安心可_レ被_レ致候。

紙面認居候處只今其許第八月六日日附之紙面大坂より傳達いたし、被_レ申越_レ候次第夫々致_レ領承_レ候。先

々不_レ相替_レ無事修行之段大慶いたし候。海軍所入校之存念にてワシントン府惣督懸合存念通り六人は此許太政官より頼み越し候へば不_レ苦段に相決、入費等迄細々之申越至極尤千萬、さぞ_レ被_レ致_レ心配_レ候事に存候。當時拙者參與に居候事故早々申談じ、いか様とぞ存念通りに落着いたす様に心配可_レ致候。熊本之成り行江口別紙之通りにて來春よりの御助力必ず六ヶ敷可_レ有_レ之存候間幸拙者當時之通り相勤居候へば過分之月給拜領いたし、事故來春よりの學料は手許より遣し候筈にて先洋銀三百ドル替カワせにて此節さし廻し候手數いたし居候處にて有_レ之候。則右ドル高横濱にて替せに致しヘルリス當にいたし遣し申候。何に來月末・十一月初には到着可_レ致受取可_レ被_レ申候。外に享保圓金并に一步金遣申候、ヘルリス親子に可_レ被_レ送候。享保後古金は慶長より、上品にて古金中第一也。航海入校之事は太政官決し次第に可_レ申越、致_レ安心_レ修行可_レ被_レ致候。來春に至り學料は追々廻し可_レ申候。因て云幸便有_レ之節「セコンド」十分宜敷品送り被_レ吳度頼み入候。此許は近來仕入ものみにて殊之外悪しく有_レ之候。幸便と云ふが六ヶ敷可_レ有_レ之、兵庫迄之幸便有_レ之れば拙者當にいたし大坂府之御役所にさし出候へば直に届き申候。尤右之通にいたし候へばアメリカ(前)「コンシユル」より取り次ぎ候へば慥に相達候。自然日本人歸國之節なれば長崎にては御屋敷にさし出す外無_レ之候。當時社中長崎に用て居不_レ申、新嘉坡留守居にて寄居。兵庫なれば大坂にて督府之御役人か會計局之役人かどふでも相達候。何分幸便に上品を撰び被_レ差送_レ度待入候。來春二三月頃には尙又ドル銀遣し可_レ申、航海一條十分盡力可_レ致吳々安心修行第一に存候。

當時西洋諸國格別之禍亂も無^レ之かに被^レ存候。アメリカは頭領替りの由、新頭領人物定て評判可^レ有^レ之被^レ申越^{（度脱カ）}存候。其外何邊い才承り度候。

薩州生鮫島誠藏・森金之允外國にては野田忠平・深井鐵太と改名、四年前イギリスに參り居候内同國人ヲリハントと云者に出會、ヲリハントより咄聞候には世界人情唯々利害之欲心に落入り一切天然の良心を消亡いたし有名の國程此大弊甚しく有^レ之候。必竟は耶蘇の教其道を失ひ利害上にて喻し候故に人道滅却嘆げかわしき事なり。我等も全く耶蘇に落入居候處アメリカ國エルハリスと云人より初て人道を承り悔悟いたし候。此のエルハリスも元は耶蘇教之教師にて有^レ之、二十四五歳にて天然之良心を合點いたし人倫の根本此に有^レ之事を真知し是より自家修養良心培養に必死にさしはまり誠に非常之人物當時世界に比類無^レ之大賢人なり。此人世界人道の滅却を嘆き専ら當時の耶蘇の邪教を開き候志なり。ヲリハント再び云我は役事相斷下院の奨励
たりし由エルハリスに隨從し修行せんと欲すとの咄し有^レ之、薩の兩人も甚驚き遂にヲリハントと共にアメリカに渡りエルハリスに従學せり。エルハリスは退隱村居門人三十人餘有^レ之相共に耕して講學せり。其教たるや書を讀むを主とせず講論を貴ばず専ら良心を磨き私心を去る實行を主とし日夜修行間斷無^レ之譬ば靄然たる春風の室に入りたるの心地せり。然しながら私心を挾む人は一日も堪へがたく偶慕ひ來りし人も日あらず歸り去る者のみにて遂に其堂を窺ふこと不能、薩の兩人も初は中々堪がたかりしが僅に接續の力を得て本來心術の學問に入りたり。此人云世

界總て邪教に落入り利害の私心に渾化せん實に人道の滅却なり。未だ邪教の入らざる處は日本とアフリカ内何とか云國のみなり。日本は頼み有る國なれば此の盡力は十分に致したきこと、薩人近頃歸り兩三度參り、此道の咄し合面白く大に根本上に心懸け非常の力行驚き入たり。此のエルハリスの見識耶蘇の本意は良心を磨き人倫を明にするに在り、然るに後世此教を誤り如^レ此の利害教と成り行き耶蘇の本意とは雲泥天地の相違と云ふ事なり。

此段大略申遣候。扱々感心之人物不^レ及ながら拙者存念と符節を合せたり。然し道の入處等は大に相違すれども良心を磨き人倫を明にする本意に至りて何の異論か有らん。實に此の利欲世界に頼む可きは此人物一人と存するなり。都合に因りては必ず尋ね訪ひ可^レ被^レ申、重々存候事。

様々申入度事は山海に候へ共筆上に盡されず、先此段迄申遣候。何に航海修行一條申談じ決着之上は早々可^レ申入候事。

九月十五日認

小 楠

佐 太 郎 殿

三 郎 殿

尙々沼山よりも一昨日書狀到着、至誠院様初小兒に至る迄何之御申分も無^レ之壯健にて安心可^レ被^レ致候。先日寫真致させ一枚遣し申候、いまだ一向出來不^レ申おかしく有^レ之候。

ヘルリスに替せ銀當にさし出候間一と通りの書狀遣し申候。是迄の恩謝其許迄吳々申越候間兩人より十分宜敷申述らる可く候事。

別 紙 (一)

本書認置候處出勤之上早速小松に懸合文書頭と改、當時外國知事候處小松咄しに既に此事はアメリカ官府より申來り御決議に相成其元兄弟(後の日下部太郎)八木八十八外に薩生一人被_レ仰付候筈也。あと二人はアメリカに參り居候内より被_レ命筈にてアメリカに懸合に相成るとの事なり。尤給料もアメリカより申來候通り五百ドル拜領の筈也。近日横濱にてア人に御頼御申入に相成るとのことなり。大方此紙面一同に參り可_レ申候。五百ドルにて不足可_レ致候へば拙者只今御役相勤居候へば相應に遣し候事少もさし支え無_レ之、安心可_レ被_レ致候。來春末には又々金子さし送り可_レ申、十分安心無_レ心配修行第一也。

一 此許海軍は彌起り候筈也。何に來春よりと被_レ存候。外國人呼び迎ひの詮議も起り居候。此段迄違いたし候。已上。

九月十八日

小 楠

兄弟當

別 紙 (二)

○七月二日大黒村高田の炮臺へ賊雨霧に乗じて襲來、薩救撃して頗苦戦す、遂に賊を討退く。以上布告

の日志より抜書。

○八月三日新潟にて賊を破り遂に取_レ之、此後賊鋒次第に挫け越後大略平定、遂に兵を分つて會津・庄内の兩城に發向す。是より前、秋田の佐竹義を唱へ仙臺の使者七名を斬て國境に梟首し、兵を以て庄内を討つ、奥羽の總督九條公(宣孝)・澤公等(宣重)仙臺に擁せられたれども附屬の兵士等策を以仙藩を脱し、當時兩公并參謀等皆秋田に在り。庄内の賊兵鋒強く秋田并薩兵等一旦敗走の處援軍來着又軍勢振立、佐竹侯も必死にて出張に相成候事。津輕・八戸・天童等の諸藩皆官軍に屬す。○肥後御人數も江戸より白川口へ出張惣帥米田虎之助殿也。相馬領駒ヶ峯にて仙臺の兵と戦、少々敗衄討死十人手負三十人斗り、其後兩度の戦は勝利也。轉戦して仙臺に逼るとの事也。初度の戦は八月十一日也。○仙臺も議論二つに別れたる由、家老白石・亘兩所既に降服也。○米澤も始めは抗命甚しく、奥羽諸藩の盟約を取固官軍を拒ぎしに朝敵漸々敗亡より旗を伏せ謝罪降服と申す事に相成候。○八月廿四日官軍會津の本城若松に逼り外郭を取る、廿八日・九日に三ノ丸に乗入る。本丸を落し候報告未だ參り不_レ申、併今明日には落城の次第可_レ申參と存候。○當時賊徒大略討滅、只仙臺・庄内の兩藩未だ服從致さずと雖當月中には夫々落着可_レ致と存候。○今九月二十日 主上東京府御巡幸御發輿也。御供輔相岩倉公、此公元來才力有爲之質にして大に昨年來盡力に相成候。近頃二三の君子力を用ひ段々心術に基かれ候筋に相成、天下の事件本末順序を得人材之用捨其位を得候は、治平可_レ期懇願之至に候。參與にて大木民平・木戸準一郎御供にて候。其他は略

致し候。此節は速に御歸洛の筈に付年内中には御歸着と存申候。是より東幸西巡屢被_レ爲_レ在候筈に付追々々遷都の事も重大の事に無_レ之勢とも相成可_レ申候。○本藩の方も當七月來様々の事而已にて變遷も有_レ之候得共 朝廷之御運び宜しく相成、天下之大勢もや、方向定り候筋に趣き候間自然に御國議も定り可_レ申事と存候。 太守様(細邦)も近日御出京之旨申參り候。○下津隱居も去る夏大御奉行之命を受け出京に相成居候處其迹にて御國の様子も打變り候。急に歸國の筈の處病氣寸斗快く無_レ之未だ大坂逗留に相成居候。當地逗留之社中山田五次郎・宮川小源太・河瀬典次・西田八左衛門・能勢道彦・岩男作左衛門・江口純三郎・同英次郎皆々無異に居候間安心可_レ有_レ之候。熊府の方も皆相變り不_レ申、尤吉村嘉膳太當夏病死、何れも殘憾に堪へ不_レ申候。

右迄申述度、事情も大略書認候間御推考頼入候。以上。

明治元年九月十九日 當月改元是より御一代一號也

左 平 太 殿
大 平 殿

社中より申上候

尙々時下御自重奉_三萬祈_一候。先生御病氣も彌以御平快に趣き候間御安心可_レ被_レ下候。内藤泰は軍務

館病院局長に命ぜられ、當時東北遊擊大將久我公に屬し羽州秋田邊へ罷越居候。
主上御即位の大禮八月廿七日御執行に相成、首尾能く相濟御同慶奉_レ存候。
此外申上漏し候事多端御座候へ共何も再鴻に譲り閣筆仕候。以上。

(以上本紙・別紙三通横井時靖藏)

長崎出帆後二甥より小楠に寄せたる書面の内容は頗る興味あるものであつたらうと思はれるが、小楠の書中にもある如く肥後藩政府に差出した爲か一通も見當らないのは遺憾である。

二二四 宿 許 へ 明治元年九月十六日 小楠在京都

拜呈仕候。冷寒相催、愈益御安泰に被_レ成_三御座、奉_三恐賀_一候。然ば八月十一日之御書狀到着仕、難_レ有拜見仕候。小兒に至る迄相替り不_レ申候段安心仕候。私も病氣彌以甘快仕、昨十五日より參 朝出勤仕候。何ぞさし障りも無_三御座、今日も罷出候。來る二十日彌以關東 行幸に付中々多事にて有_レ之、廿日後は御用も少く可_レ有_三御座、寛りと保養可_レ仕候。いまだ十丁以上之處歩行出來不_レ申、どふしても歩行が第一惡敷有_レ之候。然し漸々都合宜敷、來月中には十分快復之見込に御座候。酒は勿論ニタたきめし、肴肉類も日々一度之外は嚴禁いたし、大根のふるふき位之仕合にて誠に大困窮に御座候。昨日は參 朝之上直(區片吹)垂カシ一式拜領仕候。平生參 朝には着用不_レ及朔望或は何か御悅之節は是非着用仕候事に御座候。尤外

に冠服も入用に御座候へ共一時に夫迄には及び不_レ申候。冠服着用御見せ申度、中々似合申候、御笑々々。
 左平太共より八月初之書狀到着、不_レ相替_ニ無事に修行仕居申候。アメリカにて航海學校は外國人一切入
 校叶ひ不_レ申、西洋何方も同様にて有_レ之候。然處兄弟兩人ワシントンに參り_{（アメリカの都也）}政府之役人に懸け合
 重々及_ニ談判、遂に日本人六人は日本政府より頼み越候へば不_レ苦段に相談相決し候間私より此許之儀
 心配仕吳候様申越候。然處アメリカ政府より太政官え右の次第早速申越し、左平太兄弟并薩州生兩人・
 越前八木八十八都合五人之人さし迄いたし申來候。中々早速之取り斗感心仕候。右に付此許太政官外國
 懸_ニにて評議相決し右五人は其通りに被_ニ 仰付_ニ筈に極り、其國主々々に御懸合に相成、異議無_レ之候へ
 ば直にアメリカに御頼越に相成るに決定仕候。尤修行料も太政官より給り候事に有_レ之候。一年五百ド
 ルと申來り、御國許にて異議可_レ有_ニ御座_ニ様も無_レ之、兄弟存念も相達し重々大慶に奉_レ存候。尤夫迄の入
 費さし支も可_レ致と存じ、此節ドル銀三百枚替せにいたし近日是よりさし送り候筈に夫々取り斗仕候。
 左平太共紙面は太政官にさし出置申候。右之次第にて大都合と相成、無_ニ此上_ニ御安心可_レ被_レ成、先内輪
 にて御神酒御上げの様奉_レ存候事。

關東彌官軍大勝利にて會津も落去いたし候段所々より申來り候へ共今日迄は江戸大總督より言上は參
 り不_レ申候。然し決て間違は萬々無_レ之、彌大亂は平定にて恐悅此事に奉_レ存候。

新堀隱居于_レ今大坂に滞在、是は不快迄にて無_レ之段々御用之筋も有_レ之候。何に當月中は出立無_レ之と

奉_レ存候。追々申上候通り様々之品物頼み置き大に及_ニ延引_ニ甚心外千萬に奉_レ存候、吳々御待可_レ被_レ成
 候。來月中旬比には佐藤松喜歸郷之筈にて此節段々さし出候心組に罷在候。隱居に金子頼み置き、右之
 通り及_ニ延引_ニさぞ_レ御迷惑可_レ被_レ成奉_レ存候。何分千左衛門え御借用御暮し可_レ被_レ成候。先此段迄拜
 呈、餘は大略仕候。以上。

九月十六日

横井平四郎

至 誠 院 様
 お つ せ 殿
 又 雄 殿

尚々時分御自愛第一に奉_レ存候。みいさん_{（讀書）}あげじ遣し中々上_{（上出来）}でけ感心いたし候。此上_{（物置）}がま出し可_レ
 申、よき便義之節何かたま_{（驚き）}かり候程之物遣し可_レ申候。

又雄へ太平記求置候へども能き便義を待居申候。程によれば新堀にも頼み可_レ申や、大坂迄之便義
 次第に可_レ致候。

小袖・羽織は夫々受取申候。

うへ木類段々御手入見事にさかへ候段大慶仕候。かきはさぞ_レ給候事と思ひやり申候。此上_{（寒肥）}寒_{（不敵）}
 る大事にて必々十分御懸け可_レ被_レ下候。將又書物類寒_{（干）}ぼし御忘れ無_レ之様奉_レ存候。坂口_{（不敵）}に懸物三四

幅も参り居、是は寺原隠居に御頼み御取り被_レ成、千左衛門に御預可_レ被_レ成候。

一 青苔等追々申上候品はどふぞ早々御遣し可_レ被_レ下候。此段拜呈仕候。以上。

(横井時靖藏)

二二五 宿 許

明治元年九月二十日 小楠在京都

今日鹿之助_(下津休也の二男)参り、来る廿五六日隱居_(休也)大坂出立に相極候に付一書拜呈仕候。時候益御安泰に被_レ成_三御座_二奉_二恐賀_一候。私事も彌以宜敷日々出勤仕候。先便にも申上候反物類且茶等此節は到着可_レ仕候。鹿之助も早々参上此許之事情私容體等御咄し申上候間何もい才御聞取御安心可_レ被_レ成奉_レ存候。

一 先便にも追々申上候私出立前竹崎_(前出)世話にて百兩程借用いたし候。此節隱居え頼み返辨仕候間一日も早く新堀より受取、夫々返辨いたし吳候様竹崎に急に御申越可_レ被_レ成候。且御隱居に百兩ふりかへ置候間此内三分一は早速にさし出しの約束に御座候間早々御受取被_レ成度、残りは當暮と來春に返辨之約條に候間左様御承知可_レ被_レ成候。

左平太書狀鹿之助え遣し置申候、御受取可_レ被_レ成候。先便にも申上候通り兩人共に航海修行太政官より被_二仰付_一、誠に以無_三存懸_二次第さぞく御悅可_レ被_レ成と奉_レ存候。い才は鹿之助より御聞可_レ被_レ成、略仕候。夫迄金子不足も可_レ仕と存じ、幸ひ能き便義御座候間昨日三百ドル兩人に仕出し置申候。尤横濱よ

り替せにいたし候手數にて御座候。且此許之事情も當春以來之次第細々相認め遣し申候間此節之便宜はいか斗悦び可_レ申と奉_レ存候。段々申上度儀何も鹿之助に咄し置候間い才御承知可_レ被_レ成、略仕候。先此段拜呈申上縮候。以上。

九月廿日

横井平四郎

至 誠 院 様

お つ せ 殿

又 雄 殿

尙々幸便次第に何にてもさし上候儀不_レ苦、無_三御遠慮_二被_二仰越_一可_レ被_レ下候。何に歳暮御祝義と奉_レ存候間早々思召御註文被_二仰越_一可_レ被_レ下候。壽加へは相應なる帶地遣し方可_レ然か、御尋申上候。おいつは何が宜しかるべきや、是又註文申越候様御噂可_レ被_レ下候。

お龜_(奉書細)ほふしよつむぎにて花色_(扇模様)すそもよふ染方に遣しはまだ出來不_レ申候。是は不_レ遠仕出し可_レ申候。且竹崎に御相談徳富引き受申候金子、半高は當暮には約束之通り是非遣し申度御心配被_二成_一下_一度奉_レ希候。おみや_(衣類)いるい入用のもの御申越可_レ被_レ下候。此まへあげじ参り誠に見事に出來悅入申候。此上彌出精之程萬々いのり申候。

又雄書物彌以出精と奉_レ存候。何ぞ遣し可_レ申、是又註文可_レ致事。此段迄申縮候。以上。

別啓

明日河瀬出立にて前書認置候内去る二日之御狀到着難有拜見仕候。益御機嫌よく奉_三恐悦_一候。此許之儀並私いたみ(病氣)の次第前書に認置、且河瀬より委細御承知可_レ被_レ成、略仕候。おいつより青のり送り遣し大に大慶仕候、早速給可_レ申候。扱お龜に遣候うわはり(前出)只今染方出来さし廻し申候。随分よろしく出来さぞ_レ悦び可_レ申、早々御遣し可_レ被_レ下候。何も申上候事無_二御座_一候。此段迄拜呈仕候。以上。

九月廿三日

横井平四郎

至誠院様

おつせ殿

又雄殿

尚々何事も河瀬より可_三申上_二、随分々々御自愛專一に奉_レ存候。私は保養は十分以上にて誠に困り入申候。何も後便に可_三申上_二候。以上。

おいつに返事可_レ仕之處此夕は大取り込みにて何分出来不_レ申候、宜敷御申可_レ被_レ下候。以上。

別紙

太平記 太政官日誌

右遣し申候間來春中には讀み習候へかすと存候。此上十分出精祈申候事。

廿三日

又雄殿

小楠

(横井時靖藏)

二二六 彌富千左衛門・矢野大玄へ

明治元年九月二十一日

小楠在京都
彌富・矢野在沼山津

一書拜呈仕候。時分柄愈御安康奉_三拜賀_二候。私も相替り不_レ申勤仕罷在候間御休意可_レ被_レ下候。然ば此許太政官彌以御都合宜敷、昨日は 主上關東御發轅にて、此節は江戸初關東御所置御政事之大綱領御布施之 思召にて當分江戸に御滞在と申にては無_二御座_一、十二月中旬迄には 還幸被_レ遊候筈に有_レ之候。關東の亂も大略治平に歸し先兵禍は相止候へば一統人心方向も相定り、是より治道に御取り懸り 皇國一定之御所置專御議定に相成申候。主上當年御寶算御十七歳、いまだ御幼年に被_レ爲_レ在候へ共非常之御聰明誠に奉_三驚入_二候。い才之儀下津隱居歸國にて鹿之助(前出)より宿本に咄し候筈に御座候間御承知可_レ被_レ成、大略仕候。扱宿本何角御世話可_レ被_レ成下、乍_二此上_一可_レ然吳々御頼申候。

去冬之暮宇佐川世話(九郎次)にて矢野え金子出し置候處チカクいまだ地方之引當落着不_レ仕、矢野・光永兩人之名前にて證文遣し置申候。い才は宇佐川承知仕候間當暮は夫々定式之通り相當之引當落着いたし候様千左衛門様より宇佐川え御談じ被_三成下_二度吳々奉_レ頼候。私も痲疾再發にて去る五月末より引入長々養生仕候

處様々に變態いたし、七・八月比は下血と相成、其末小便閉いたし、一旦は必死之容體に相成候處不思議に都合宜敷漸々甘快に趣申候。去る十五日より出仕仕候へ共いまだ氣力も乏敷、其上從來之痲十の二三分は治し兼歩行・正坐甚六ヶ敷難澁仕候。乍然兎や角といたし罷在候。勿論出勤も駕より罷出候位にて、酒は既に二百日程も嚴禁、食事も二度タキ、肉類等も禁じ罷在候。美人は澤山金も不足無之候へ共餓キ道にて候や、何之因果やら見聞のみいたし申候、御一笑可被下候。先御不音御斷迄、拜呈仕、餘は大略仕候。以上。

九月廿一日

小 楠 拜

千 左 衛 門 様

大 玄 老

尚々乍末御全家様へも可然御傳致被下度奉頼候。中庄司御袋様不(前出)相替・痛飲想像仕候、可然御傳え可被下候。此許相應之御用向さし支無御座候、無御遠慮被仰下度奉存候。以上。

(彌富破摩雄藏)

二一七 彌富千左衛門・最勝へ

明治元年九月二十五日

小楠在京都
彌富・最勝在沼山津

最勝は小楠より彌富千左衛門・矢野大玄への書狀(二〇〇・二一六)の尙々書に「中庄司不ニ相替云々」「中庄司御袋様云々」とある中

彌富家の女主人。其の頃の風習で夫と死別後最勝院と呼ばれたが、自らも常に最勝と署名してゐた。此の婦人は男勝りで多技多能酒をも好んだ。小楠が彌富家を訪うて催された酒宴にはいつも加はり、小楠にとりては酒興上の好敵手だつた。

八月中旬御仕出しの御狀大坂灰屋より到着、忝々拜見仕候。先以 御兩家様愈御安康に被成御起居奉拜賀候。隨て私事無事に罷在御懸念被成下一間敷奉存候。然ば縷々被仰下候次第御厚情之至に候。殊に何寄之御品御送被成下、不淺忝々拜謝難申盡奉存候。私も久々相煩、一旦は土中之者に歸し候容體に御座候處、存外順路に相變漸々甘快に趣き、近來は出仕も日々仕候、扱々仕合千萬に御座候。此許之事情等先便に千左衛門様え及言上、且宿本に申越候。定て御承知被下候事に奉存、略仕候。いなかもの不存寄衣冠之間に列坐仕何やらかやらおかしき事のみ有之、實に奇々怪々に御座候。扱御宴興は此許にても毎々御噂仕、誠に御ゆかしき無(さか)限事に奉存候。夫にうちかへ私は夏來は酒一切嚴禁如何成る因果の報やら、我ながらも驚入申候。其上長々之引入嶋原・祇園町其名のみ聞候て模様も伺ひ不申候。極樂中にて地獄に落入たるとは私の事を申たるにて可有御座候、御一笑可被下候。却說留守何角御世話に罷成可申、此上何も奉願候。時々は御出も可被下、小楠堂上の風色思ひやり申候。清(最勝の子)之助様今以御全快に到らせられず、さぞ御心配可被成奉存候。然し御氣長く御介抱專一に奉存候。長崎御出は早速に承りいか斗御快樂かと奉存候。何も御禮御返事迄あらさし出、餘は後雁に拜呈可仕候。已上。

九月廿五日

小楠拜

千左衛門様
最勝様

尚々乍末どなた様へもよろしく被仰上可被下候。此許御註文も御座候へば何にてまさし支不申候、聊御遠慮なく被仰越可被下候。何も大略仕候。目出度かしく。

(彌富熊太藏)

二二八 三岡八郎へ

明治元年十月四日

小楠・三岡
在京都

上封に三岡様御刀三本添 横井拜とある。

昨夜は御刀御見せ被下、夫々拜見仕候。正宗恐くは偽銘ならん、正宗大抵銘を切らず、人其故を問へば我刀他人の似すること不能と。故に真物の名高きは却て無銘に有り。應永前後の比大和の奈良に偽銘刀工ありて相州京物を夥しく造らえたり。小拙正宗の有銘短刀六七本見たるに寸尺恰好大抵相似たり、其作飛動變化の物少く尋常穩當の形色多し。曾て本阿彌家の言を聞く正宗・貞宗の上品は穩當なるに有り。此の説に據れば奈良の偽造は専ら正宗の穩當なる處を似せたる者にて別て短刀に多きなり。如何々々。無銘短刀是は勢州物に相違無し、二代の村正か初代の門人正重か、此の兩人の間ならん。甚だより

所る有る短刀なり。刀は薩州波平鑑定甚だ同意なり。若し他に求めれば北國の字ツ物ならん、何に此の兩所の間なり。銀びん誠に見事なり、先返納仕候。何も拜顔の上を期申候。以上。

十月四日

小楠拜

三岡君御坐右

尚々御不快如何に御座候哉、御自愛專一に奉存候。私も昨日より少々不鹽梅にて今日は引入保養仕度候へ共、無餘義出勤仕ねば叶はぬ事御座候間暫く罷出候心組に御座候。何も申縮候。

(由利韶邦藏)

二二九 立花壹岐へ

明治元年十月四日

小楠・立花
在京都

立花は明治元年五月徴士を仰付られしも病氣のため猶豫を願つてゐたが、抄々しく回復せぬので餘り延引しては恐入るとて病を推して九月二十九日着京し、數日休養の後十月四日次に出した書面を小楠に寄せたが、本書面はその返事である。

貴墨被成下忝々拜見仕候。然ば縷々被仰下候趣御厚情之至に奉存候。先日信人君(十時盛津の末弟)より御坂着之段承知仕候。御不例于今御甘快に至り兼御引入如何案勞仕候。何に近日に拜顔萬縷可申上候。小拙事近日より出仕はいたし申候へ共寸斗甘快に至り不申候。暫づにて歸宿仕候。夫故何方へも參り不申候間御無禮仕候。扱又鯉魚被下御惠投、忝々拜受仕候。先奉復迄仕、餘は拜顔之上に讓置候。以上。

十月 四日

小 楠 拜

壹 岐 様

拜 復

(壹岐文書・立花親雄書翰寫)

立花壹岐より

鄙墨拜啓仕候。先以打絶呈書も不仕候得共御容子は折々社中より承、益御安泰被成御消光、奉拜賀候。扱私義當
 五月徴士に被仰付候處兼ての病氣に付上京御猶豫相願専ら療養仕候へども、于今同口にて快方に赴不申余り
 及延引奉恐入候に付乍病中先月五日に在所出立同廿九日御當地え上着仕候。就ては早速登調仕り御高論相願
 度心事も御座候得共、地氣變換之感障と相見熱氣往來打臥罷在候間今兩三日共は其義心底に相任不申遺憾之仕合に
 御座候。いづれ快方次第登龍可仕候得共暫時御無音罷過不本意奉存候間、先此段以寸書申上置候。乍筆末先生
 も御不例勝に被爲在候處、近來は御盛にて折々御出仕も被爲在候由池邊十時より承り大慶不過之候。隨て是
 成龜肴時下御見舞之印迄に獻呈仕候。恐々稽首。

十月 四日

立花壹岐

親雄(花押)

横井先生

殿 下

二百三岡殿(八郎)も快方次第登龍之心得に御座候得共未だ初調も不仕義に付、先は呈書も相憚り候間御序可然様御致

傳賜り度奉庶幾候。

(横井時靖藏)

三三〇 宿 許

明治元年十月五日

小楠在京都

生越生急使被差立候間一書奉呈仕候。益御機嫌能奉恐悅候。然ば此許の事先日河典出立(河橋典次)才御咄し
 申上候筈にて其後 御出輦御留守至て無事、何ぞ相替り申儀無御座、何も生越より御承知可被下候。
 私事も日々出仕仕、漸々宜敷方には御座候へ共痲疾之舊症いまだ十分快無御座、とんと歩行出來兼、日
 々の出勤も駕より罷出申候。今一段快相成候へば大によろしく甚あへぎ居申候。最早元氣は全快とも
 可申上、扱々舊病にはこまり入申候。追々申上候通り酒は久敷嚴禁の上三度々々ふたゝきめし、肴肉類
 は様々食禁御座候て誠に困り入申候。何分此上養生第一と相心得罷在申候。
 たばこ最早切れ懸り申候、何分急々に御遣し被下度、萬々奉頼候。
 先便にも申上候通り當暮は何ぞ差出申上度、御註文急に御申越可被下候。物入は莫大に拂ひ出し驚入
 候へ共、元來拜領餘分に有之、相應の品は聊御心配無御座様に奉存候。
 寒中書物ほし方無間違様に奉願候。
 懸物坂口に遣し置申候。隠居え御頼み御取返し、千左衛門に御預可被成候。われ物坏宮川方坏へ遣し

置候もの夫々御取返し可被成置候。此段迄拜呈、餘は後便可申上候。以上。

十月五日

横井平四郎

至誠院様

おつせ殿

又雄殿

尙々近日は大分寒さにさし向ひ、病後別て迷惑に御座候。衣類唯々寒をふせぐ仕方のみ仕候。

又雄彌以書物手習等出精可致吳々祈申候。定て禮記は數遍讀み、文字失念も無之事に被存候。此

上四書・詩經・書經等跡よみ大切に候。太平記も下し候間讀み方すらく出来候様萬々祈申候。おみ

や手習益、出精と存候、定て人物も上り候ておとなしく相成候と存候。此上彌以出精珍重に存候。此

暮比には何を遣し候やら、出精之都合により品物も宜敷事と相待可申候。此段かしく。

追啓

只今太政官に罷出候内關東より報告有之、會津去る廿二日主人父子無刀にて軍門に降參、直に郭外之寺に塾居、此日開城受取渡廿四日兵器類さし出兵卒出城一件落着。

仙臺主人開城寺入り兵器差出に相成落着。

右い才は四五日中には前後始末日誌にて布告之筈也。

庄内いまだ分り不申、是も近日開城と報可有之、先々禍亂平定仕重々恐悅に奉存候。此段拜呈仕候。以上。

十月五日

小楠拜

(横井時靖藏)

宿許へ

へ

明治元年十月九日

小楠在京都

牛島・山田昨日參着にてい才御國之御様子且沼山津御安泰に被爲成御座候段承り、先々目出度奉祝

仕候。私も彌以快き方にて御安心可被下候。扱細々之御書狀被仰下夫々拜見仕候。たば彌富所持、

御遣し難有、近日には切れ可申甚迷惑仕居候處にて誠によき折柄に到着仕候。りふじん御送り珍敷、

早速給申候。當年はよけいになり付申候由如何と存じ罷在、御樂みと奉存候。寒ごゑ十分御かけ被成

度、其外ざぼん・きんかん將又うへ直し申候かきの木杯去年通り御世話被成度吳々奉存上候。

太守様も御機嫌能今日被遊御着、誠に御案じ申上居候處大に安心仕候。

左平太共一件被仰下候趣夫々奉畏候。河瀬・生越も近日に到着可仕、い才咄し置申候。夫々御承知

可被下候。太政官より被仰付候へば此上も無之兩人之仕合、彼等念願之通り何も參り候は必竟兩

人之厚き志相達し別て難有奉存候。來春よりはそろく此許之海軍も仕懸りに可相成候へ共いま

一人の其道に熟候人無_レ之、兩人之者四ヶ年程修行仕候へば日本第一等之航海者と相成り候はありま_{（當り前、}
へ_{の意）}の事にて實以大慶仕候。其上天下之御新政も一兩年にてはとも國々一致之場合には至り申間敷、三
四ヶ年後に至り候へば萬事治平可_レ仕、其時歸り候へば海軍は申に不_レ及諸事大に都合宜敷可_レ有_二御座_一
候。随分々々御氣長く御待ち可_レ被_レ成吳々奉_二存上_一候。

山田より金子之事噂仕候。さぞく御迷惑可_レ被_レ成奉_レ存候。是は追々申上候通り夏の比よりさし出候
心組に居申候處幸ひ隱居相見え急に歸郷と申事にて相頼遣し置申候、先便にい才申上候通りに御座候。
此節牛島一同に歸國に御座候間百兩の半高にても早速御取り被_レ成候様奉_レ存候。い才は典次より可_二申
上_一候。

彌富老人引き出しのもめん御おらせ御遣し被_レ下難_レ有早速仕立可_レ申奉_レ存候。彌富へも此趣き御噂被_二
成下_一候へば老人悦び可_レ申候。茶ニタぶりつき一つは千左衛門に御遣し可_レ被_レ成、一つは被_二召上_一度
奉_レ存候。新堀歸りにさし上候茶あまり延引にて自然は
風味悪しく共は相成不_レ申成如何と奉_レ存候。

先日にも追々申上候通り當暮は金子も裕に御座候間只今より御註文何にても被_レ成度、おいつへも御噂
被_レ下候様奉_レ存候。

おつせ病氣と山田より承り、如何之容體に御座候哉、案申候。格別之事にて有_二御座_一間敷、此節紙面も參
り不_レ申如何と存申候。

太平記やら盛衰記又雄讀み習ひ候様、是等は千左衛門か安左衛門讀方出來申候間御頼み被_レ成、時々參
り候へば無_レ程ギン下_{（すらくと讀むの意カ）}り候様に相成申候。早く讀み習ひ候事吳々祈申候。何も此段迄拜呈。い才は牛島よ
り御承知可_レ被_レ下候。以上。

十月九日

横井平四郎

至誠院様
おつせ殿
又雄殿

尙々只今迄は格別寒さにて無_レ御座、暮し能御座候。當冬は大病後殊之外寒く有_レ之、次第に寒に相
成困窮と奉_レ存候。

おみや手習出精、人物も次第に宜敷相成候由重々珍重に存申候。此上彌以出精之程祈申候。
にこり酒當年も十分に出來申候由、甚想ひやり申候。禁酒は扱々困窮にて當年中はとも給_{（ケ）}は出來
申間敷、然し痲疾能くさへ成り候へば是等は十分さしはまり養生仕候。いまだ歩行出來兼甚難澁仕
候。日々早引き仕候へども御事多き時は夫も六ヶ敷、今日共は大分多用にて困り入申候。何も大略
申縮候。已上。
（横井時靖藏）

立花壹岐へ 明治元年十月十四日

小楠・立花
在京都

小楠は十月六日立花の來訪に接したが、立花の健康の宜しからざるを見て御役辭退を勧めた。この書狀はその後立花より寄せられた書面に對する返事である。

忝拜見仕候。先日は御病中御來臨被_レ成下、御厚情忝奉_レ存候。扱御願相濟御安心可_レ被_レ成候。就ては早々御歸國之御存念何に近日に拜顔萬縷可_レ申述_一候。御書附二冊寛りと拜見仕候、夫々敬承之至に御座候、則上納仕候。小拙も今以甘快之地に至り不_レ申候。一兩日は爲_レ臥治_一引入罷在候。先拜復迄、不_レ取肯_一拜呈仕候。以上。

十月十四日

小楠拜

壹州君

(河野修造藏)

宿許へ

明治元年十月二十五日

小楠在京都

西田^(八左衛門)出立にて一書拜呈仕候。愈益御安全に被_レ成_一御座、奉_レ恐悅_一候。隨て私事相替り不_レ申候。頃日來河瀬・新堀・牛島歸郷にて此許い才之成り行は夫々御承知被_レ成候と奉_レ存候。爾來は何も相替り不_レ申、太

政官至つて無事に有_レ之日々出勤仕候。私病氣も相替り不_レ申、今以歩行出來不_レ申甚迷惑御座候。禁酒・二タたき・食禁等嚴重にて御憐察可_レ被_レ下候。一昨日は去月二十一日之御狀到着、難_レ有拜見仕候。青苔別て難_レ有早速拜味仕候。新堀持歸り諸品物追々相重り思召に相叶候へかすと奉_レ存候。此節好き便義にて左之通りさし出申候。

太政官拜領之曆

至誠院様へ しゆす帶

大玄 帶

しりめん切 一包

すきぐし 二包

繪 帶

壽加 帶

せ加 べに・おしろい

おみや さんきよく一箱

どふぞく思召に叶ひ候様祈り申候。おいつ夫婦へも何ぞと存候へ共此節は届き不_レ申、後便に遣し可_レ申候。

一 古小袖之儀山田より承知仕候。然處此節は最早うり切候程にて品物も悪しく代料殊之外高價にて宜敷無御座候。來二月に成り諸質物等一同にうりさばき候間其迄相待候方宜敷御座候間左様御承知可被下候。い才之儀は西田より御承知可被下候。何も大略申上候。以上。

十月二十五日

横井平四郎

至 誠 院 様
お つ せ 殿
又 雄 殿

尙々時分柄御自愛專一に奉存候。新堀よりは金子御受取被成候事に奉存候。何もかしく。

(横井時靖藏)

二三四 宿 許

へ

明治元年十月二十八日

小楠在京都

返すくこんべいとふさし上申候間夫々御配分之事。

内山又助歸國にて一書拜呈仕候。益御機嫌能奉恐悦候。最早新堀到着、引き續き西田も追々に着可仕、此許之次第い才に御承知と奉存候。近日何も相替り不申、私事も一兩日は少しく宜敷方にて不替日々出勤仕候。嚴寒甚恐敷如何哉と案勞仕候。扱來月二十九日は御母様御正忌にて、幸便に御座候間

鹽松竹さし上申候。御供被成下度奉存候。

當暮は御世話被成候と奉存候。山形借用を此許にて返し申候間左様御承知可被成候。新堀より暮迄兩度に百兩の三分二遣しに相成善之約條、餘の一分は來春に返し候事追々申上候通りにて御受取可被成候。其外葦北・布田古役場等にて彼是御押移は可被爲出來奉存候。私も一體太政官之都合は十分之都合にて、近來共は餘り御用ひ過ぎ候位にて何も心痛も無之、唯々舊麻に苦勞仕、寒中も唯只通りにて押移候へばどふなりこふなり無理勤に參り、來春暖和に至ては必ず宜敷可有之岩佐見込にて御座候へば夫を頼みに日々と罷過申候。若し今より一段惡敷出勤出來兼候様にも相成候へば夫れは天命にて致し方無之、正月にも歸郷可仕覺悟罷在候、左様御承知可被下候。此段迄申上度、餘は後便言上可仕候。以上。

十月二十八日

横井平四郎

至 誠 院 様
お つ せ 殿
又 雄 殿

尙々新堀・西田届之品々定て一同に相成候と奉存候、御氣に入れかすと想像仕候。來春にも滯留仕候へば色々さし出候心持に御座候。お逸にも相待居候様御申聞可被下候。將又松茂にも上ワ張り

遣し可_レ申候間紋鑑遣候様御申聞可_レ被_レ下候。此前之者はふん此許大勢の召遣物入も莫大に御座候へども過分之拜領故珍敷大名同様之暮し方にて我れながら驚入申候。岩男(後貞)も關東に於て縣令の様なる御役被_二仰付_一けしからず精勤之由珍重に御座候、定て留守大悦と奉_レ存候。(奉吉)内藤何方に居候や分り不_レ申候處一兩日前に紙面到來、當時は庄内城下に居候由、年内には歸京可_レ仕奉_レ存候。書物并御書出しやら古るき書き附類寒中蟲ぼし御失念有_二御座_一間敷候事。
帶は壽加氣に入候や、如何。(下欠)

(横井時靖藏)

二二五 宿 許

明治元年十一月四日

小楠在京都

一書拜呈仕候。益御安泰に被_レ成_二御座_一、奉_二恐悦_一候。隨て私事相替り不_レ申候、御安心可_レ被_二成下_一候。此許彌以御靜安、市中別て取り締り一統之受方大によろしく、八月來は例の暗殺も一切無_レ之、誠に目出度至に御座候。武士は洛中に滿々いたし居候へ共けんくわと云もの絶て無_二御座_一候。是等にて一體の成り行御承知可_レ被_レ成候。江戸表も大に御都合よろしく大に居り合候様子申來り候。此上は一日も早く還幸被_レ遊候様祈り申候。私も日々出仕、いまに早引は仕候。種々之御用繁多にて病體困り入申候。然し只今之處はよしともあしくとも替り不_レ申、寒中如何に可_レ有_二御座_一哉と案じ申候。寒中さえ兎や角と送り候へば春暖に相成りては必ず都合よろしく可_レ有_二御座_一と玄珪も見込み、相樂居申候。只今通りにては

十に七八は無難に當年は送り可_レ申、先づ滯京之覺悟仕罷在候。追々申上候通り酒を初給物一切好物は被_レ禁、夫れのみならず女共之不都合にて朝暮何の樂みも無_レ之、且閑歩遊行一切出來不_レ申誠に徒然之至り、是迄無_レ之眞之苦界に落入り養生一偏に罷在候間、何ぞ樂みに相成徒然を忘れ候様にと種々色々いたし候へ共生來格別の物數寄絶て無_レ之是には甚當惑仕候。近來は道具屋呼寄せ色々のもの買ひ求め聊樂み申候。

古鏡千年以前(唐)の物也から物之銅之花瓶是も上程古く有之、細本杯には比類有之之間敷唐物菓子入れ・古鏡ふたのあし屋がま・唐やきの手鹽十錢手其外茶道具種々、肥前やき種々追々に求申候。是はよ程に樂に相成り申候。何に當暮は様々手に入り可_レ申候。然る處御承知被_レ成候通りよき物すきにてかわんとうち立候へば夥しき物入と相成り、最早

此の樂に百兩以上之失費仕候。何に暮には色々手に入可_レ申候。御一笑可_レ被_レ下候。

西田も一兩日には着可_レ仕候。此許之次第御承知可_レ被_レ成候。内山又助一昨日出立、二々包み頼みさし上申候。(不敬)おいつ方(横井半右衛門)竹部に届け吳候様頼置候。自然届き不_レ申候へば右二軒に御尋可_レ被_レ成候。此段迄申上度、大略仕候。以上。

十一月四日

横井平四郎

至誠院様

おつせ殿

又 雄 殿

尙々たばこは是非々々急々御送りの方吳々奉_レ待候。先頃千左衛門持合御送り被_レ下候處よ程のみあしくこまり入申候。先年も此たばこには毎々こまり入申候。何分至急に御送りの處萬々奉_レ祈候事。
(横井時靖藏)

二二六 宿 許

明治元年十一月十二日

小楠在京都

返すくエビス講の切れも最早着と被_レ存申候。ミヤサン正月衣類出来可_レ申候。私も衣類は色々拵へ候内八丈嶋のウツギ替り嶋にて二ツ拵へ、是は大分見事に御座候。外は當用出勤之品迄に御座候。中々太政官誰々もみやびやか成る衣類にて、袴にて申候へばもめん表を用ひ候人は一人も無_レ之、是にて御承知可_レ被_レ成候事。

二ノ丸内何某(米田家)太助久の勤歸りに付一書拜呈仕候。寒中益御安泰に被_レ成_二御座_一、奉_二恐悅_一候。此許一體至て無事平安にて御座候。

大守様今日御發駕關東に御下に相成り申候。近來は日々諸藩兵隊歸京、太政官に被_二召出_一御慰勞御酒肴頂戴仕候。(原註、御母上様)大宮様よりも格別之御いたわり被_二仰出_一候事に御座候。尤戦功を被_レ賞候は後日之事にて、是は不_二取肯_一御あいさつにて御座候。

去月中旬江戸脱走之軍艦七八艘箱館に上陸及_二戦争_一、箱館無人數にて敗軍、同所被_二奪取_一申候。夫より松前に押寄せ是も乗り取候との報告昨日參り申候。賊は船にて出沒いたし、大分いたしにくき事に候へ共とても僅の人數、外に應援と申事も無_レ之、不_レ遠平定は必定にて安心いたし居候へ共、沿海之港人數も無_レ之場所えは物取りに上陸亂暴仕候は必定と被_レ存、にくき奴原に御座候。

西田も今比は沼山にも參上仕候と被_レ存、何角御承知可_レ被_レ成候。私病氣は大分よろしく不_二相替_一日々出勤仕候。極嚴寒に相成候へば定て不_レ鹽梅に可_レ有_二御座_一、今より案じ居申候。誠に困窮の病にて不_二相替_一酒は申に不_レ及給物(ウ)むまきは禁物にて日々ニタたきを給_レ日を送り申候。先書にも申上候通り色々之物かひ杯いたし心を慰め申候。當月廿日過には山形出立にて其節はお逸・おつせに物數奇に作らせ候かんざし下し可_レ申候。外に(下休也)いん居にさせる遣し申候。是は物數奇にては無_レ之、用方一便(マ)に作らせ申候。當年も彼是といたし最早僅に相成り、過半以上病牀にて日を送り扱々恐入候事に御座候。好便にて此段迄拜呈仕候。以上。

十一月十二日

横井平四郎

至 誠 院 様
お つ せ 殿
又 雄 殿

尙々唯々御自愛御申分無御座様祈參らせ候。私は何も扱置き養生一偏に罷在り御安心可被下候。寒中養生之爲出勤も日々不仕事は輔相始何方も御承知にて、氣まゝに出勤いたし候様との事にて甚だ恐多き事に奉存候。然し實病いたし方無御座候。

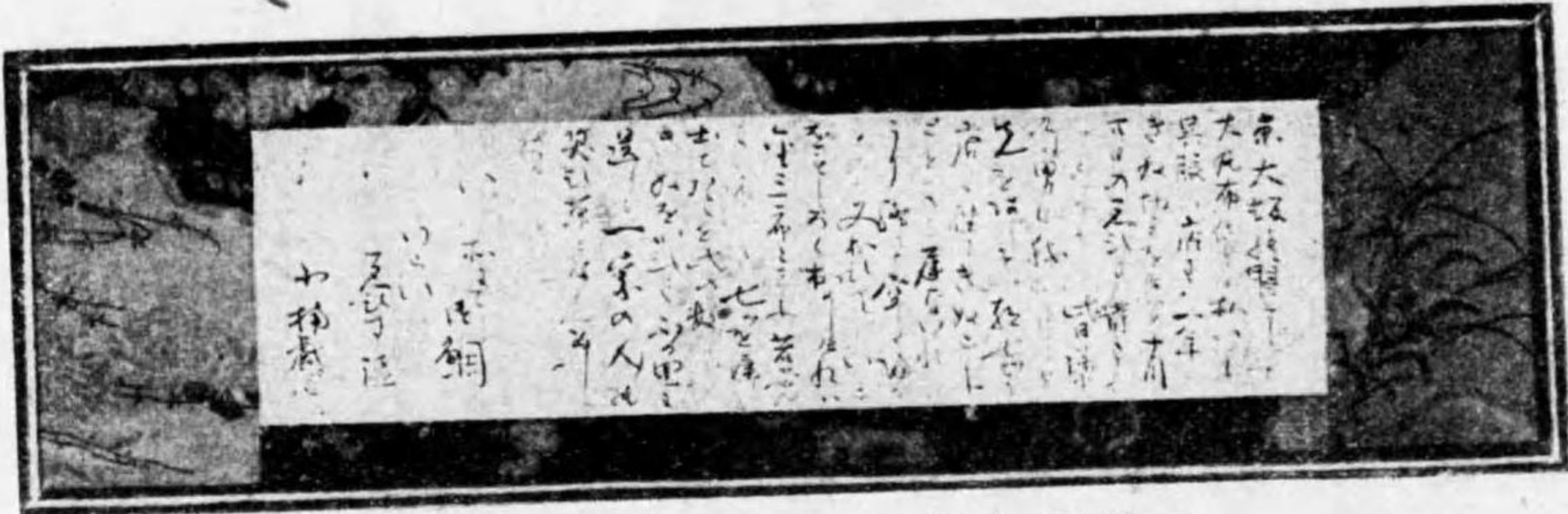
書物類・懸物等寒ぼし御失念無之様奉希候。先比も申上候坂口に遣し置候懸物其外宮川方かに有之諸品物御取り返し被成度萬々奉存候。何も此段申上縮候。以上。

追 啓

龍文堂の鐵びん油付き居候は定て取れ不申と奉存候。此油ぬぎの方段々承り候處うぐいすのふんを水に和しぬり付け其の上えに紙を水ばり致し、一兩日も二三度付け替え置き候えは必ず油ぬけ候事の由。此外には別に仕法無之故極々秘密に致し候。夫れ故うぐいすのふんは此許にて極々高直に有之候。御許にて鳥屋には定てうぐいすのふん可有之御求被成御仕方可被成候。久しき油にて何に十日餘も懸り可申哉、度々御付け替御心見可被成候。

たばこ最早切申候。先頃千左衛門所持の品は極々あしく給られ不申、大迷惑仕候。此許にて求め候ても只々根段斗高直にて三十服には及不申、當時口に給心能きものは唯此たばこ斗にて外に何之樂も無之、是以て拂底に相成候ては實にいたし方も無之候。御憐み被下急々に御送りの方萬々奉希候事。

(横井時靖藏)



小楠比惠壽切宿に送る文 (海老名一雄藏)

本文の返す書に「エビス講の切れも最早着と被存申候」とあるは小楠が十月二十日京都で催される惠比須講の風習に興味をもち買求めさせた絹切類を宿許に送つたもので、彼はその時之に關する一文と俳句とを添へた。それは左の如きもので彼の一女みや子の嫁せる海老名家に頼となつて保存されてゐるが、その額の裝潢に用ひられてゐる切地は小楠が此の惠比須講で購求したものであるさうな。

京大坂の習として大丸・布袋屋杯いふ呉服の店には、一年のきぬ切れを集め、十月二十日のるびす講にうるることなり。此日は洛中の男女我おとらじと先をあらそい朝七(午前四時)つより店に往てきぬこふことにて、遅なわればうり終りて空しく歸るものも又おびたし。いとおもしろくおかしければ金三郎と云ふ若黨に命じて七ツを遅しと出でたせ、此の數々のきぬをかひてふる里に送りて、一家の人々の笑ひ草となん爲し侍るとして

いつ所にて御鯛わらいのるびす講

小楠戯に呈

(海老名一雄藏)

二二七 宿 許

明治元年十一月二十一日 小楠在京都

十月十九日・當月五日之御狀一同に到着仕、先以御揃益御安泰に被_レ成_二御座、奉_二恐賀_一候。此許之次第は新堀・牛島着にてい才御聞取被_レ成候と奉_レ存候。其後一體相替り不_レ申無事にて御座候。主上還幸も當年は不_レ被_レ爲_二出來、何に來春に相成可_レ申候。左平太共より書狀さし上候由無事之段大慶仕候。先比仕出しの書狀も當月初には到着いたしたると被_レ考、兩人もさぞ大慶仕る事と奉_レ存候。近日是より書狀仕出しの筈にて彼之方返事も來月末には參り可_レ申候。

御註文之儀申上候付別紙被_二仰下_一夫々奉_レ畏候。然ば段々算用仕候處當暮は漸く年越出來候位にて誠に困り入申候間來春に至りさし出可_レ申候。出銀之大略

- 一、五百兩 江口純大困窮にて致_二借用_一候。(貸すの意)
- 一、四百ドル アメリカに遣す。
- 一、二百ドル 來る正月尙又アメリカに遣す。
- 一、二百兩 大坂に着より閏四月迄月給無_レ之に付御屋敷より拜借當暮返納。(細川家)
- 一、百兩 出立前竹崎共より借用、隱居に頼み返辨。
- 一、百兩 さし上候分。

此外河瀬に三十兩、西田に二十兩其外拾兩位は何人にも遣し一切返し不_レ申候事。

惣て月給六百兩之處東北之兵亂にて半高三百兩は太政官中申談さし上置候間三百兩づゝ被_レ下候。當時召仕候男女拾六人其外やくかひ五六人は有_レ之夥敷物入、且病中夫々之費えにて彼是入費甚敷僅に越年仕候。右之次第故當暮は何も心に任せ不_レ申、來春に至り少し寛ぎ候へば早速さし出可_レ申候。左様御承知可_レ被_レ下候。

私病氣痲疾之本病寸斗快敷無_二御座_一今以步行一切出來不_レ申候。此寒中に先日よりも當り候て出血いたし大に案勞仕候處昨夜より相治り候へ共引入養生仕候。岩佐申分此寒中さえ凌ぎ來春に至り暖和に相成候へば漸々全快にも至り可_レ申との事にて夫を頼に一日々々送り候へ共、最早久敷舊病且老體實は全快之覺え無_二御座_一、正月末・二月中旬にも至りやはれよろしく無_二御座_一候へば是非共御斷申上引取不_レ申候ては相立不_レ申候。右之心得に罷在候間家司役どふか竹崎列より世話いたし候様に申來り候へ共今暫く見合、正月・二月に至り私病氣聊にても快き方に相成相勤め候心得に落着之上差登し被_レ下候様奉_レ願候、只今登せ候儀は相斷申候。此段は急に竹崎列と御申談可_レ被_レ下候。山形歸國にて右迄急に拜呈仕候以上。

十一月廿一日

横井平四郎

至 誠 院 様

横井小楠遺稿

おつせ殿
又雄殿

尚々寒中御自愛專一に奉存候。まん引えび(零餘子)むかご被贈下難有、早速調味仕候。
又雄より左傳申遣候處、此許是等之書物は甚高直にて却て熊本にて求め候方可然奉存候間誰に
ぞ頼み御求可被成候。夫れ迄は水導屋敷(水領家)に左傳は御座候間御借り被成置可然候。
アメリカ便り御座候て兄弟平安之段珍重に奉存候。色々種物遣し候由御樂と奉存候。當春かうへ
置候ははへ申たる哉、御知せ可被下事。

(横井時靖藏)

二三八 宿許へ

明治元年十一月廿九日

小楠在京都

村上養子重次郎出立にて拜呈仕候。益御機嫌よく奉恐悦候。隨て私も相替り不申奉勤仕候。此許彌以
御都合よろしく、い才之儀は山形一兩日前に出立にて書状も仕出し置き申候間略仕候。御國も馬鹿な議
論沸騰漸々治平に相成との相聞、此節左京亮様御歸國にては方向も定り可申、此許に出京いたし候
者は三日を経ず悔心仕候。必竟田舎もの御國之外は一切存じ不申より事起り、一旦は御國も如何と大
に心遣も仕候へ共先々目出度相替り此上なき大慶に御座候。今日は御母様御忌日にてにしめもの杯

こしらへ茶を入申候。先頃さし出候品々最早到着、今日之御間に逢ひ申たる哉と奉存候。近日上林手代
出立に付い才可申上、此段迄略呈仕候。以上。

十一月廿九日

横井平四郎

至誠院様
おつせ殿
又雄殿

尚々時分柄御自愛專一に奉存候。

先頃申上候極く下りの田地一段半か二段にても當冬はどふとぞ御求被成置一度、此許にて出來仕
候柳(行李)ごふりの柳は但馬國より出申候處、右柳手に入り不遠下し申筈に御座候。是は大き成る便利
之由、代料は千左衛門に御借被成置一度。山形へ頼置候書状にもい才申上候へ共自然及延引も
難斗、尚又申上候。

又雄・おみや彌以出精珍重千萬悦び入申候。彌以出精禮記は定て終りたると被存、おみや手本も幾
くつも上りたる事と存候事。

(横井時靖藏)

書中「先頃申上候極下りの田地云々」とあるが、その先頃の手紙は見當らぬ。

二二九 寺倉秋堤へ

明治元年十二月九日

小楠在京都
寺倉在熊本

寺倉名は安城、坪井信道に就きて西洋醫術を修め、肥後の西洋醫學の興隆に盡瘁し特に種痘の普及には大いに功あり、小楠とは親交ありて小楠門下にして醫を志すものは多く秋堤の門に入つた。本書は小楠宛及に斃るゝ約一ヶ月前に認められたもの。

一書拜呈仕候。愈御安康に被_レ成_二御精勤_一、珍重之至に奉_レ存候。隨て小生依舊無事に相勤罷在り、御懸念被_レ下間敷候。是迄何角押移御無汰沙に罷過申候。然ば此許近々 還幸にて彼是多事に御座候。然し御早々にて恐悅至極之至奉_レ存候。來春は何に何角之御議定も可_レ被_二 仰出_一、何に府・藩・縣之御制度も相立、天下一統方向も定り可_レ申、御國許も一旦は大分之動搖も有_レ之候へ共當今之成り行且 左京亮様も御歸國にて治平に歸し可_レ申候。却説小生病氣も今以勝れ不_レ申、い才は高橋文貞歸郷にて夫々御承知可_レ被_レ下候。兎角舊病六ヶ敷、勉て日々出仕はいたし候へ共暫づゝにて早引仕、僅七八丁の出仕も歩行一切出來不_レ申、駕にて罷出候位、とても春長く相勤は出來不_レ申甚苦惱之至に御座候。とても不_レ遠歸國と決心罷在候。

宿本格別之病人も無_二御座_一哉、然し萬端御依頼仕居候へば此上ながら何も奉_二頼上_一候。餘り失敬に罷過ぎ、時分柄相伺候迄、早略仕候。已上。

十二月九日

小楠 拜

秋 堤 様

尙々時分柄御自愛專一に奉_レ存候。石炭大に御都合宜敷旨萬々御大慶と奉_レ存候。就ては病院之方如何、來春は御取り懸りかと奉_レ存候。此許病院大坂に來春はうち立申筈にて、どふぞ都合宜敷行れ候へかしと奉_レ存候。不破いん居如何暮し居可_レ申哉、不_二相替_一時々痛飲行れ候事と想像仕候。小生去夏來一切禁酒、誠にいたし方無_レ之、困り入申候。最早行末一生之禁物と決心いたし候へば更にほしくも無_レ之、唯々淋しく御座候。何ぞ外に替へものと存候へ共御承知之不_レ風佳何之物數奇も無_レ之候。

(武田元熙藏)

IIIIO 宿 許

へ

明治元年十二月十日

小楠在京都

此の書は前文を失つて居るが優渥なる天恩に感激して報國の赤誠に燃えるも、二豎纏綿曠職の虞ありとて遂に官を辭して歸らざるを得ざるの苦衷を吐露せるもの。

此上はすらりと御斷御免被_二 仰付_一、正月末・二月初此許出立仕候様奉_レ存候。然し萬々一も春和に至りよろしき方に相成候へば外に何も子細無_レ之唯病氣之事故滯京仕る義も難_レ計御座候。一躰私事太政官中にて第一の年かさに有_レ之、自然と上下よりも推し立られ、誠に大順境にて何のさし障り無_レ之、存念も漸々相立勢に御座候處、此の難病相煩誠に以殘念千萬に奉_レ存候へ共是即天命にて一日も早く御免歸

郷仕、本の沼山之匹夫に歸し天年を終候へば本望相達し申候。從來此節之御登用實に無_三存懸_一仕合にて匹夫之身を以て四位之官を給り天下一新之御政事に預り候は二千年來其例し無_レ之、且又他之參與は京師に出懸りの面々直に被_三仰付_一、列藩在住之者被_レ召候は三岡と私井木戸準一郎之三人迄にて實に非常之御拔擢は骨に透り難_レ有仕合に奉_レ存候。天恩重大無限之至り、何之御奉公も出來不_レ申歸國仕るは重々奉_三恐入_一候。乍_レ然不_レ可_レ致之病躰は何方えも貫通いたし候へば責ての安心と奉_レ存候。右の次第に付御許にても其御心得被_三成下_一、諸事御配意奉_三希上_一候。當月末には尙い才可_三申上_一、先今日之次第言上仕候。以上。

十二月十日

横井平四郎

至 誠 院 様
お つ せ 殿
又 雄 殿

尙々時下御愛養第一に奉_レ存候。追々申上候極下りの田地は何分當暮手に入候へかすと奉_レ存候。岩男御袋・彌富・桂より書狀參り候へ共返事出來不_レ申候、可_レ然御傳可_レ被_レ下候。おみやふみ見事々々出精之段驚入申候。正月も十五日頃よりは手習初り可_レ申候。暮れ・正月のひまには手まりうち想ひやり申候事。

追 啓

追啓仕候。昨夜内藤着いたし申候、是は直に軍務官徴兵懸りの方に被_三召出_一候筈にて此許滞在仕候。今日虎之助殿着大方私方に直に被_レ參候事と奉_レ存候。私寓居も餘り間狭にて客來は多く困窮仕候間昨日寺町通り竹屋町上る所四條殿懸け屋敷に轉居仕候。此家は十分之作事之上間取りも廣大に有_レ之、私居候處座敷にて十二疊半に次之間十疊九尺床にて違いたな_(細)杯美を盡し此方角にて第一之美宅に有_レ之、其より次は幾間も有_レ之中々廣大なる屋敷、庭も夫に應じ大分のクツロギに御座候。必竟病中間狭にては中々鬱屈いたし候より引き移り申候。右之通りにて虎之助殿到留さし障り不_レ申候。左京亮様初參らせ大に御開明にて御國も此節は開らせ可_レ申候。彌富・桂に羽織のひぼ遣し申候、是にて宜しく可_レ有_三御座_一候。太政官日誌外に京都府日誌・鎮將府日誌等さし出申候。是等は大人を聞き候一助と奉_レ存候。最早大分押つめ、月末には今一度書狀さし出可_レ申候。此段迄大略申縮候。以上。

十 四 日

小 楠 拜

尙々長谷川御役御免に相成り、就ては彼は大心配仕候事。
大守様供奉被_三仰付_一置候處御免に相成り、いまだ如何成御模様か相知れ不_レ申候。何分笑止なる事と竊に痛心仕候事。
(以上本文・追啓横井時靖藏)

二三二 福岡孝弟へ

明治元年十二月十三日

小楠、福岡
在京都

御出仕可_レ被_レ成、御精勵奉_レ賀候。小生此節は大分之起りにて出血今以止り不_レ申、隨て疼痛も發し、四五日は出仕出來申間敷重々奉_レ恐入_レ候。扱薩州石炭願書は御附紙之通りにて御廻しの方可_レ然奉_レ存候。御咄し合之山河一條は後日之御評議可_レ有_レ御座_レ候。乍_レ憚_レ小生印御附紙に御押可_レ被_レ下候。此段拜呈仕候。以上。

十二月十三日

横井

福岡様

(横井時靖藏)

二三三 宿許へ

明治元年十二月二十日

小楠在京都

返すく三等以上は家内引き越之儀御達にも相成候事にて、熊本之方さし支は有_レ御座_レ間敷、病氣少し宜敷方に向申候へば來月廿日比迄には急速に歸るか滯るか兩様可_レ申上、何分滯京を願候事にて、至誠院様必々御うち立可_レ被_レ成留守はどふとぞ可_レ相成_レ一家舉て御出を奉_レ希候。女は兩人程は御つれ可_レ被_レ成、本書にも申上候通り此許之者は實以致方無_レ御座_レ、只々金をむさぼり取る迄之

者共にて一人たりとも置くべき者は無_レ御座_レ候事。

御飛脚立候に付一書奉呈仕候。月迫に罷成り愈御安泰に被_レ成_レ御座_レ、奉_レ恐賀_レ候。此許相替り不_レ申候内來る二十二日、主上還幸被_レ遊奉_レ恐悅_レ候。就ては一體にぎくしく市中尤大慶罷在候。私事病氣寸斗宜敷無_レ御座_レ既に十日餘り引入罷在、何分還幸には罷出度候へ共如何可_レ有_レ御座_レ哉、内藤も先日歸京且長崎付方も參り候間五六日前より朝夕二度づゝ坐浴湯を始候。又「フーシヒ」さし方も取り行ひ來月十五日比迄十分之治療仕候覺悟に御座候。尤も藥も替へ申候。自然此節之治療功能無_レ御座_レ候へば最早致し方無_レ御座_レ候。十五日過には早々辭職之願書さし出し、二月初には此許出立之内決仕候。若又天幸を得治療之功能御座候て少々にてもよろしき方に相成候へば勿論滯京御奉公さしはまり候心得は申迄も無_レ御座_レ候。是迄之次第女も置き候へ共全體此地之者は殊之外惡習甚敷、介抱杯と申は思ひも寄り不_レ申、却てかんしやくを起し候迄にて一人も可_レ然者無_レ御座_レ、既に先月來は盡くおひ出し只今は一人も置き不_レ申候。右之次第にて滯京仕に決し候へばおつせ・壽加急に上京いたし候様奉_レ存候。

至誠院様へも能き折柄にて御上京御うち立被_レ遊候へば此上御座なき都合にて、沼山えは不破いん居にても留守番に御呼び被_レ成小供迄引きこかしにて御出懸け被_レ成度萬々奉_レ希候。幸去る十二日に寺町通り竹屋町に轉居仕、間敷も數々にて二階も二個所有_レ之大様二百枚餘もたゝみ數御座候のみならず、殊之外美麗成る家居にてどりしこ御出といへ共何の支も無_レ御座_レ候。夫れなれば此許之女は決して宜敷

無御座、壽加外に兩人斗御つれ被_レ成候方に御心配可_レ被_レ成候。京都見物には存外出懸候者も多分可_レ有_二御座_一候。何分此節は治療之功能有_二御座_一度萬々奉_レ祈候。い才は四五日も過ぎ虎之助殿出立にて駒井に能々咄し置候間同人より可_二申上_一候。何分々々治療尤_レ大切之時にて十二分之養生仕候。典次早春は又々罷登り候様申越候へ共右之次第にて暫の間見合居。病氣宜敷方にて滞在いたし候へば早速其趣可_二申上_一候間御一同に罷上り途中世話いたし候様御申談可_レ被_レ成候。此段拜呈、何も虎_(米田)どの歸りに萬縷可_二申上_一候。以上。

十二月二十日

横井平四郎

至 誠 院 様
お つ せ 殿
又 雄 殿

尙々此許近日寒氣強く暮し兼申候、御許如何と想像仕候。彌富列え可_レ然御傳可_レ被_レ下候。以上。

(横井時靖藏)

・ 二二三三 宿 許

明治元年十二月二十六日

小楠在京都

此の書面は兎又_二に覽る_一、九日前のもの。此の後にも出したかはわからぬが、宿許への書面で編者の目に觸れたの、中ではこれが

最後のものである。

(前文缺)愈々御安泰に被_レ成_二御座_一奉_二恐悦_一候。此許 御着輦にて一體にぎやぎ市中大競に御座候。太政官日誌・京都府布令書等さし出し申候。且菓子箱奉呈仕候。

私不快も相替り不_レ申日々出勤は仕り申候。然し出血とんと治り兼且疼痛頻作も同様にて誠に困り入申候。内藤歸りにて種々心配、どふぞ來月末迄には少しはよろしき方に向ひ候へかすと奉_レ存候。い才は先便に縷々申上候通りにて、實以痛心仕候。

御着輦後彼是多事、昨夕も乍_三不快_一、岩倉公より呼に參り罷越、七_(午後四時)頃より夜四_(十時)ツ過に歸り候位にて致しかたなき次第に御座候。正月は四日頃より出仕初り、何やらかやら大小事件様々にて此不鹽梅にては甚當惑千萬に奉_レ存候。先便には十五日頃にて病氣之鹽梅に應じ歸るとも留るとも決定仕ると申上候へ、其何様二月中旬頃にも至り進退決定と奉_レ存候。病氣宜敷方にて彌滞留に決し候へば先便に申上候通り至誠院様初まいらせ何分御出懸け被_レ成度萬々奉_レ頼候。左候へば女も兩人斗は御つれ被_レ成度、とても此地のものは甚よろしう無_二御座_一候。何様來月末迄にどふとも決定之次第可_二申上_一唯々御心組に申上置候。

八月以來さし出し置候月給當暮一同に拜領、誠に難_レ有仕合に奉_レ存候。右之内正金にて三百兩替せに致し、さし出申候。御許御勘定局に同姓之内より正金にて受取候様御頼み可_レ被_レ成候。此金之内御國札拾貫

目分御引き除け山鹿江上・井上に御返辨可_レ被_レ成候。其餘は千左衛門に御預け被_レ成置_二御上京に決し候へば其の費用に御用ひ可_レ被_レ成候。尤今日此許御勘定に替せにさし出申候間根の廻り候は正月中旬・下旬にも至り可_レ申、左様御承知可_レ被_レ成下_一候。近日に虎之助どの歸にて其節い才可_レ申上、先此段迄申上縮候。以上。

十二月廿六日

横井平四郎

至 誠 院 様

お つ せ 殿

又 雄 殿

尚々長谷川(前出)も笑止千萬、致方無_二御座_一候。當暮は御さびしく可_レ被_レ爲_レ在、私は不思議に都にて年を迎へ、若者上下二十二人相手に越年仕候。外出之時も大勢之供廻り、俄之大名に罷成りおかしく御座候。種々玩物相求め夫を相手に樂み申候。酒も不_二相替_一禁制にて實は大困窮之至りにて御察し可_レ被_レ下候。此段迄大略申上候。以上。

(横井時靖藏)

二三四 元田永孚へ

明治元年十二月二十七日

小楠在京都
元田在熊本

一書拜呈仕候。歳末愈御安康に被_レ成_二御座_一、珍重之至に奉_レ存候。此許相替り不_レ申、御安心可_レ被_レ成候。

一躰之次第は虎之助殿・長谷川一兩日に歸國、何も御承知可_レ被_レ成、大略仕候。景光短刀御返し被_レ下、千萬忝々慥に拜受仕候。此許短刀流行、相應之物所持不_レ仕、御庇にて間に合拜謝難_二申盡_一御座候。代料正金百兩長谷川に附與致候間御受取可_レ被_レ成下_一候。大に取り紛、此段迄大略申縮候。以上。

十二月廿七日

小楠拜

茶 陽 先生

尚々御全家様へ可_レ然御傳へ可_レ被_レ下候。龜之丞公も大に壯にて御安心可_レ被_レ成候。小拙不快も寸斗快は無_二御座_一候。委細は虎公より御承知可_レ被_レ下候事。

(元田竹彦藏)

右書面は小楠が刺客の兇刃に斃るゝ八日前のもので、文中の景光は今なほ横井(時靖)家に藏せられてゐる。又龜之丞とは元田茶陽の嫡男にて小楠に隨從して京都に在る人。

以下年代不明の分(順序不同)

二三五 立花主計へ

主計は柳河藩の家老で、柳河の所謂肥後學―小楠の實學―を信奉せる人。此の書は嘉永・安政年間に認めたものかと思ふが、文中の幼君は立花鑑寛のことらしいから、事によるとその以前に書き送つたものかもしれぬ。

横井小楠遺稿

一書呈上仕候。秋暑之砌増御安泰に被_レ成_二御入_一、珍重之御事に奉_レ存候。然ば御懇篤之御紙面被_二成下_一、忝々拜見仕候。先以去秋は折角御貢來之處初て奉_レ接_二鳳眉_一、失禮而耳相働、爾來書狀奉呈不_レ仕恐入奉_レ存候。必竟書生懶惰之常態御海恕奉_レ希候。

幼君輔佐之書被_二仰下_一承知仕候。鷹山公輔儲君と申し御著述有_レ之、大臣輔道之心得至れり盡せりと奉_レ存候。是は南亭餘音之中に收有_レ之、此度さし上度奉_レ存候へども丁數大分多御座候て寫取出來不_レ申殘念に奉_レ存候。山崎門下稻葉正義と申人其家老之求に應じ著候幼君輔佐之書一通寫し進呈仕候。御一覽可_レ被_レ成候。此正義と申人は崎門にてもよ程達德之儒者にて識見も又格別に有_レ之、世之所_レ謂俗學腐儒にては決して無_レ之床しき人物にて御座候。其故此書も識見通りにて面白奉_レ存候。乍_レ去とても大體之道理を説候迄に御座候へば、作用之處は是等より推して考へ其宜敷を撰び可_レ申奉_レ存候。所詮之處君心を格し候は大臣たる人之一心誠實之感動に本き候へば、とても法格作用之力迄にて及べき事にては無_レ之候。將又作用之第一義は君側之人物を撰び御德義を奉_レ輔候儀尤大切なる事にて、其人物を擇び候は大臣之明不明に有_レ之、如何様とも不_レ被_レ申候へ共大抵其條目を立候へば第一學術醇正にして深く聖賢之道を信じ候人。

天下列國何方にても學者と申候へば記誦之俗儒扱は文・詩を取りはやし候もの迄にて、聖賢之道を志懸立置候學者は先は種消へ仕候へば、學術醇正と申課目的當之人物は中々以得がたく可_レ有_二御座_一候。乍_レ去其中にて天資之忠實な

る人か學ぶ所の筋よろしく有_レ之候か百歩よりも五十歩可_レ成丈擇び、譬ひ文藝乏しく御座候とも其人物心入之宜敷を擧げ用可_レ申奉_レ存候。

其次は忠實公正之人。

學問も無_レ之通俗之人にても心すなをに氣偏ならず善事を好み奉_二仕君_一之少しにてもよかれがしと信實に思ふ人にて御座候。

又決して擧用べからず、勤め懸りなる人も必ず斥べきものは第一智數敏給之人。

是種之人御側に有候へば萬事御便利に相成り、出來ざる事も出來、成まじき事も成り君心を蠱巫し聰明を閉塞し尤以可_レ恐ものに奉_レ存候。

柔媚奉承之人。

是通例能き近習之人物と被_二見立_一候風の人にて御座候。然るに此種の人には君德に益なきのみならず、極て害する所多有_レ之、用間敷事に奉_レ存候。將又柔媚之人は内心は必ず險敷ものにて兼ては制し易く御座候へ共、一旦君寵を得候へば存外之權を振ひ小人之尤きものと罷成申候。大抵古今宦官之小人は威福を擅し忠良を害し大にして其國天下を亡すに至候もの共其跡より見候へば何も奸智逞しき様に聞へ候へども曾以左様斗にては有_二御座_一間敷、其初は必ず柔媚奉承底のものにて大臣萬事制し易と何心無く存居候が其君寵を得に隨て次第に威權を振ひ、却て牽制を受け果は大亂にも至申候。嚴斗可_レ心得_二事に奉_レ存候。

孟子に曰泄・柳申詳無_レ人乎繆公之側不能_レ安_二其身_一と有_レ之君側之重如此、大臣之職分尤以慎み可_レ

申事に奉_レ存候。蜀之人物諸葛公を除之外は費禕・董允等は第一等にて有_レ之候。然に此面々何も君側に被_レ用候故劉禪之暗主にても宮中・府中一體と相成、是孔明之其身を安じられ候所以にて人之使様誠に以感心仕候。後來黃皓君側に居候て忽に破亡に至り、此場に及候ては譬孔明被_レ居候ても致方有_二御座_一間敷治國之大要處大臣之尤心を盡し可_レ申處此に落着可_レ仕奉_レ存候。

大小臣下之賢不_レ足_レ恃焉、政令法度之宜不_レ足_レ恃焉、所_レ恃在_二人君之心、故曰格_二君心之非、君心正則好惡公、好惡公則君子小人之分明、君子小人分明斯以進_二君子退_二小人、國何得_レ不_レ治哉。

右刪記中之一條附呈

米澤公御事業御吟味被_レ成彌以御敬服被_レ成候段、乍_レ憚重々恐悅此上有_二御座_一間敷奉_レ存候。被_二仰下_一候通り 皇朝にては三代之治道は獨此公のみと奉_レ存候。彼漢土に於ては秦・漢以來種々明主も被_レ出候へども總て功名上に力を被_レ用此民を治之實心無_レ之候間、其始は稍可_レ觀政事も御座候へども中年以後は一向に廢弛に至り、一人として始末全局之被_レ結候君は無_二御座_一候。中々鷹山公に比類仕候人は眞以見當り不_レ申、先此公は和漢獨歩と奉_レ存候。此公を目當にさへ仕り候へば其人丈之治道は必竟出來可_レ申、此には決して疑は無_二御座_一候。

青山閑話御約束迄にてさし出候儀是迄延引仕、御海容可_レ被_レ下候。則此節に附呈仕候。是は手許に別本御座候間御返にも及不_レ申。南亭餘音之事承知仕候、此本は近況此許に手に入り、また別本も無_二御座_一候間さし出候儀は御斷仕候。私手許に寫取り且又三四部にも相成候上さし出可_レ申、乍_レ憚左様御聞置可_レ被_レ下候。

農家立教・政語此許無_レ之候へば御遣可_レ被_レ下旨千萬忝々奉_レ存候。然處右二部共近來手に入申候間左様御承知可_レ被_レ下候。

尊藩は學意之行れ不_レ申御嘆息御尤千萬に奉_レ存候。外に工夫も工面も有_二御座_一間敷彌以御一身之御修勵のみと被_二思召、乍_レ恐 君上之御德義を御輔道被_レ成候義大切に御心を被_レ爲_レ盡、將又御政事向萬事之御所置義利公私之辨別明白に御勤上被_レ成候へば天地神明之助を得、遂には御志し通り御一藩中に行れ可_レ申候。是則君子人事を盡之處にて是を置て更に別法は無_二御座_一候。不_レ顧_レ憚進言仕候。

右奉復下問之條々伏臘仕候ては却て奉_レ背_二尊意_一候間乍_二失敬_一疎忽拜呈仕候。自然思召も御座候へば尙又被_二仰下_一度重々奉_レ祈候。先此段迄奉復仕候。頓首拜。

七月晦日

横井平四郎

立花主計様

(横井時靖藏小楠自筆草稿)

二三六 立花壹岐へ

一筆拜呈仕候。烈暑之砌愈御安康に被_レ成_二御座、珍重之至に奉_レ存候。先便は御紙面被_二成下、不_レ淺忝々拜見仕候。被_二仰下_一候次第夫々拜承仕り、御厚情之御事總て汗顔仕候。君公様御歸國以來之御事御法要且御祈禱二條誠以恐悅之御事深感心仕候、是則惻隱之御心にて是より推して萬事の御政道に被_レ施候はゞ重々之御事に奉_レ存候。乍_レ去今日之御事件にては餘り事上に參り候ては御助長にて御座候間、何_レも御新政無_二御座_一方重々宜敷かるべく奉_レ存候。只々御仁心御開通被_レ成度と奉_レ存候。百官中人無_二御座_一御慨嘆御尤に奉_レ存候。是も何方も御同様にて可_レ致様無_二御座_一候。彌益此方に修養之力を下し、誠實の本心を以感動し奉るより外に致方無_二御座_一候。學問之道と申候ても此方よりは此道を正道、彼道を俗學或は異端と引分會得致候得共、其實理を合點致し不_レ申人よりは正不正之差別有_レ之様も無_二御座_一候。左候へば正學々々と申立候ても、無理成る事ども御座候へば俗人の受け不_レ申も尤にて御座候。夫故正學と申は此道に入り來り候人に説き申事にて、俗人に對し申事にては無_二御座_一候。いまだ此道を合點致し不_レ申人々は其本心のやまれ不_レ申處をさし示し知らしめ候事尤親切の筋と奉_レ存候。孟子七篇總て如此、是則正學を合點せしめ候道にて御座候。是は追々御講習仕候事にて事新らしき申事にて無_二御座_一候へ共、釋迦前の說法御一笑被_二成下_一度候。

學校問答書御さし出に相成候段、御會得に被_レ爲_レ在候はゞ萬分の御一助と奉_レ存候。尙御様子拜聞仕度奉_レ存候。何事もく此節參らねば來年、來年參らねば其先、其先參らねば一生の中、一生の中參らねば

死後の先に參り候へば宜敷御座候。決して聊も助長仕り不_レ申候、又少しも退屈不_レ仕誠心を盡し候が人道と奉_レ存候。何も拜話之節はさまぐくに候得共、い才は笠間・池邊之兩氏より御承知可_レ被_二下_一候。頓首拜。

五月廿八日

平 四 郎

壹 岐 様

膝 下

尙々御高詠深感心仕候。然し少しく御慨心相見え申候、是も無用かと奉_レ存候、如何。
 近來詩を作り申候間さし上申候、池邊氏へも御通達可_レ被_二下_一候。此詩社中之様子は兩氏より御承知可_レ被_二下_一と略仕候。

(壹岐文書・立花親雄來翰寫)

一三七 立花壹岐へ

一書拜呈仕候。時下愈御安康被_レ成_二御勤、奉_二拜賀_一候。先以舊臘は御書狀被_二成下、忝々拜見仕候。縷々被_二仰下_一候趣御厚情之至深忝奉_レ存候。尙御再勤被_二仰蒙_一重々恐悅拜祝仕候。攝州君にも御同様之旨、於_二小倉江口純三郎列每々得_二拜顔_一、委細御様子承り近日歸郷夫々傳承仕候。當節柄別て御大事にて彌

以御自愛專一に奉_レ祈候。惣て治_レ國之本は自修に有_レ之は古今之通言にて、三尺之童子も知たる言に候へ共、古今有志者座論に落入其實行無_レ之より亂日のみにて治日絶果申候。此自脩は形跡之事にては無_レ御座候、眞實に私情智術をさり本來之良心を推及す事にて、誠心確立政事之根本と相成信義上下に貫徹し恩威二つながら行はれ申候。恩威といへば賞罰之様に心得候へども左様にては無_レ御座候。恩は人の善を舉用ゆる事なり、或は我明之人心に徹するなり。人之善ある己有_レ之如く眞に好て舉用ゆる故恩一國に行はる。我明眞に事情に達し百の有司欺こと不_レ能故に威一國に行はる。是恩威之二つながら行はるゝは我一身の誠に有_レ之、發して賞罰となる抑その末にあらざらん哉。然るに智術に發して人の善を取は私恩を賣なり。察を以明とするは私威を立るなり。此際分毫にして千里の隔となる深く戒めずんばあるべからず。平生之厚誼老婆之一言拜呈仕候。

一 別冊三條之御高論一々敬服仕候。方今之國是此外に有_レ御座候間敷候。唯可_レ恐は自然之天理一切消亡致し、人々各私心を以意見を立互に敵仇相成し候得ば遂に 皇國を亡に至り可_レ申候。近來之京報定て御承知と奉_レ存候。京師・關東兩立之勢其間是非之可_レ議は可_レ有_レ御座候へども要_レ之共に私之爭論にて實に歎息仕候。其他列藩何方も私論のみにて公共之天理絶て承り不_レ申、扱々闇夜と罷成いつ明るべき世の中や不_レ可_レ知。君子此間に在る彌増誠心を磨き天理を明にし爲_レ百世_レ斯道を立候志第一義と奉_レ存候。如何々々。拜復早々可_レ仕處、眼病相煩引續齒痛老病種々差起り心ならず延引奉_レ恐入候。山海之

御咄申度候へ共書狀盡し得不_レ申、先此段迄呈上仕候。頓首拜。

三月 朔 日

小 楠 拜

立 花 壹 岐 様

尙々攝州君・池邊君初可_レ然御致聲奉_レ頼候。老生も無事に閑居罷在、御安心可_レ被_レ下候。御高吟幾回閑吟仕候。以上。

(小楠遺稿)

二三八 立花壹岐へ(別啓)

別啓仕候。尊藩之御事御取遣之御狀にて一ト通りは相考へ申候へ共姓名等得斗分り不_レ申候。御事情不審之事多御座候。何分大切之御時節御自愛專一に奉_レ存候。將又本書拜復は仕候へ共書中にては情意盡し得不_レ申、殘念に奉_レ存候。當年は先手を受持罷在候間城山十里之外は禁足にて參上出來不_レ申候。何分心意は御組取被_レ成下_レ度奉_レ存候。此段迄別呈仕候。

十一月三日

横 井 平 四 郎

立 花 壹 岐 様

(壹岐文書・立花親雄書翰寫)

二三九 小河彌右衛門へ

小河名は一敏、豊後岡藩士。既に二十歳にして當時の顯職元締役に擢きんてらる。藩論尊王・敬幕二派に分かるゝや彼は前者の領袖となり議論抗辯して忌諱に觸れ貶黜されたが、其の後は或は九州勤王志士と交り或は京攝の間にありて奔走し、専ら勤王の事に盡す。幾回となく幽閉謹慎を命ぜられた。彼は學博く才富み文武の蘊奥を極め佛典を涉獵し神道をも研究したが、切支丹に對しても關心を持つたのか此の小楠の書を見ると大村の邪教につき書を小楠に寄せたものと見える。此の小楠の書面の内容は彼が村田氏壽に寄せた書狀(六二)と大同小異で、多少重複の嫌はあるが茲に採録することにした。

十二月朔日之貴書相達忝拜見仕候。時下愈御安康奉_ニ并賀_ニ候。隨て小生無事に罷在り御懸念被_レ下間敷奉_レ存候。然ば大村邪教に付被_ニ仰下_ニ、夫々拜承仕候。如_レ命愚民煽動之由いまだ落着は承り不_レ申候、此事兼て愚存聊有_レ之、只今之 廟堂之御仕懸にては當然之勢と奉_レ存候。惣じて此節之邪徒は全く二百年前の例の吉支丹にて當時西洋諸國一統被_レ行候教とはうらはらかと被_レ存候。西洋事情を記候諸書に因て見候へば所_レ謂天主之教は天意自然之理に本き第一彝倫を主といたし教法を戒律にいたし候様子に相聞申候。勿論天術奇怪之方辨等は聊も無_レ之由に候。其概略を申候へば此教を奉_レ候へば上は國主より下は庸人に通じ君臣父子之大倫を正敷行ひ我欲に隨ひ不_レ申、實地之力行を主といたし自然我欲に落入道を失ひ候へば忽に天主之破戒と堅め、或又人心之違却は娼疾より甚しきは無し此心一に生れば天理忽に亡滅他之惡心之五か三とかに懸合尤以天意に違却し人道を害するの甚敷事にて破戒之第一等に

候。其人心之私欲事實之邪曲之品を分ち破戒之律を定候教と承り申候。其故此戒律を推候へば尤實地に力を用申候事にて、全以前大友氏之時被_レ行候吉支丹とは雲泥之相違と奉_レ存候。天主教之中流脈相分「プロツテタント」教・「カトレイキ」教抔と申候て四五之脈有_レ之、猶我孔夫子之道に於朱子・陽明と分候様子にて、當時六大洲中日本・唐土の外は大抵天主教に一統いたし上下總て此教法を實地に相守り、其學之法則は經義を講究し其國々之法律を明辨し其國之歴氏は申に不_レ及天下諸國之事情物産を究め、天文・地理・航海よりして海陸之戰法・器械を講明し天地間之理を集合するを以道といたし學び申候由。フロシヤ國之一を以て申候へば比達王^{ベートル}_{之我明}中興より殆ど當時迄二百年其國叛民無_レ之治平相續申候。其然る所以は上下教法を信じ持守いたし候故人心趣向一致いたし政令能行はれ申候。國王年中之三之二は邦内を巡見し其地々々の政事を察し民間之利病を訪ひ、供人僅に八十人と申事にて別段に行在所と申も無_レ之其地々々の官宅或は民屋に止宿いたし誠_ニ手輕き事之由に御座候。國王既に如_レ此之上は執政以下之心得方は申に不_レ及相知れ申候。人材撰擧之道邦内中一村之童男・童女より教を入れ、其内之俊秀を一郷之學に入れ、一郷之秀を一郡之學に入れ、一郡よりベートルヒュルグの都城の大學校に入候由にて當時大學校生員一萬に餘り、政事何ぞ新規之事有_レ之候へば必學校に下し衆論一決之上にあらざれば行ひ不_レ申、將亦執政・大臣等要路之役人總て一國之公論に因て黜陟いたし、國王といへ共自己之心を以ていたし申候儀は法律におゐて相成不_レ申候抔三代之學校之勢相見え申候。尤以感心之事は民に取るの

年貢十之一分にて有之、此外は聊之物も取り不申候。其故民間殷富いたし申候。右之通り民に取る事至て少く有之、經濟何を以ていたし候哉疑惑有之候へ共、是彼杯之經濟にて第一土地より掘出す金・銀・銅・鐵・錫・鉛等之諸物將又工職を集め工場を立て種々様々之諸物を造り是を以天下に交易致し有無を通じ其利を以て國用をいたし決て民間を妨害致し不申筋に力を用申候。是等之政事全其教法に本き上下一心趣向一致いたし候故と被_レ存候。其餘西洋諸國大抵同様の國體にて、別てアメリカは盛大之由承り申候。

魯西亞漢土に通じ候は康熙已前之事に候へ共夫迄は陸路之通信にていまだ海路開不_レ申候故唐土は申に不_レ及印度杯アジャ諸國之事情知れ兼申候由、我寛政之末比より海路開追々唐土・天竺杯に使節を遣し國體事情を察し候處其以前アジャに二宗旨有之、所謂聖人之道・佛氏之教と申候迄承り、いまだ其道之全躰は承知いたし不_レ申、右之通先天竺に使節を遣し遊學を申入學生數年留在其他之學問政事之情實を見申候處當時天竺はモゴル一統し其政事別て衰頽之時節にて政事眞に大弊のみにして一之所_レ見無之、將又佛氏學を研究致候處其宗意誠に荒廢無經聊之條理無之甚以驚駭いたし、如_レ此之宗旨にては其政事之行れざるは當然と存じ、其後唐土に遊學生を遣し燕京に留在委細國體を見申候處當時乾隆之末年に當り政道衰運に趣候時にて有之、甚治道之無理成事を驚申候。將又學者迄所_レ學は徒に經書を見詩文を作り候事迄にて其學たる何之趣意たる事不_レ相知、聖人之道とは箇様之筋にて有之哉と

全く佛氏之道と相違無之、アジャの二宗旨愚暗之甚しき一切人道に關係無之、其故其國總て政道を失ひ世々内亂止み不_レ申追々他國よりとられ候も必覺道之明かならざる所大に笑止之情を起し候由、其後尙又人材を撰び燕京に遊學せしめ（距今三十四五年前後之中）此節は經書講究に專打懸り書經・詩經・論語之三部をヲロシヤ文字に翻譯いたし國都に持歸り、其大學校に於て詮議に懸け候處第一規模廣大修_レ己治_レ人學政一致一として間然する事なし、三千年之古堯舜相傳之大經大法如何して如_レ此之明なる大道を立られ候哉誠に奇異之思を爲し甚以驚嘆いたし、全く其奉る所之天主の道と符節を合候と節を打申候。然る處後世之漢人何故に如_レ此大道を誤り書を讀文詩を作り候を學問と心得候哉、後世治道衰廢人道亂候は全く聖人之道を失ひ候故にて有之、漢人におゐては深く省察いたし古道に返し三代之道再興いたすに於ては其國之中興掌を反すが如しと右之經書を直に開板いたし、此次第之趣を以序文に認め唐に送り申候處彼之高名之林則徐杯取傳へ深く感心いたし候由。大略彼等之道と致所は如_レ此と相見え、一國無_レ貴賤一統其道を奉じ實地に被_レ行宗門を以治道と成し二つに分れ不_レ申中々盛大之勢と被_レ存候。是等之筋を以て大村之邪教を見候へば全く以前之大友氏之時相渡候吉支丹之餘習にて天術奇怪を以て欺立煽動鼓惑いたし候ものと相聞へ、今日に至り候て是等はさして憂るに足り不_レ申、只々大に憂る所は我皇國大道之教無_レ之、先聖人之道と申せば例の學者の弄び物にて一國天下之信じ候ことは聊も無_レ之、□□は全く荒唐無經些之條理無_レ之、佛は愚夫愚婦を欺之外に道理無_レ之、一國三教之形あるのみにして其實は上

下に通じ信じ候道會以無之、全く宗旨なきの國體にて三千五百萬之人心々に相成候へば是決して治を爲す事不能所以にして嘸嘆すべき事に候はずや。於是深可憂所は西洋通信次第に盛に相成、諸夷陸續入來候へば彼等之教法政事自然に明に相成候は必然之勢にて、我國人之中聰明奇俊之人物是迄何之道も知り不申候者彼我政治之得失盛衰之現在を見、彼之教の尤成筋に感心し不覺邪教に入候は十年二十年之間には鏡に懸て見るが如し。彼佐久間修理杯は既に邪教に落入たるにても明白に有之候（理）は邪教を唱るには無之候へ共政事法體て西洋之道明なりと唱、聖人之道は獨鳥之一部のみ遺棄ありと云と承る。是邪教に落入之實地なり。總て事之善惡に付け行れ候勢は必人傑の唱へ立る故にて候へば聖人之道に明ならず三代之治道に熟せざる人は我に道無之故必ず西洋に流溺するは自然之勢也。然ば大村之愚民は憂るにたらずして大に憂べきは此事情にて有之候。於是愚意聊述べき事も御座候へ共此節はさし置申候。來春に至り閑暇之節尙御賢慮も承り、其上にて聞取合可仕候。近日外邪相煩餘り閑日に任せ事長く相認拜呈仕候、何も春風草々可申述候。以上。

十二月十五日

横井平四郎

小河彌右衛門殿

尙々雅之助子は最早御歸着と奉存候。濤太郎子越年にて近日段々咄合申候事御座候。來春には少は替りも可有御座候哉案勞仕候。以上。

(横井辰雄藏)

二四〇 鴻雪爪へ

雪爪は備後因島の産。初め石見大定院の無底和尚、後に長崎皓臺寺の黄泉和尚につき修業。其の後大垣の全昌寺、福井の孝顯寺、彦根の清涼寺の住職であつたが、方外の身でありながら時世を憂へて常に天下の志士と相往來し、その交友は當時の知名の士を網羅し盡くすと云つてもよかつた。世間は彼を勤王僧と云ひ自らは白衣宰相を以て任じた。小楠福井に招かれた時は其の孝顯寺に在置中で肝膽相照して以來最も親しき間柄であつた。

浴後清風喫茶坐。幽蘭翠竹紙中栽。夕陽相對無心甚。笑拍欄干又喚杯。

去月廿二日より牧氷鑑、笠白翁之諸同好と三國に遊び、一日宿浦の清風樓に上り潮浴いたし、例の三杯を命じ午睡、初て覺れば夕陽水に映じ景色殊によろしく候へ共何ぞ咄しもなく歸らんといたし候處に不斗氷鑑蘭を畫し白翁竹を添、何とやらん興を催し又々酒を命じ夜分に至り歸り申候。毎々禪師之事咄し出申候。只今白翁相見へ明後日は此許より書狀仕出しに相成候由にて此段相認め拜呈いたし候。萬々御自愛專要に御座候。不具。

五月十二日

小楠拜

雪爪禪師

玉机下

(長谷部小平藏)

二四一 中根鞞負へ

拜啓昨日は高園櫻花紅粧芳綻拜見之處不_レ斗御馳走相成長坐致、御退屈も不_レ顧大沈醉仕、故人曰花下忘_レ歸因_ニ美景_一然處大樂傾躍之至不_レ過_レ之奉_ニ厚謝_一候。今朝參館御禮可_ニ申上_一と存意之處無_ニ餘儀_一御用向出來に付以_ニ紙面_一不_ニ取敢_一奉_ニ厚禮_一候。併御内々拜話之一件は必定申上候哉と存候へ共先は爲_ニ國家_一餘り萬_ニ越國_一之手儘に見へ候ても不_レ宜尙又程能致度、書外は拜接に譲り先は御禮御内談條旁如_レ此御座候。匆々頓首。

三月八日

中根雪江貴兄

横井平四郎

机下

極内々拜眉に譲候條は天然に相運び候へば誰人も不_レ惡事被_ニ候_一や。

(松平慶民藏「森田文書」)

二四二 中根鞞負へ

拜呈仕候御書取拜見一々敬服異存無_ニ御座_一候。則返上仕候。問答書も御出來如何、此段迄拜呈、餘は拜顔

に譲り申候。以上。

四月二十日

雪江賢丈

小楠拜

(福井松平家藏「明治維新志士遺墨横卷」)

二四三 中根鞞負へ

先時御内話一條松野_へ及_ニ問合_一、京師よりの書狀借受申候間さし出申候。別紙之通りに候へば全く相違有_ニ御座_一間敷候。何も略仕候。以上。

五日

中根様

別紙入

横井

(伊東菊城藏)

二四四 中根鞞負へ

今日は橋邸に被_レ爲_レ入御登城被_レ遊候段私もいまだ全快に至り不_レ申參殿御斷り仕候、此段爲念拜呈仕

横井小楠遺稿

候。以上。

十二日

二四五 中根鞞負へ

只今は忝々奉存候。扱齋民氏咄しの一條當人よりいまだ執政衆に咄し合に相成不申候筋に御座候。他に御口外は被下間敷奉存候。心付候間急ぎ拜呈仕候。以上。

六月二十二日

二四六 中根鞞負へ

今晚は一件之事にて得斗及咄合候。様々の行違に候ま、都合よろしき筋合に落(二・三字不明)只今歸り申候。直に參上と存候へ共大に疲れ申候間明朝五(午前八時)ッ比殿中にて御咄合可仕候間左様御承知可被下候。此段拜呈仕候。以上。

九月廿九日

(以上中根への書簡三通松平慶民藏文書)

二四七 半井南陽へ

半井諱は保、字は伯知、通稱元冲又は仲庵と云ひ南陽又晚香と號す。越藩の藩醫で、同藩が後年率先西洋醫術を採用したのは彼及び笠原白翁の先驅の力多きに居る。小楠福井に在るや厚く之と交り、その急病に罹るや彼の手により全快することを得た。

明日は晴雨を不云是非御出掛可被下候。笠司馬例之鄭重向方約束厳しく、此上は雨と言ひ雪と言ひ參らざれば不相成様にしぼり付られ、老生も何の異存も出来不申、火の雨にても出懸候覺悟に御座候。此段拜呈仕候。以上。

十二月五日

小楠拜

南陽老兄

尙々時刻は六(午前か午後の七時)ッ半司馬之宅に寄會可申約束にて、何分早きがよろしく奉存候。以上。
(半井家藏)

二四八 岡田準介へ

昨日は忝々奉存候。扱御内話一條執法迄及咄合申候處段々模様相替り、當分滞在に相決申候。右に付ては深御口外被下間敷奉頼候。此段一寸得貴意申度、餘は拜顔之上萬々可申述候。以上。

横井小楠遺稿

六月七日

岡田準介様

横井平四郎

(岡田直藏)

二四九 城野静軒へ

朝霽涼氣御同慶に御座候。扱昨夜相願置申候唐紙さし上申候。五枚は全紙、二枚は半切に御認可被下候。福井土産最第一と存申候。詩ならば陶淵明抔古什珍重に御座候。此段相願申度、餘は拜顔之上得貴意可申候。以上。

七月廿九日

静軒君

小楠拜

(糸木某藏)

右は小楠が福井藩に聘せられてゐる時のもの。彼は陶淵明の詩を好み、此の外にも

陶淵明歸園田居

首詩は他人認候もの有之、第一章よりは御見込に御認可被下候。六枚は續き、外二枚は別也。

小楠拜

静軒君

なる書附も城野家に保存されてゐる。

二五〇 伊藤太多次へ

太多次は茶屋として藩主の立寄りたる葦北津奈木にての名家の主人。其の子莊左衛門及び四郎彦は小楠門下。

一書拜呈仕候。時節愈御安康珍重之御事に奉存候。先以爾來は書狀も拜呈不仕御無音に押移申候。然ば莊左衛門殿病氣次第に甘快に相成、定て追々御承知被成候と奉存候。當時は彌以快方にて、既に夕方は劍術抔之稽古も御座候。將又學事も出精にて重々御安心可被成候。當冬は歸省之心組に御座候處、私了簡折角之事にて來春迄滯留に相成、十分之快復之上歸省可然、其子細は歸宅之上は何事もかむ(楠)ひ無之と申内とても御家事何角と世話は可有之、自然は心配之事も御座候へば必心氣を勞可申候。將又夫婦之交重々大切にて尤以恐れ申事に御座候。いまだ十分之全快になり不申候九分の所にて此慎破抔いたし候得ば是迄之快復總て無益に相成可申、此上再發に相成候得ば醫者申分決て活路は無御座候と申事に候へば當時の處重々養生之肝要の場所に御座候間、先當年之歸省は私存より來春に至り彌全快之上目出度歸省可然奉存候。御親子之情態久しく御面會も無御座、何角と御氣遣は重々御尤に奉存候得共右之處御會得、今暫御待被成候方於私相願申候。此段御得心可被成下、重々奉存候。

一 鐵炮は彌御誘引と奉_レ存候。於_ニ此許_一も修行は出來不_レ申候得共種々研究は仕り、懸_ニ御目_一御咄合申度事も様々に御座候。何卒來春は御出府被_レ成度、重々奉_ニ待入_一候。一體相替申儀無_ニ御座_一候。此段拜呈仕候。以上。

十一月十一日

平 四 郎

太 多 次 様

尙々^(折々)あり折御出獵は可_レ有_ニ御座_一候。當年は鳩勢は如何、定て多事と奉_レ存候。私も是迄數度出浮申候。當冬は大分當り申候間十發に七八位は獲もの有_レ之、大に樂申候。望所は御一同に出獵何角御咄合申度奉_レ存候。い才は熊太郎より御承知可_レ被_レ下候。以上。

(渡邊季基藏)

二五二 伊藤太多次へ

一 翰拜呈仕候。愈御安康に被_レ成_ニ御入_一、珍重之至に奉_レ存候。先以頃日は罷出、度々御馳走被_ニ成下_一、厚忝々拜謝難_ニ申盡_一奉_レ存候。歸帆之節は御送り被_ニ成下_一千萬忝々、大に醉迷仕御別も失禮仕、御海容可_レ被_レ下候。莊左衛門殿御出府御鹽梅も宜敷、御安心可_レ被_レ成候。
一 んんしよふ製法分量いまだ得斗承出來不_レ申候。不_レ遠書付さし出可_レ申候。去冬手製仕候ゑんしよ

ふ少々残り御座候間進上仕候、御試可_レ被_レ成候。是は財津勝之介と申人之手製にてよ程強く御座候。徳王薬よりは格別に御座候。自然御心に叶申候は、梅雨後尙頼申等に御座候間壹貳斤位はさし上可_レ申候。右御禮迄如_レ此に御座候。餘は追々可_ニ申述_一候。已上。

三 月 晦 日

横 井 平 四 郎

伊藤 太 多 次 様

尙々乍_レ末御家内様え宜敷御禮奉_レ願候。四郎彦壯健出精仕候、御安心可_レ被_レ下候。以上。

(洪水文庫藏筆寫本)

二五三 徳永和左衛門・伊藤莊左衛門へ

徳永は書簡一一の説明文中に其の名が出て居るが、伊藤と同じく津奈木の人で小楠に師事してゐた。

拜呈仕候。先以此間は大勢御世話に罷成種々御心配被_レ下忝候。餘り長到留甚以無_レ心次第、何とも御禮難_ニ申述_一御座候。御別後風筋宜敷一時に三隅に着、夜明直に瀬戸を越し晝比には高橋に着、誠に以仕合よろしく大慶不_レ斜候。連中も昨夜早々歸府いたし、何もいたみも不_レ仕息災に落着、明日よりは稽古に出浮申等に御座候間吳々御安心可_レ被_レ下候。吉次事不斗成る事に相成惣左兄^(並カ)・御老人様初御姉様方御案勞可_レ被_レ成_ニ夫而噲_一申事に御座候。乍_レ然其身も殊之外に悦び能落着居申候間吳々も御安心被_レ成候様御

申上可被下候。此節は兩君御老人様方に別に書狀呈不申、御家内様へも萬端之御禮御引取被仰上可被下候。返々も長々之掩留にて御届退之程察入申候。純三郎僕歸候間不閣御禮迄申述候。何も追々可得貴意、先右迄拜呈仕候。以上。

六月四日

平四郎

和左衛門様

莊左衛門様

尙々家内老人初何も御禮よろしく申述候様申付候、吳々も忝々拜謝難申盡と存候。歸後さしより精進に入り、いまだ粟飯・香物も珍敷心地いたし申候。四五日も過候はゞ大方瘦せ可申御一笑、申縮候。以上。
(洪水文庫藏寫本)

二五三 河瀬安兵衛へ

河瀬名は東郡、惣莊屋となりて在職五十年、功績甚だ多し。小楠とは親しき間柄であつた。

被仰下候次第夫々拜承仕候。葛白莖極可然奉存候。牛右衛門に紙面遣し申候間一右衛門に御頼可被下候。牛右衛門在宿に候へば一右衛門に逢候て銅山之事承り候様に申越候間、一右衛門に御含可被下候。此段迄略仕候。已上。

廿一日

安兵衛様

平四郎

(編者藏)

二五四 佐藤松喜へ

佐藤は肥後藩士、小楠と親しくしてゐた。

昨日は御多用中遠方御來臨被下忝々、御早々にて殘懷仕候。扱相願申候品物さし出申候、可然奉頼候。何も御歸りの上拜顔萬縷可申述候。已上。

十一月十四日

佐藤松喜様

横井小楠

(高森良人藏)

尙々乍聊手作のからいもさし出申候。已上。

二五五 彌富千左衛門へ

忝々拜見仕候。鶏段々御配慮被成、明日は彌以御手に入候旨委細拜承、大に相樂申候。御庇にて病用此

横井小楠遺稿

六二九

上有御座（前出）間敷候。今朝中庄司御袋御出候て夕方御約束の田樂御催しにて御誘引、罷出候様にとの事に御座候。何ぞさし支不申、後刻御誘ひ可申、此段拜復申報候。以上。

七月十九日

小楠拜

彌千様

（彌富破摩雄藏）

二五六 彌富千左衛門へ

近日は御遠々敷奉存候。扱兼定御刀并眞介村正暫拜借奉希候。近夕月光無類にて今夕共は御閑暇に候へば御光駕可被成下候。此段拜呈仕候。以上。

十八日

小楠拜

千左衛門様

（彌富熊太藏）

二五七 彌富千左衛門へ

先夜は誠に亂醉恐入奉存候。扱御約束の刀さし出置候間御受取可被下候。御手入は吳々奉希候。此

段迄、餘は拜眉之上を期し申候。以上。

八月十七日

小楠拜

彌富様

（彌富熊太藏）

二五八 彌富千左衛門へ

昨夕は餘り頂き過ぎ、御不快中無心至り御退屈と奉存候。御爐開に十錦手さし出し將又水呑吟味仕候處、青ノ方は下津隱居（休也）に遣し申候間あり合さし出申候。此方が青よりも却て上品にて御座候。此段拜呈、申縮候。以上。

十七日

小楠

千左衛門様

（彌富熊太藏）

二五九 彌富千左衛門へ

長々御不例御見舞も不仕、御無禮仕候。近日は漸々御甘快之御様子、珍重に奉存候。然ば椋梨家 三齋

様より拜領之正宗參り誠に驚入申候。一寸懸御目申候間暮前迄に御返し可被下候。此段拜呈仕候。以上。

七日 小楠拜
千左衛門様

尙々能々子細に御覽無_レ之ては分り不_レ申候。河口下ヶ札も正眞之正宗無_レ疑と申事に御座候。熊本是迄之目利清左衛門初末相州と申候由、誠に勿論事はにても知れ申候。河口鑒定後は清左衛門列も何之申分も無_レ之、正宗とは此脇差之様なものかと申候由、一笑々々。

(彌富熊太藏)

二六〇 彌富千左衛門へ

御内話之一條昨日宮川小源太參り申候間、才咄し合置申候。幸宮川は同姓并谷田方出入懇意にて得斗吞込、今日中に兩家に參り、才頼み込可_レ申候と請合歸り申候。此段拜呈仕候。以上。

八月晦日 小楠
千左衛門様

(彌富熊太藏)

二六一 彌富千左衛門へ

明日より出府_(城下に出ること)、十二日之暮に歸り申候間、今日一日之事に迫り申候。竹部同姓參り居申候間、御多用にも可_レ有_二御座_一候へ共、只今より御光駕可_レ被_レ下候。已上。

八日 横井
彌富様

(彌富熊太藏)

二六二 彌富千左衛門へ

昨夜は大慶仕候。扱甚御難題に奉_レ存候へ共、金五兩預_(紙幣のこと)に御替へ被_二成下_一候様奉_レ希候。又此品如何に御座候へ共、若御袋様御見舞にさし出申候。此段迄拜呈仕候。以上。

十七日 小楠
千左衛門様

(彌富熊太藏)

二六三 彌富千左衛門へ

先日は目出度、御安心と奉_レ存候。扱^(矢野)大玄よりさし出候刀同人よりい才承り、明日熊本にさし出窓明ヶさせ候筈にて、暫御返し可_レ被_レ下候。小拙も久病、寸斗快無_ニ御座_一打臥勝に罷在候。夫故御無禮仕候。此段迄拜呈申縮候。以上。

十一月二日

小 楠 拜

千左衛門様

(彌富熊太藏)

二六四 湯地丈右衛門へ

湯地名は惟永、時習館授讀師であつた。小楠の友人で元田六友(米田・下津・小楠・荻・湯地・道家)歌に「湯子純乎眞君子」とある。本書及び左記七通の年代はいづれも安政以前のものらしい。

不怪暑にて御座候。今朝は泰吉罷出次郎事相願、忝御座候。四郎先同道さし出申候間吳々宜敷奉_レ願候。是迄心得惡敷候に付ては内輪秋堤^(寺倉)申談勘考申付置、宿歸りも成り不_レ申は勿論外出も一切さし留置申、御宅にても今暫之處は閉居御申付之方可_レ然奉_レ存候。

小法主ながら中々曲物にて御座候へ共、御庇にて本心發見いたし候へば一人才と相成可_レ申、此段拜呈仕候。以上。

七月十一日

横 平 拜

湯 地 様

二六五 湯地丈右衛門へ

忝拜見仕候。中々著さ凌兼申候。扱何寄之一臺被_ニ贈下_一不_レ淺忝々、早速家内打寄一酌可_レ仕候。然し御心遣に相成痛入奉_レ存候。此段拜復仕候。以上。

七月十三日

平 四 郎

尉_レ右衛門様

尙々次郎法主如何罷在申候哉。中々曲者、御難題のこと、心痛に奉_レ存候。何も拜顔之上と期申候。以上。

二六六 湯地丈右衛門へ

拜呈仕候。尊家結構御同慶に奉存候。明日は私方にて離杯仕筈に及約束申候間、どふとぞ御操合御支無御座候は、御來臨被下度奉存候。(午後五時)七ツ半比よりと申談置候。此段拜呈仕候。以上。

四月十五日

平 四 郎

尉 右 衛 門 様

二六七 湯地丈右衛門へ

強雨に相成申候。近日些御不鹽梅之由、如何と奉存候。扱先頃來御咄合之江戸連中一件津田初(山三郎)ト通り咄申候處存外氣遣之程には相成不申、先都合宜敷大に安心仕候。實に深く案勞仕候處右之通りにて甚以悦申候。乍去何とやらん意味違之處は相見申候へ共夫は追々御咄合可申、此段一寸得御心得度拜呈仕候。い才は懸御目可申述候。以上。

六月 七日

平 四 郎

丈 右 衛 門 様

尙々右之通にて御座候へば大安心にて、大悦此事に奉存候。此上は漸々講習彌以自家誠意之工夫第一と奉存候。以上。

二六八 湯地丈右衛門へ

御安康奉賀候。然ば薩州鮫嶋正介と申候人相見へ暫到留に相成、今夕は貴亭に參堂いたし寛々御咄申度との事に御座候。御支之有無一寸御書入被仰知被下度候。以上。

十二月三日

平 四 郎

尉 右 衛 門 様

二六九 湯地丈右衛門へ

先夜は大慶に奉存候。扱廿日には(長岡監物)二ノ丸に出浮申筈に約束仕、小生より御通路可申との事に御座候。無御支ば日入前より御出浮可被成奉存候。此段拜呈仕候。以上。

六月十六日

平 四 郎

尉 右 衛 門 様

二七〇 湯地丈右衛門へ

拜呈仕候。先夜は大慶仕候。餘り長座にて殊に御不快之御中如何被成御座候哉と想像仕候。然ば昨日

監物殿より笠隼太被_二差越_一、彼方家來若者共重々起り立罷在候に付御難題に被_レ存候へ共何も貴亭に被_二差出_一候間御世話被_レ下候様、小生より相願吳候様との事に御座候。於_二彼方_一は是迄可_レ然師匠と申候ても無_二御座_一我儘におひ立罷在り、此節何も重々起り立大切之折柄に御座候間御不快いまだ御全快と申にては無_二御座_一候へ共御助力被_レ成候様に有_二御座_一度於_二小生_一奉_レ願候事に御座候。尤晝中は何も稽古に参り申候間夜分に御會業に罷出候心得に御座候。御許容に相成候へば隼太同道にて何も罷出可_レ奉_レ願、先小生より御様子奉_レ伺、就ては外にも御相談之筋御座候へ共是は懸_二御目_一候上にて拜話可_レ仕、さし急ぎ此段拜呈仕候。以上。

後

二月五日

平 四 郎

丈 右 衛 門 様

二七一 湯地丈右衛門へ

緒方熊十参り御附屬之貴書忝拜見仕候。愈御安康に被_レ成_二御起居_一、珍重に奉_レ存候。然ば引移りの節は遠方御見送り被_二成下_一、忝々奉_レ存候。熊十事に付ては縷々被_二仰越_一候趣御多念之至りに奉_レ存候。勿論何之存念も無_レ之幾重にも御世話被_二成下_一候様於_二私重々奉_レ願、將又田浦武膳・野村循事に付て助兵衛紙面迄御遣し被_レ下是又承知仕候。然處此兩人は此存念有_レ之、當月末徳富太多助拙宅迄参り申筈に御座候間

得斗太多助え申談じ、有無相決し申筈に御座候間左様御承知可_レ被_レ下候。此段拜復迄仕候。以上。

五月廿五日

横 井 平 四 郎

湯地丈右衛門様

尙々御端書之趣忝々奉_レ存候。家内何も宜敷御禮申上候様申出候。將又田浦紙面は返上仕候。以上。

(以上湯地宛書簡八通横井時靖藏寫本)

二七二 荻角兵衛へ

拜啓彌御清祥可_レ被_レ成_二御座_一、奉_レ賀候。兼て御談合申上候儀に付て一層御協議申上度奉_レ存候間萬障御差操直々に御鳳來奉_二待上_一候。委細は拜顔可_二申述_一候。頓首。

二月廿日

横 井 平 四 郎 拜

荻 角 兵 衛 様

(古城貞吉藏)

二七三 荻角兵衛へ

尙々茂次郎歸省申越候へば人物見落申候。以上。

拜見仕候。被_レ仰下_レ候趣夫々承知仕候。明夕古城に出浮可_レ申候。扱柳井歸省にて御相談有_レ之候由、右歸省に付ては今夕咄合仕候筋御座候間所存のまゝ得_レ貴意_ニ申候。茂次郎より歸省可_レ致旨申越候はゞ當然之事にて御座候へ共、自然茂次郎より歸省には及不_レ申と申越候へば此儘罷在候方可_レ然奉_レ存候。何様大變にて一藩人心動搖之時節新次郎歸省と申ては此節政事方御免に付平生を失候様にも相成、茂次郎心には必ず_レ歸省不_レ致様に申越候と奉_レ存候。此折柄は兎角に平生無事則物情を鎮候手段可_レ有_レ之奉_レ存候。乍_レ然新次郎より相談不_レ仕候はゞ歸省いたすも不_レ致も其了簡次第に候へ共、御相談仕候はゞ前條通、茂次郎より歸省不_レ致様申越候はゞ其通に心得候方重々可_レ然奉_レ存候。此段心付申候間拜呈仕候。已上。

九月廿日

角兵衛様

平四郎

(齋藤清房藏)

二七四 荻角兵衛へ

不_レ相替_ニ烈暑にて暮し兼申候。愈、御安康奉_レ賀候。扱拜借仕候貳百目刀うれ申候間上納仕候。長々及_ニ延引_ニ恐入奉_レ存候。御庇にて押移り忝候。拜顔之上萬々可_レ奉_レ謝候。猶又奉_レ願置候刀御渡可_レ被_レ下候。と

ぎ・切羽・羽バキ代定て御取替被_ニ成置_ニ候と奉_レ存候、御書入被_ニ仰知_ニ可_レ被_レ下候。

下津隠居大病之由如何之容體に御座候哉、無_ニ心許_ニ奉_レ存候。此節は是非快復に相成候様祈申候。遠方にて見舞も出來不_レ申案勞仕候。容體御書入被_ニ仰知_ニ可_レ被_レ下候。

御番頭引入どふか御留に相成候と承申候。無異に治り申たる哉、何分程能落着仕かすと奉_レ存候。不_レ遠出府可_レ仕、其節參上萬々可_ニ申上_ニ候。以上。

七月十四日

角兵衛様

平四郎

(荻昌道藏荻文書、書簡六十二通)

二七五 元田永孚へ

先日は遠路御光駕被_ニ成下_ニ忝々、久振に得_ニ高話_ニ大慶此事に御座候。其砌御入れ物返上仕候。且又御約束之村醪さし出申候、御笑留可_レ被_レ下候。此段まで拜呈仕候。以上。

九月廿七日

茶陽賢兄

小楠拜

二七六 元田永孚へ

昨日は御書狀忝拜見仕候。先以政府御都合恐悦千萬に奉_レ存候。(采田)左馬助殿甚感心之至り、是よりは彌響出で可_レ申、深依頼仕候。

(薩久・薩美)兩貴公子如_レ此根本御確立之上は是迄之習染は自然に消解疑無_レ之、何様一新之基本相立、躍雀仕候。四五日以前よりシヨウレヲ邪發起、腹痛甚敷今以横臥出來不_レ申、食も甚乏敷漸く湯の子迄僅に給居候處、今朝は大分快く覺え再_レ々(二枚)タキを二膳給申位に相成申候。此分にては四五日中には起き上り可_レ申候。少も御氣遣被_レ下間敷候。先拜復迄任、餘は大略仕候。以上。

七月十八日

小楠拜

茶陽賢契

御別紙委細拜誦仕候。一々御尤千萬至當之御所置と御同意仕候。何も外に愚存無_二御座_一候事。

二七七 元田永孚へ

秋冷御同慶に奉_レ存候。勝先生紙面等は定て御差出に相成候事と奉_レ存候。紙面の趣に候得ば越は勿論幕庭にも大分趣向打替り候模様相聞へ、謀らすして 御國議と一致いたし恐悦に奉_レ存候。此上は

良之助様御乗出しの一段に大關係仕候。惣て高貴相手之判決はいかに重役たり共臣下として出來兼候得ば千々萬々御出方被_レ遊御事に奉_レ存候。惣て長州も薩へ申入 御國へ依頼之一條も有_レ之、近年來之大火事は 御國より取り消し、遂に大平の治本も 御國より取り立候大機會全く今日かと奉_レ存候、如何々々。

御國議相決し候上は早速薩へは御使者被_二差立_一、十分之論決に相成り度奉_レ存候。此御使者は尤御人撰第一に奉_レ存候。

勝先生紙面等の寫拜領仕度、急に返事仕、小拙丈之存意申遣候筈に御座候。尤 御國議等内密の事は何もさし扣申候。此段拜呈何も大略仕候。以上。

七月廿四日

小楠拜

茶陽先生

尙々新堀病氣は彌以宜敷相聞へ候哉、甚氣遣仕候。小拙も一兩日は大に甘快、殆平生通りに至り申候。御閑暇も候へば御來駕奉_レ待候。以上。

二七八 元田永孚へ

去十五日之芳書忝拜誦仕候。件々被_二仰下_一之次第夫々拜承仕候。即今之成り行先一幕相濟み爲_レ申と奉_レ

存候。

京師山田書狀御一見と奉_レ存候。就ては社中より申越候筈之話合も宮川列より御承知と奉_レ存候。
道家御講習之御書附寛りと拜見仕候。聊異議無_ニ御座_一候。何分底心合點致し候様重々相祈申候。即今一人之人物此上見識進歩仕候へば誠に國家之御寶物に御座候。先此段迄拜復仕候。小春之晴暉沼山風光よろしく、御來臨萬々奉_レ待候。頓首。

九月廿五日

小楠 拜

茶陽 先生

尙々御端書之趣御多念に奉_レ存候。吳々もよろしく御傳致奉_レ希候。以上。

二七九 元田永孚へ

昨日は御書狀被_ニ成下_一忝拜見仕候。縷々被_ニ仰下_一候次第夫々拜承仕候。二ノ丸一條之儀餘り御多念之至、却て痛入奉_レ存候。父子此處了解到相成候へば重々珍重至極と奉_レ存候。此上御配意吳々所_レ希に御座候。御國論相立兼、扱々笑止千萬に奉_レ存候。昨夕は津田久し振りに寛々話合、小生丈は盡し申候。大抵は合點いたし候様に御座候。尙得斗御話合可_レ被_レ成奉_レ存候。

道家御話合一兩度位にては解し申間敷、是は此人之病にて、此上追々御話合に相成候へば自然とぬしが

了解に相成申候間、ぬけ無く御申談可_レ被_レ成候。

越に遣し候書附是は極々大急に相認、誠に疎漏に御座候。津田へも見せ得斗話合、津田持參越へも參り候筈に申談候。米家_(米田家)へ御見せ被_レ下度との儀小生よりも其通りにて、良公子_(護美)へも奉_レ入_ニ御内覽_一心得に御座候。此節之折柄越へは申遣、御國には沙汰無しにいたし候にては相成不_レ申候。是迄も其心得にて越への申遣し事は必米家に差出候次第に候へば小生よりも米家に出し候は内達之心得に罷在候。此御心得にてよろしく御取り計可_レ被_レ下候。先此段迄拜復、餘は草縷申縮候。頓首。

十二月六日

小楠 拜

茶陽 先生

橋公御誠意御培養第一義

征長御解放し列候の言御聞取に不_レ及

件々の御非政御手切にて御改正

兵庫開港御手許にて被_レ發候様

皇國一致の海軍

二八〇 元田永孚へ

忝々拜見仕候。先以一昨日之御黜陟官府一致之御趣向殊に御三殿御一致大政府も同様恐悦無限之至に奉存候。縷々被仰下候通りとても此面々にて持届候筋にては無之、先きの處は兎もあれ今日之勢誠に難有次第に奉存候。將又郡勘監察御黜陟可有之段、是にて格別人心も大動可仕候。

同社其人物無之儀は誠に恥入申候。牛島五一郎儀は御注文に相當いたし候人物、外に比類は有御座間敷、昨年小拙御家老衆應接之時も撰擧いたし候。此人御目附被仰付、御試被遊度、良公子は定て御承知と奉存候。御奉行被仰付候ては道家以上に上り可申候。此段は左馬介殿へ言上可被下候。其外吉村人物御目附には十分と奉存候。此人物は其毛色悪しく候へ共胸中は外々よりは一段明く有之候。然し一ト通りにて見へ兼候。能々御吟味可被成候。先此段迄拜復、申縮候。以上。

十一月二日

小 楠 拜

茶 陽 先生

尙々新堀不鹽梅甚氣遣申候、何分養生祈申候。小拙も近來は些不鹽梅にて専養生にうち懸申候。長崎より附方参り、一兩日よりは其手當に取り懸り申筈に御座候。四五日中御來駕可被下段、自由にて御咄しは出來申候。とても御面話にて無之ては心中盡しがたく、何分御待申候。以上。

二八一 元田永孚へ

御念書忝々拜誦仕候。先日は久々得寛話大慶仕候。扱一件二の丸に御咄し合に相成、深同意被致候段重々大慶に奉存候。正風俗一條縷々被仰下、夫々敬承仕候。先頃は得貴意候通り一等引き下げ、方今之勢に就き他の目的明に行候上風俗正敷相成候事と及御咄合候得共、原頭より論じ來候へば一々如來諭一身修養より推し及候筋にて、堯典に所謂克明俊德以親九族九族昭明協和萬邦云々二帝之治化此外に無之、此一條大夫父子深く了會被致候へば其他は氷融之勢と奉存候。唯々可恐は當路之諸君子書物説と迂濶に被心得候は必定にて、大夫父子十二分之了解十二分之明辨無之ては空論に落可申、此處能々御勘考可被成候。七條之内に信賞必罰を加候へば可然か。先頃は擧賢退不肖に附候御咄し合にて候へ共尙考候事に御座候。御狩場の條御郡代申出之通りにては重々恐悦奉存候。然し尙小前の處監察より聞方致候様に有御座度奉存候。

京師の次第被仰下、思召重々御尤に奉存候。彌以幕威御張立と被存、誠に慨嘆の至に候。薩の事徳富太多助より承り、定て同人罷出も可致哉、御聞取の上二の丸へ御達可然奉存候。流石大隅君非常之人才には相違無之、可怨は天地の大道承知無之、事爲之末のみに馳られ残念々々。此段迄奉復、餘は付後日申候。頓首拜。

十一月十日

小 楠 拜

茶陽先生

尙々御改作拜見、別段に覺申候。小拙も内藤まで少々愚案咄し置、定て御承知可被下候。不備。
(以上元田への書簡七通元田竹彦藏)

二八二 横井牛右衛門へ

返々さし上置候益御不用に候へば御返し被下度奉存候。以上。

先日は忝候。病中不興之至り失禮仕候。扱焔石御心配被成下、最早御手に入候と奉存候。此者に御渡被下度奉願候。寸斗快く無御座、一日も早く藥用仕度奉存候。

廟堂御一新恐悦に奉存候。いまだ委細承り不申候。何に此節は十分之御基本相立候御事に奉存候。此段迄早略仕候。以上。

十一月四日

小楠

牛右衛門様

(横井時靖藏)

二八三 横井久右衛門へ

拜呈仕候。先夜は大慶に奉存候。(横井牛右衛門)竹部御物頭珍重に奉存候。扱先日略得貴意置候友岡熊事女(或)をき候儀頻に叔母より相談いたし、幸相應之者有之由にて一日も早く御相談相濟候へば都合宜しきとの事に御座候。此儀は既に一昨年御相談仕置候事にて此一條は相許し不申ては難叶、左候へば給銀等は一切熊よりかせぎ出し、彌三よりは食せ候迄にてよろしく、屋敷も只今之處に少々取り繕候迄にて是も彌三難題には相成不申候との事に叔母より相談仕候。右之通りにて何分彌三手許に可然御相談被成下、よろしく御取計可被下候。尤外出之儀は堅禁制にて、叔母にも重々申置候。廿八日にも懸御目可申候へ共、醉にては何も御咄合出来不申候付此段拜呈仕候。已上。

三月廿六日

平四郎

久右衛門様

(横井時次藏)

二八四 嘉悦氏房へ

拜呈仕候。先以頃日は參堂過分之御馳走被下厚忝々拜謝難申盡奉存候。痛飲留連近來無之大慶、奉始御母堂様皆様に吳々可然御禮奉希候。隨て衣類此者に御渡可被下、何も近日御來臨重々奉待候。此段迄拜呈仕候。以上。

三月十二日

嘉悦様

横井

六五〇

(嘉悦博矩藏)

二八五 矢島源助へ

源助の父は安政二年六月死去したから、その以前のものたるには間違ない。

爾來は書狀も進不_レ申御無音に押移申候。先々御無事珍重之至に御座候。扱御令妹御病氣些重々敷段承り、何角御心配之御事と察入申候。秋堤參候事にて無_レ程甘快に被_レ趣候事と存申候。被打續_レ御病人別て御心痛之至、御大人様御氣遣一入之御事、萬端御心配と存候。此許にて兩三輩近日御見舞に打立罷在、然し小生久々不_レ鹽梅にて今少保養元氣平復之上と存居候へば何に當月末・來月初にも參堂可_レ致、尙又其節は便義に可_レ申述、先御見舞迄申縮候。以上。

六月十六日

源助様

平四郎

(紫藤章藏)

二八六 竹崎律次郎へ

先日は寛りと得_レ拜話、大慶之至に御座候。扱急に及_レ御相談、度儀御座候間、遠方御苦勞に御座候へ共御出被_レ下度一重に相願申候。此段迄拜呈、餘は懸_レ御目、萬々可_レ申述候。以上。

後五月十三日

律次郎様

平四郎

二八七 竹崎律次郎へ

忝々致_レ拜見候。頃日は忝候。其後御不快之由さぞ_レ御難儀と存申候、最早御甘快珍重に御座候。扱津(小)勢事にとりて御申越忝候。其以來よ程心を御用候方には相成候へ共、全體條理に暗く其上是迄之習氣に拘り候事として寸斗手を付候筋見へ兼申候。是より申聞度候へ共夫は却て宜しく無_レ之、先何とも咄合不_レ申候。何れ近日には少々甘き可_レ申候。夫を相待申候。(源助、つせの兄)源介も近日に參り可_レ申候。此節は寛りと咄合可_レ申候。内藤歸候て源もよ程省悟いたし候趣に相聞へ、悦申候。此段迄略復申候。以上。

後五月十七日

律次郎様

平四郎

尚々折節河瀬・野田敬參り及ニ合戰、夫故略復申候。以上。

二八八 竹崎律次郎へ

御紙面忝々致ニ拜見候。愈御安康珍重之至に御座候。扱御見舞として玉子・そばのこ被ニ贈下、忝々拜受申候。

源介方一條御心配に相成申候。先日忠左衛門參り得斗咄合申候、是も合點いたし申候。何に益後御出之上萬々可ニ申述、此段略復申縮候。已上。

七月七日

律次郎様

平四郎

二八九 竹崎律次郎へ

扶持方御配慮に相成忝存申候。扱徳太一條、牛右衛門手許表向は何之子細も無ニ御座候へ共、いまだ内心些さし障申候。是はとても急には解申問敷、何に近日都合可ニ有ニ御座事に見込申候。

「ヒストン」大之方一包御送り被下度、一日も急ぎ申候間幸便次第に御遣し被下候様相願申候。二三日中には大方御出も可ニ有ニ御座、御待申候。此段拜復申縮候。

十二月廿一日

律次郎様

平四郎

二九〇 竹崎律次郎へ

忝々拜見いたし候。頃日は久振に寛りと得ニ高話ニ大慶之至に御座候。扱扶持方御世話に相成申候。家内銅山見物之儀忝候。然處何角さし支近日に打立は出來不申候、何に十五日後には出懸可ニ申候。其節は御通路に及可ニ申、何に近日に御出方可ニ被下候。此段拜復申縮候。以上。

四月五日

竹崎兄

横平拜

二九一 竹崎律次郎へ

先日来は忝候。いまだ熊本御到留と存候。扱病氣寸斗快無ニ御座候。今日はさして見候處大分之疼痛にて、とても行れ候事と被存不申候。因て長崎行一日も早く打立候筈に家内申談候處何れも同意にて心決いたし候間甚以心外に存候へ共御うち立被下候様萬々御頼申候。尤一日も早き方可ニ然存候間願すみ次第年内よりも出懸申度存申候。おつせ一人つれ申筈に相談相決申候。

一 願之義は牛右衛門に御相談被下、同人より可然世話いたし吳候様御咄し合可被下候。
 一 御噂も御座候通り船にて下り、河尻より本船に乗り替へ申方可然候。是等も御世話被下度重て御頼申候。先此段極く急ぎ得御意申度、早々申縮候。以上。

十二月十三日

小楠

竹崎君

尚々御出懸被頼にては何程可有御座哉、村上迄社中より内意申候へば直にすみ候事かと存候。
 以上。
 (以上竹崎への書簡六通竹崎律次藏)

二九二 竹崎律次郎・矢鳥源助・徳富太多助へ

鮫島咄し新堀にて今日は暮申筈に御座候。段々咄合重り候間夕方七ツ半比(午後五時)より三賢御出方可有之候

律次郎様

源介様

太多助様

平四郎

(徳富蘇峰藏)

二九三 河瀬典次へ

河瀬は小楠の門下でもあり相辯でもあつた。小楠に調法がられて恰も腰巾着のやうに小楠に随従してその面倒を見、家事向の世話をもなした。諸方に官遊したが、歸郷後産業の開發に盡力す。

一米拾九石五斗

代三貫九百七拾九匁五分九厘

右之内

夏已來拜借御難題に相成居候分と種々之品拜領いたし候代

合貳貫四百六拾八匁三分六厘

右之通御差引被下、殘

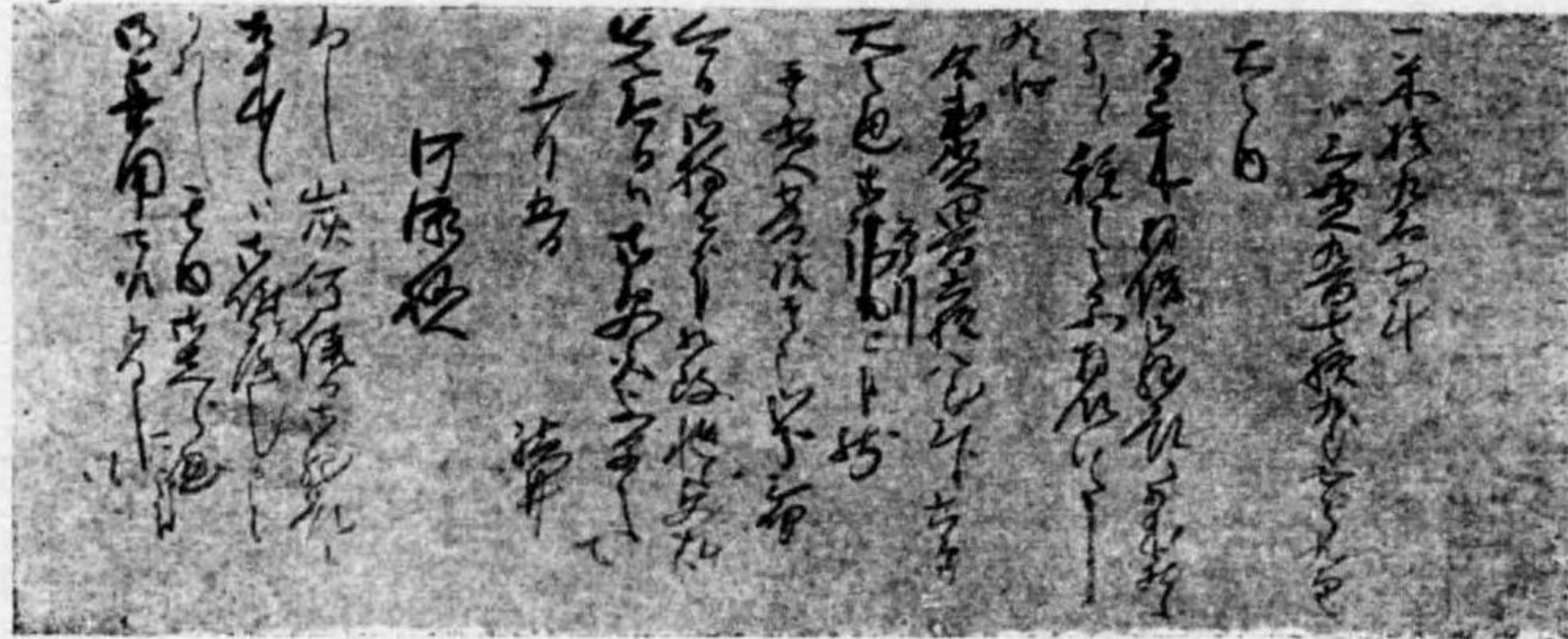
壹貫五百拾壹匁貳分三厘

今日御持せ被下、相改儲に受取候、先今日は御受取迄。早々以上。

十二月五日

横井

河瀬様



(藏平三瀬河) 書取受のへ次典瀬河りよ楠小

尚々炭何俵か御難題に相成候は御附ケ落しかと奉存候。其内御しらべ可被下、御算用可仕奉存候。以上。

(河瀬三平藏)

二九四 竹崎新次郎へ

名は政長、小楠門下生。父死せし時彼は三歳であつたので、律次郎木下家より入つて家を嗣ぎ新次郎の養父となつた。

愈御安康珍重之至に御座候。先日は御養父様御不快之段、最早御全快と悦申候。扱扶持方何角不足いたし申候間どふぞ四俵急に出し候様、御世話被下度吳々御願申上候。此段迄拜呈申候。

九月廿九日

横井平四郎

竹崎新次郎様

(竹崎律次藏)

二九五 竹崎新次郎へ

一書致拜呈候。先日は忙敷内ながら懸御目大慶いたし候。中山一件さぞ御心配と存申候。どふなりこふなりあり付の由御互に安心之事に御座候。扱墓所花立盆前に替へ申筈に御座候處此許にて一

切竹無之迷惑いたし候間、近比乍御難題別紙之通り御世話被下、來月十日比迄御遣し被下候様吳々御頼申候。代錢は御取り替へ被下、追て致返上可申候。何分宜敷様萬々相願申候。此段相願申上度、早々如此御座候。已上。

六月廿六日

平四郎

新次郎様

註文

一 墓十三ヶ所 花立貳十六本

竹のまわり大抵並尺にて五寸六寸位か、かねにして宜しく、勿論本すへ有之候へば大小は少も不苦、程能御見繕ひ御作らせ御送り被下候様吳々御頼申候事。

六月廿六日

横井

竹崎君

(竹崎政雄藏)

二九六 徳富熊太郎へ

愈御安康奉賀候。然ば齋藤理喜次跡養子最早夫々片付爲申にて可有御座候へ共、以後尙又考付候

横井小楠遺稿

六五七

義御座候間不願_レ憚得_二貴意_一申候。追々御咄合仕候通彼方家女より齋藤周助を掣養子に取組吳候様申出之趣一ト通りは尤之義に相聞候へ共、一旦龜は妻に相成、今更其弟に取組候へば是は倫理之大亂と申ものにて如何に理喜次遺言といたし候ても決して相成不_レ申義と奉_レ存候。且又玄十郎養子之義是は徳左衛門嫡嗣之事に候、宗家とは乍_レ申我家を捨て、彼方を相續いたし候事何程に可_レ有_二御座_一候哉。徳左衛門了簡宗家を相立候本意に御座候へば周助を遣候義當然と被_レ存候。左候へば前條之通り掣養子之取組はさし置候て他より妻對仕らせ、家女は他に縁付いたし候か又は此儘にて居候とも其身之望に任せ、終身之事徳左衛門より引取世話いたし可_レ申候。其義は徳左衛門より私え咄合仕義も御座候。乍_レ然家女了簡是非共自身に掣養子之念願に御座候へばとても周助は相成不_レ申、他家より呼迎へ可_レ申と存候。所詮之處家女を相立外家より掣養子仕候か、周助を養子に仕り家女は一生徳左衛門引取り養育いたし候かの兩條之筋に落着可_レ仕重々當然と奉_レ存候。此趣御同意に御座候へば御互組合中御咄合之上彼方縁家中に御相談被_二成下_一候様奉_レ存候。必多物^{ヒタクモノ}理喜次病死達も延引に相成、御互組合中にも相濟不_レ申候間愚存之趣得_二貴意_一申候。右迄拜呈仕候。已上。

横井平四郎

徳富熊太郎様

尙々理喜次縁家中にては山田延壽家女掣養子之存念に居候由、是は誰ぞ罷越候て決して相成不_レ申

段得斗熟談仕候方可_レ然奉_レ存候。夫迄延壽聞入不_レ申候へば徳左衛門同姓之筋を以て取り切り候て、前條之兩條に落着仕可_レ然奉_レ存候。此趣も心付申候間得_二貴意_一申候。已上。

(徳富蘇峰藏)

二九七 伊藤莊左衛門へ

新春之御賀目出度申納候。御全家愈御平安珍重之御事に御座候。扱四郎彦事去冬より大分志相立、修行工夫切實に相見え甚以大慶に存申候。只今通修行相續き申候へば當年中には嚴斗相進可_レ申存申候。因て當年は大事之年に御座候間可成丈御配意に被_レ及、出府さし支無_レ之様御世話被_レ下候様吳々存申候。此段拜呈申遣度如_レ此御座候。以上。

正月二日

平四郎

莊左衛門様

尙々此節は大勢出浮御世話と存申候、吳々宜敷御配意御頼候。以上。

(出田保雄藏)

二九八 伊藤莊左衛門へ

一書致_三拜呈_二候。時下御安康珍重之至に御座候。先以 御慈母様久々之御病氣追々に承り、何角御心痛萬端想像いたし申候。近日熊太郎紙面にて大分御甘快に被_レ趣候由目出度御競にて可_レ有_レ之、申迄も無_レ之候へ共御老年之御病氣に御座候へばとても急速には御平復は出来申間敷、何分漸々寛々に御甘快に趣き可_レ申、吳々御氣長く御競御看病可_レ有_レ之存申候。四郎弟もさしはまり看病の由當然とは乍_レ申珍重に存悦入申候。よろしく御致聲可_レ被_レ下候。御見舞爲_レ可_レ申述_二如_レ此に御座候。餘は一切略申候。以上。

六月十一日

横井平四郎

伊藤莊左衛門様

(山下昇一藏)

二九九 伊藤莊左衛門へ

令弟出府に因て御紙面被_レ下忝々致_三拜見_二候。御全家御清福、貴公御替り無_レ御座_二旨珍重之至に御座候。當春は暫御出府も可_レ有_レ御座_二段先達純三郎(江口)より承り相樂居候處其儀出来不_レ申、去とは残念に存候へ共如_レ來諭_二人事天命之所爲不_レ可_レ強事に御座候。然るに學は人事日用之上に有_レ之、於_レ是平生之心を失ひ候へば所_レ謂は無用之俗學にて我輩講學之本意忽に地を拂候間重々此處に於て勉勵を加へ、我丈之實意を盡し怠らず倦まず益精神を愛養し心懸參り候を實に聖賢之道を學び候者とは可_レ申候。扱其勉め

參り候上にて此心之起りに因て一家之和不和に相成事にて候へば兎角恩愛之心を本とし義理づめに無_レ之様大切之要領にて御座候。朱子寛之字を被_レ説候に寛は事庭之内なりと在る事にては無_レ之、此心之迫切に無_レ之人の非を責めざる心持と有_レ之、重々面白_く覺申候。人之非を責す迫切ならざる心にて候へば事柄は如何に嚴重に參り候ても人心之受は極てよろしきものと被_レ存候。是等は徳富と御講習候て可_レ然存候。兎角道は日用人事之上に御座候へば處し難き所や苦しき場所に於て尤是三省反覆いたし、本然之心に本き人欲氣質之私に克候へば寛々に雲霧を披き青天を見る如の心に相成、後悔も無_レ御座_二却て樂地之味も生じ可_レ申候。此外不_レ及_三多言_二、早々申縮候。何様當春中には四五日にて御出府候へか

二月十一日

横井平四郎

伊藤莊左衛門様

(弓削和三藏)

三〇〇 伊藤莊左衛門へ

御紙面忝々致_三拜見_二候。時節愈御安全珍重之至に御座候。然ば一封並鹽鮑・山いも被_二贈下_二忝々拜受いたし申候。毎々被_レ懸_二御心_二珍重之至に御座候。當冬は米錢之苦御のがれに相成候段安樂國之情境察入

横井小楠遺稿

申候。本領工夫一條重々御同意に御座候。兎角日用應接之處置を失候故正大之氣象を得不_レ申、是に力を不_レ用して洒々落々之工夫迄をいたし候て如何其功を得可_レ申哉、無理成る筋にて御座候。正月中旬は武器見分有_レ之筈に付廿日前後にも相濟候へば御許に出懸可_レ申候。然し丈夫には難_レ申、何に十四五日比には好便可_レ有_レ御座、其節決定は得_レ貴意可_レ申候。何も來春草々可_レ申述、先拜復迄早略申縮候。以上。

十二月十八日

横 平 拜

伊 莊 君

(渡邊季基藏)

三〇一 伊藤莊左衛門へ

四郎弟出府に付て縷々御紙面被_レ下、忝々致_レ拜見候。御全家御替り無_レ御座、彌御安康珍重之至に御座候。此許老人初何も無異に罷在候間御懸念被_レ下間敷候。頃日は徳富久々振に被_レ參寛々相咄申候。定てい才之御咄合御座候と存申候。徳富も此節は大に快復にて珍重に御座候。此暑にて御出方出來不_レ申段御尤千萬、秋冷に相成候得ば必々御待申候。鯉のわた被_レ贈下、別て口物にて夜酒之佳肴大慶に御座候。

當夏は御製酒も好都合と承り悦入り申候。將又御拜借之方も都合宜しく有_レ之段珍重に御座候。何分御家政すわり不_レ申ては氣遣に存申候。右拜借杯にては大抵落着と存申候。乍_レ然萬端御配意御苦勞察入申候。何も秋冷相待寛々拜話樂申候。此段迄申縮候。已上。

六月廿三日

横 平 拜

伊 莊 君

(洪水文庫藏寫本)

三〇二 伊藤莊左衛門へ

御紙面被_レ下忝々致_レ拜見候。愈御安康珍重之御事に御座候。此許同社中相替不_レ申御安意可_レ被_レ下候。然ば御祝儀として御助力被_レ下忝候。然し毎々御難題に相成候事心外に御座候。來春は正月末より御出府之段吳々御待申候。永野も一兩日以前より出府にて御座候間則其段申談置申候。其外矢嶋(源助)・竹崎(律次郎)杯同様にて久振に打集り、寛々及_レ講習可_レ申相樂申候。吳々御さし支無_レ之様に祈申候。徳富も目出度、然し轉居等何角正月中はいそがしく可_レ有_レ御座候。是は先日寛々咄申候。定て御承知と存申候。

純三郎も正月末には出府之段必御申合御出方可_レ被_レ下候。何ぞ相替申儀無_レ御座候。何に不_レ遠懸_レ御

目萬々可申述候間御報迄、早々申縮候。以上。

十二月廿六日

平 四 郎

莊 左 衛 門 様

尙々御令弟初其外にも宜しく御傳致可給候。先日は源助方にて四郎弟に寛々咄申候。彌以篤志之處肝要に御座候。

和左衛門妻は居り合可申候。何角御世話と存申候。宜しく御傳へ可被下候。以上。

(長野忠次藏)

三〇三 伊藤莊左衛門へ

一書致進呈候。先以 御母堂様御事御養生不_レ被_レ叶御遠去之段御知せ被_レ下、誠に以絶言語候次第、御弔儀何とも難_ニ申述_ニ御一家御痛情遠察いたし申候。久々御病氣是迄重々御手を被_レ盡候へば最早此上は致方無_ニ御座_ニ候。先御天命と申ものにて責て此處には御安心可有_ニ御座_ニ事と存申候。就ては御自病も再發いたし候様に承り、如何之御様子に候哉想像いたし申候。重々御保養專一に御座候間御心を被_レ取直_ニ御自愛候様奉_レ存候。此段御弔儀申述度、何も後便に致_ニ付與_ニ候。頓首。

六月十七日

横 井 平 四 郎

伊藤莊左衛門様

別 啓

御大人様に別に御弔儀不_レ申、宜敷被_ニ仰上_ニ可_レ被_レ下候。當夏は此許一向是迄雨降不_レ申候。旱天にて熱氣も強き様に覺申候。其御地何に御同様可有_ニ御座_ニ、時分別て御厭ひ御保養大切に御座候間返すも其御心得吳々祈申候。以上。

(淇水文庫藏寫本)

三〇四 伊藤莊左衛門へ

新春目出度申納候。愈御安康珍重之至に御座候。先以御紙面被_レ下忝々拜讀いたし候。年明候ては彌以御精業之段重々珍重之至に御座候。玄十郎事被_ニ召越_ニ、大分打立罷在候旨珍重に御座候。彌以御引立之程幾重にも祈申候。兎角此男程六ヶ敷ものは無_ニ御座_ニ候。終始甚勞心いたし候。徳左衛門出府参り申候得共丁度布田に参り居逢不_レ申候。いまだ到留いたし居候間何に一兩日中には参り可_レ申候。左候へば玄十郎事も相談可_レ致存居候。徳富母大病之段扱々笑止千萬と存申候。どふぞ快氣に相成候へかすと千萬祈申候。奥山幸に参り都合宜しく大方快方に相成可_レ申、將又江口母も大病と承り、丁度一同にて何角痛心察入申候。源助母も大病一段はよ程重々敷候處少しは快方に趣き、只今通りに候得ば此節は凌可_レ申かと存申候。諸方一同に大病、扱々迷惑成る事に御座候。

此許一體舊冬よりは大分競立、塾中もよ程立志相見悦入申候。當春は一段進歩いたし可申候。夫のみ志願に御座候。其許御閑暇に相成候は、御出府重々待入申候。先拜復迄、何も春長く可述候。以上。

正月十二日

横井平四郎

伊藤莊左衛門様

尚々乍末 御大人様に宜敷被仰上可被下候。將又御令弟方同様御頼申候。何も不遠懸御目々拜話相樂申候。以上。
(不明)

(洪水文庫寫本)

三〇五 淺田和三郎へ

淺田は久留米の人、後故ありて西村文明と改む。十九歳より小楠の門に入り在學三年に及ぶ。後天草富岡の長崎縣出張所に奉職、歸郷後は竹野・生羽・三井三郡の扱所長となりしが、四十餘歳にして辭し、晴耕雨讀の境遇に入つた。

濱田藩の兩生本庄君(二郎)に參り居、拙宅にも來訪に相成、歸り申候へば御序にて一書致呈上候。殘暑の砌愈御安康珍重之至に御座候。此許全家さし障無御座無異に暮し居申候間御懸念被下間敷候。扱春以來御眼病の御様子如何に御座候哉、無心許存じ申候。久敷御書狀も參り不申定て今以御全快にては有御座間敷甚以想像之至に御座候。此許近來は一兩輩は大分此學に眞實にさしはまり悦申候。乍去一體は相替り不申候。就ては種々發明の筋も有之候へ共書狀にては盡し得られ不申候。何分御病氣

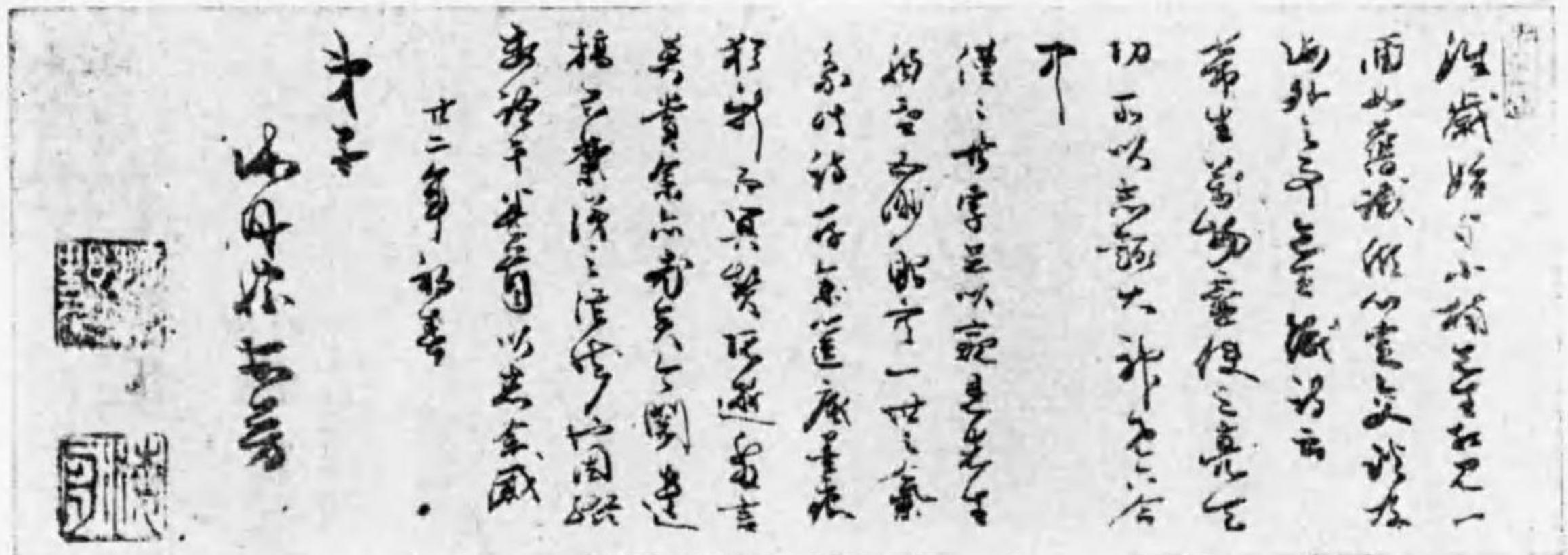
快哉の上は御來訪相待申候。餘り御遠々敷、幸便有之候へば一筆御見舞迄申進候。何も後雁に付し候。

八月十七日

横井平四郎

淺田和三郎様

(田中眞太郎藏)



勝安芳舟小楠遺稿序文

往歲始與小楠先生相見。一面如舊識。傾心定交。談及海外之事。先生賦詩云。

帝生萬物靈。使之亮天功。所以志趣大。神飛六合中。

僅々廿字。足以窺見先生胸吞五洲眼空一世之氣象。此詩存余篋底。墨痕猶新。而冥契既逝。發言莫賞。余亦老矣。今閱遺稿。不禁涕之泫然也。因綴數語于卷首。以志余感。

廿二年初春

弟子

海舟 勝安芳

第四詩文

小楠の詩文につきては『横井小楠傳』中彼の文武藝を記した所(第十九章、四)に述べてある。詩はかなり晩年に至るまでのを存するが、文章は之と異なり、純粹の漢文は多く少壯年時代の作で、其の後は概して普通文か候文で達意を主としてゐる。漢文には同志互に批評しあつた結果でもあらう字句の瑣瑣にまで中々骨折つてある。

(甲) 文

一 貞觀治績政要一書可考。而論其最要者。不知在何事。

明君治天下之要唯斷而已矣。苟無斷則雖有知人之明。納諫之量。而不能以運其明與量。而成萬機之務。其將何由致至治之化哉。語曰。爲君難。夫爲君之難。莫難於用人。用人之難。莫難於任賢不疑。蓋任賢不疑者。知之必明。信之必篤。決之高明。見而不惑。群言動搖。專任之。而果於必用。如是者。所謂斷也。臣觀貞觀之治績。政教及天下。幾致刑措。可謂太平矣。所以然者。太宗能用魏徵仁義之說之效也耳。太宗曰。惜不令封德彝見之。夫德彝便巧小人。其言如可聽。而魏徵所言。頗近於迂濶。太宗終不以彼易此者。豈非其斷哉。蓋斷者勇也。知人者智也。

智足以知人而勇不足以斷焉則奸邪投其間而聰明掩矣。勢必然也。臣嘗觀漢元帝唐文宗皆非昏昧暴惡之君。其智足以知君子小人之邪正。而肅望之。裴度之賢廢而石顯仇士良之奸用者何也。不斷也耳。夫斷則爲太宗。不斷則爲元帝文宗。則勇斷之要乎治也。如輪於車如楫於舟。賢才以是舉焉。奸邪以是斥焉。而太平之治職是之由。恭惟我靈威公中興之盛治。教休美。德澤遠及。後世而不能忘者。豈非任用得其人邪。公之任堀老也。群言沸騰。公皆不問焉。任之益專。然後能盡其材。而成寶曆赫赫之治。抑亦由決之於高明之見而不惑。群言之勇斷也。夫公之盛德丕續天下所共仰望。而其所以致之者。皆由任賢不疑。則如貞觀之治。亦未曾不本於太宗之勇斷也。雖然。斷亦有甚可恐焉。不辨其人之邪正。不審其事之可否。一切任之。而果於必行。如唐玄宗之於李林甫。如宋神宗之於王安石。則由是以招致禍亂。如是者。無其明而妄斷者。其害甚於不能斷矣。智足以辨邪正。而後能斷者。是太宗之斷也。貞觀治績之要。其在於此也歟。謹對。

二 擇將帥論

一國之治亂繫於相。三軍之勝敗繫於將。將與相治亂勝敗之所繫。擇其人可不慎哉。或曰天下唯病無賢相。相賢邪將亦良。相不賢邪將亦不良。人主唯當擇賢相。則良將可因而得也。予

謂不然。將固繫於相。而國有三軍之命。則必委之于將。當是時。國之興廢繫於將。相特一閑人已耳。夫將之重如此。其擇之左不可不慎也。擇將與擇相不同。相者天下之所仰。以望德澤。雖其才不出群。而公正無私。有鎮定物情之量。則可矣。將則不然。不必德量雅望。不必廉耻直諒。顧其才何如耳。古之擇將也。自非大奸惡如虎豹之暴。苟有一偏所長之才。則舉以帥三軍。蓋將帥之任在於行軍戰鬥。而其他非所管也。故擇將唯取馭三軍之才。而不論他之所長。不論他之所長。亦且不問他之所短。不問他之所短者。所以取其一偏之長也。夫其短有可大責者。則其長亦必有可大用者矣。魏文侯問吳起於李克。李克曰。起貪而好色。然用兵司馬穰苴不能過也。文侯以爲將。擊秦拔五城。夫起之貪而好色。乃其才之所以大過人。而文侯之以爲將者。亦唯捨短取長。蓋百短一長者。良將之器也。擇之宜於其短處觀之。彼之短甚乎此邪。此之短甚乎彼邪。其短最甚者。其長亦必大。譬之伯樂之相馬。如曰。是能蹄能嚙。能蹄能嚙者。乃伯樂之所以擇於衆馬中。而天下之騏驥果能蹄能嚙之馬也。夫伯樂能相蹄嚙之騏。唯明主能擇一長之才。若夫衆御者之所相庸主之所擇。則必馴服調良而無力。必廉隅細謹而無才。以馳塹壑。則斃以帥三軍。則敗。亦何以得千金之貨。戰勝之利歟。或曰。捨短取長。子之論則然。然良將必出于世族。孫武之後有孫臏。樂毅之子有樂乘。此亦不可以不擇也。曰。是世主之所取。以爲擇將之術。而覆軍菑國。其可懼莫甚焉。趙用趙括。成。長平之敗。秦用王離。致。鉅鹿之

敗。趙秦之所以用括與離者非以其奢與翦之子。而亦善談兵故邪。夫良將之子讀父之書聽父之言善談兵。自以爲人莫能當。世主不察驟以帥三軍。彼白面子弟何以知馭兵之實。是焉得不覆敗邪。如臚與乘則特偶然已耳。古之擇將不問族類貴賤。雖盜賊亡虜而其才可用則舉以爲將帥。漢高祖之於韓信。唐太宗之於李世勣。薛萬徹。或拔之亡虜。或擢之盜賊。卒伍馳驅以定天下。如三子亦百短一長之才。而高祖太宗善捨短取長。則二君亦可謂得擇將之術也。夫文侯者戰國之明君。高祖太宗創業之英主。而其擇將之道如此。則吾未知捨此而更有他術矣。

(一一)橫井時靖藏寫本

三 與友人論岳忠武書

捧讀大集義正而詞美。今世文士何易見如此者。諸躰中史論尤卓卓無可疑者。但論岳忠武一篇存竊以爲不然。蓋文載道之器。其言不合道則貽禍天下。後世不小。況乎以忠武誠忠大節爲不知權者。不唯誣古人。抑於我心毋乃大謬乎。請極言之。忠武班師偃城。實出於大義不可已。而平生心事於是乎尤見之也。縱令此時不奉詔班師。而外圖中原。內清君側。如足下之言。則是叛臣耳。安有忠武誠忠而爲叛臣之行。夫忠臣自有忠臣之行。必不爲叛臣之行。若夫

必爲叛臣之行而後以爲忠臣。則古今來未見其人也。存嘗讀史以爲有叛臣而爲忠臣之行者。未有忠臣而爲叛臣之行者也。郭邪陽權震一時。功業出群。而召之未嘗不來。遣之未嘗不去。當此時。上有肅代庸暗。下有盧杞張延賞大奸。而邪陽去來唯朝廷之命之謹。宗忠簡屢破金虜。金虜庶幾北遁。忠簡恢復期日。請高宗還京者五。而黃伯彥汪潛善沮之。忠簡終抱恨而死。此二君子以一身任天下之安危而爲奸臣所誤。未嘗反戈而清君側。則知忠臣必不爲叛臣之行也。夫國事有可以成者。有不可以成者。人而不可成者。天也。亂臣要君矯命令四方。我起兵討之。灑血禁闕而不顧。如張浚討苗傅。是出於人之亂。可以成也。其君昏暗不明。爲奸臣所誑誤。反以忠良爲疑。如肅代高宗。是出於天之亂。不可以成也。蓋忠臣之敬其君如天之不可犯。是以其昏暗不明。雖足以危宗廟覆國家。而我極言諫之而不聽。無復可諫之道。則如箕子之爲奴。屈子之沒水。寧爲狂與死而不忍犯其君。是人臣之道也。況乎將帥擁強兵據要地。生殺進退之權在我。則崛強跋扈之疑不能免於當世。是以忠臣常抱憂苦感慨不得自明之心。其又奚暇清君側哉。則如忠武班師實出於不可已之大義也。且夫令忠武外圖中原。內清君側。如足下之言乎。吾未知其果成大功也。蓋此時諸道師先撤。而忠武一軍不奉詔進討金虜。金虜知我情實。嚴兵拒之。則不如昔日戰必克攻必取也。進而不能克於外。退而向內。秦賊老猾聲其叛名。檄諸道討之。則內外受敵。進退維窮。吾知其必敗也。嗚呼其君昏昧奸

邪擅權。而忠臣抱恨於外。其事終不可成。亡國之情何嘗不如是。建武之亂。楠中將獻策闕下。爲奸臣所沮。以致湊川之死。亦出於不可已也。而天下古今未嘗有一人議中將者。則何獨於忠武容喙於其事哉。夫所貴乎人者。忠孝之道。而論人亦當以忠孝之道。今足下論人非忠孝之道。則足下之爲心也惑矣。足下宜反覆深省。存豈翹爲忠武辨之而已哉。傳云。惟善人能受盡言。足下虛心下問。故存忘。愚妄敢言之。惟足下察其誠。擇其言。終有以教之。

(小楠遺稿)

四 明太祖論

有天下之遠慮者。建天下之柱礎。必擢天下之材。付以天下之重。而後威令行于下。衆望歸于上。天下常又安。此豈唯主弱國危時託以鎮定物情。雖治平之日亦固宜然。而況於主弱國危時乎。漢武帝擢霍光於稠人之中。屬以天下後世之事。武帝崩國危。光能奉幼主。平強藩。戮亂臣。置天下於泰山之安。夫見武帝之遠慮。以熄後患。則建文之事。豈可不責太祖哉。懿文太子薨。建文帝弱。當此時。外有諸王。倔強自逞。而內無重臣。宿望可以倚賴。太祖一瞑目。則天下之事未可知也。當時太祖誠能舉天下之材。尊以冢宰之位。付以宗社之重。則天下之權有所歸。而萬民之望屬焉。則太祖雖崩。猶在也。設令天下一生禍亂。亦不足以定也。燕王雖強。何以得

覬覦于其間矣。不然。環而視者。豈止一燕王也哉。太祖意諸王親屬也。不敢害後嗣。獨可憂者。將相大臣之叛耳。苟分其權。不歸重於一人。則雖彼桀驁之徒。焉得謀而反也。於是乎罷丞相。設府部都察院。分理庶政。謂是足以制大臣之專權也。而不知朝權由是輕。威令不行。天下以致靖難之亂矣。抑夫諸王何親之賴焉。漢七國之反。晉八王之亂。非其親邪。苟無內重之勢。以制御之。則覬覦之憂。決眦之變。其何代不有。且夫大臣豈盡懷不逞也哉。其反者。或出於所迫。則有使之者也。太祖誠能以寬大臨之。彼皆爲良臣耳。何足慮焉。此其急於所不足慮。而忽乎所當大慮。以蓄成天下之亂。惡得免其責邪。嗚乎。太祖雄才大略。以平定天下。及其守成。漢唐創業之主。或所不及。而後世子孫之慮。獨不及武帝者。此非其智慮爲忌刻所掩也邪。

五 劉裕論

從來奸雄謀篡逆。必挾威名而觀人心之向背。向則篡焉。背則止焉。未嘗有不出于此術者也。桓溫敗秦于藍田。不渡灞水。王景略譏之。薛珍勸徑逼長安。溫不從而還。余始怪之。讀宋書而後有釋然于心者矣。夫秦地躡戎蹄者百年。父老苦腥穢。不日不望衣冠矣。劉裕之入關也。歡聲滿巷。猶迷兒之逢母。滅人之國。戮人之主。而人情之歸如是。以此時謀中原。物逢其會。天與其成矣。且夫關中華戎雜錯。恩威未洽。裕固不可一日去關也。況乎其地接魏界。夏二虜之

圖之久矣。而不敢爭者。憚裕之英武耳。裕今日去之。則二虜明日爭之。秦之有與。失在裕之去與不去也。裕之智略。豈不知之哉。而決意東還。吾知其有他志矣。桓玄篡晉。不回踵而敗。玄之所以敗。無威名以壓民心也。則裕之篡逆。不敢發者。恐爲玄耳。故討秦收威名。以謀篡逆。亦非有意中原者。其爲術也深且密矣。魏崔浩曰。裕克秦而歸。必篡其主。按兵息民。以觀其變。秦地終爲國家之有。夏王買德曰。裕留幼子而歸。正欲急成篡事。不暇復以中原爲意也。二國有人。能料奸雄之心。而江東無一人料之。此晉之所以滅也。夫溫與裕。其爲心也一。其爲術也同。而裕則遂志。溫則不遂者何也。溫之時。雖晉室衰。尚有人足以鎮物情。而民心定矣。當裕之時。晉之衰更甚焉。且無一人扶持之者。此二人者之所以遂不遂也矣。夫裕之術智固優。溫則非襲其故智者。二人之爲術。適合符節已耳。豈翹二人而已哉。古今奸雄。未嘗有不出于此術者也。余故論之以爲奸雄篡逆之戒。

(四—五橫井時靖藏寫本)

六 秦時論

承久之亂。後鳥羽上皇之詔。至鎌倉。義時召秦時謀之。秦時乃引平相國逆天子之事。正臣子之義。勸義時以東身詣闕。而天下無所間然矣。迨源義公脩史。亦謂抗王師。指斥乘輿者。非秦

時之本心。誠不得已也。後世遂罕知秦時之心事者。蓋賊臣顯行其逆者。易見。隱行其志者。難知。彼秦時者。兇逆浮於義時。而隱賊亦有深於是者也。夫見人曝然而吼。而嚙者。虎也。能制嚙人之虎者。狡狴也。有人觸於虎。虎將嚙焉。而狡狴制之。虎不敢嚙焉。制而不止焉。則狡狴亦將嚙虎也。況乎狡狴將嚙人。使虎制之。則將遷其怒於虎。然則狡狴之暴甚於虎也。彼義時者。虎也。秦時者。制虎之狡狴也。後鳥羽上皇之觸義時也。義時將吼而嚙焉。秦時乃以東身詣闕。諫之。猶狡狴之制虎。而義時不敢嚙焉。而秦時遂逞其兇逆。則其吼而嚙者。甚於父。況乎秦時挾兇逆之心。陷義時于惡名。以欲免天下之責者乎。夫東身詣闕者。仁人君子之行。而天下之至誠者。獨能之。義時之於幕府。其不臣如彼。而秦時諫以仁人君子之行事。王室。此義時之固所不能行。而秦時豈不知之哉。蓋北條氏之收大權。在此一舉。而義時獸心不復。顧大義。意秦時之爲心也。吾以大義正之。則義時獨被惡名。天下不復議己也。乃敢以大義要之。陷其父子大惡。以收大權。竊正名。此其兇逆浮於義時。而隱賊亦有深於此者也。縱令秦時實有東身詣闕之心。則是重盛之所以處逆父之心。而諫而不聽。則以兵脅義時。令其不得逞。兇逆亦臣子處變之道也。秦時不出於此。爲之抗王師。舉兵犯闕。執三天子。遷之窮海。鱗介之濱。以逞其兇逆。此曹操司馬昭之所不爲。而秦時忍而爲之。謂之非其本心可邪。況乎三天子之崩去。義時死在十餘年後。使秦時果有心于王室。則何憚不復之京師邪。嗚呼。此狡狴之暴甚於虎者。昭々

乎明矣。秦時大奸隱賊神人之所不容。而獨免君子之責者何邪。抑義公之不責之而白其心者。謂立後嵯峨帝定王室也。夫後嵯峨帝者。土御門帝之子。而承久之亂。土御門帝獨爲不與謀焉。秦時恐廷臣將立後鳥羽上皇之孫也。於是乎迫立後嵯峨帝。是出其恩怨之私。而以之爲天命正理。則桓溫之廢海西公而立會稽王昱。亦將爲出天下之正義邪。嗟乎秦時奸賊之尤者。以欺天下之愚夫。亦以欺名公巨儒。則知如夫操與昭。未足以比其兇逆隱賊也。

(小楠遺稿)

七 尊氏論

取天下者不在乎戰之必勝。而在乎人心之能歸也耳。蓋戰雖百勝。一敗則亡。故奸雄之志于天下。必視人心之所向。人心向彼。則唱于彼。向此。則唱于此。務以收攬人心。是以戰雖屢敗。而天下之權常歸之。建武之亂。新楠諸將戰屢勝。而尊氏獲其志者。抑有故也。蓋建武中興也。天下顛然。仰新政。然而□□抑將士之賞。益變幸之封。而人心背焉。於是乎尊氏割土地。兵權授之諸將。以收天下之心也。夫尊氏得志也。逆新楠諸將。失志也。順逆之分。天理人心之所向背也。故正成之死。義貞之敗。天下豈莫不戚然者哉。況乎民之所厭者。□□也。非王室也。今其所厭者幽矣。不能不復思王室也。則尊氏亦不可復以逆強焉。於是乎立光明帝。以收天下所

向之心矣。魏高歡逐孝武也。知天下之不容。乃立孝靜帝。以收人心。奸雄之爲術。適合符節而耳。若夫尊氏不立光明帝。而醍皇據南山。新楠諸將唱大義。投之於天下所背之心。則尊氏將何術應之。余知其必敗也。夫尊氏兵略固非新楠諸將之敵也。然百敗一勝。以取天下者。豈非收人心之所致也哉。嗚乎人心者。奸雄之所攬。以獲志于天下。而豈翅尊氏然也哉。

(橫井時靖藏寫本)

八 楠正行論

天下有俗輩之論。泥成敗之迹。而不察確然機會之勢。以英雄豪傑。深心苦行。不痛惜其不幸。而視爲尋常忠死節。楠正行四條。啜死是也。正行有辭。賜宮人之和歌。因以定爲多病速死。遂致此俗論。舉天下百世無一人。明其深心苦行。則余得置而不辨之哉。蓋中興諸將。正成。義貞。輩前後死節。四方義氣。茶然摧折。天命既去。不可復爲。以彈丸黑子之地。當天下。及延元帝崩。足利氏以爲天下大定矣。然正行近起畿內。二將連敗。京師大震。以謂大亂復發。於是遣師直來侵。夫師直威權重于尊氏。直義而用兵。固非兄弟之所企及也。而舉天下兵來寇者。是決成敗于一戰也。我避其鋒。退守險要。彼必乘勢。縱兵窮勦。則國家覆亡。將在此時矣。然則血戰奮鬪。不得不出于進而死敵之策。夫進而死。敵士氣百倍。固吞大軍。猶項藉之沈舟。而進韓信之

背水而戰。所謂陷死地而後生爭必勝之勢者。奚能莫決勝一戰。而不獲師直者哉。既獲師直。乘勝襲京尊氏兄弟。望風而奔者必矣。進而窮逐之。譬如源廷尉於木曾平氏。則余知戮尊氏。不出十里之外矣。嗚乎。恢復之機會在此一戰。而以正行神勇奇算。誰謂慮不出于此也。正行辭闕言曰。非臣獲彼首。則授臣首于彼。是其心既有一定之見也。然則和歌何以決死。曰。當天。下之至難。而負中興之大事。不決死以任之。安能爲守及父遺屬。既守遺屬。一心唯在奉公討賊。而何必多病速死。子々之行之爲。余嘗謂正成用兵奇正變化固古今一人也。如神卒摧堅。疾風乘機。正行特優于乃父。求之他人。太類源廷尉也。嗟乎。有將如正行。皇運衰弱。猶可以恢復。而機會不能成。終以致死。抑非國家終天之遺憾乎。雖然。成敗天也。其死也。見乃父子九原。告之。正成必曰。吾之所屬于汝也。則正行應無遺憾矣。

（小楠著「南朝史稿」附記）

九 豐臣太閤論

其上

蘇明允論高帝云。定天下之智略不及陳平。張良。而後世子孫之計良。平智之所不及。蓋帝之智明於大而暗於小。其言當矣。吾且以之論豐公。公之跡反於高帝。而吾之論公亦反於明允。

夫揣摩天下之勢。計算奇中。如小早川隆景。黑田孝高。勇決勁悍。前無堅陣。如上杉景勝。福島正則。公皆驅馳奔走。之以定天下。其雄才大略。殆古今一人而止耳。然至天下已定。爲後世子孫之計。則反不及加藤清正。片桐且元之智。死骨未冷。一敗赤族。蓋公之智明於小而暗於大者。至是而後可見也。公之將終也。屑屑乎誓約盟書之間。而不及乎規畫處置之事。何邪。當時列侯將帥皆出於公之家。奴卒伍。其平素推恩盡心。親如骨肉。蓋其意謂我之於彼。如此之厚。則彼之於我。當不爲負心事。假令有唱亂者。決必不至與之並叛。是公之所賴以爲長城。而不及乎規畫處置之事。不知彼之服從於公者。土地貨財之利耳。人以土地貨財之利。陷於彼。飢附飽颺之徒。安保其不欣然從之邪。且織田氏於公也。如彼其厚。而公之於織田氏。如此其薄。則將帥之不致忠於公者。公宜自知之。而晏然倚賴之。其亦有智之所不及歟。夫智者之算利害者。莫要於善量彼我之勢。吾觀清正且元之言曰。天下之勢。東強而西弱。彼勢日盛。而我勢日衰。宜曲意奉之。屈節事之。彼百方挑之。而我奉事之益固。令彼無一言之可託。徐觀其變。以計之。則事或可爲也。天下之至計。二將之言盡矣。公不出於此。而出於彼。不任清正。且元而任三成。長盛。且令宮闈親幸。得專政權。故陷釣餌之計。遂自啓釁。以取其敗亡者。亦有智之所不及歟。昔者信長之謀。甲越也。陷以甘言。效以珍寶。惟恐少拂其意。信玄嘗誡勝賴曰。信長之事。我其謀深矣。吾死汝宜以信長之所事我者事之。庶幾國以無憂矣。嗚乎。東西之事。殆有似是。

者。余因知清正。且元之所算。乃天下之至計。英雄所見。如合符節。而公慮不及此者。非以公之智由明於小而暗於大也邪。

其下

余嘗觀豐公之用兵者。非有他謀畧籌策。直乘其勢。如江河沛然。無之能禦已耳。其最幸者。繼田右府之斃。而是公之所以展驥足也。故乘其勢北征。而柴田氏授首。東伐而北條氏族滅。西討而嶋津氏束手。六十餘州兵鋒所向。如拉朽然。然而於其征韓。見略之不至。謀之不深。事之不成。未足深怪矣。夫取天下之君。百戰奮鬪。必自任而不使人任之。漢高祖。唐太宗。皆自侵鋒鏑者。不唯一將士之心。亦欲我軍以壓敵氣也。公於東伐西討。自任而不任人。是以崛起如彼者。皆能鑿之。若夫以此時任人而不自任。則吾未知勝敗之所在也。況越萬里之海。遠爭人之國。不自任而任人。雖有奮鬪克敵之勢。而師無鎮重之威。諸將相忌。軍心不一。是以一旦畧之地。又隨而爲敵有。是見其智畧之不至也。夫伐人之國者。必先以謀絕。外令其失所。賴然後敵可破焉。功可成焉。秦之伐齊也。使張儀欺懷王。絕齊楚之親。邯鄲之役。先聲言曰。吾攻趙。諸侯敢救者。必移兵先擊之。或以利欺之。或以勢壓之。是用兵者之所宜先也。韓之爲地。與明接壤。則彼請援于明者。必矣。請而出師。則我以一當二。衆寡之不敵也。亦明矣。是宜先謀。所以止明兵者也。明兵不出。則韓之事固易耳。然則何以止之。奮力死鬪。疾先入韓都。行軍嚴肅。禁

殺掠懷士民。按兵無動。密遣使於明。就貴重。用事者。獻方物金帛。又密以貨財賄在朝之臣。曰。卑國恭獻王之時。嘗通上國。蒙世祖皇帝之特恩。世々臣屬中國。後遇兵亂。貢物絕者百年。至臣秀吉。久懷奉順之心。實欲一通上國。繼恭獻王之跡。以寵光卑國。而海路遼遠。非假道朝鮮。則不可。嘗請之朝鮮。朝鮮不喜。猥加賤辱。臣不堪憤怨。是以舉兵討之。待其服罪。乃旋師結隣。好長。臣屬中華。非敢有他也。彼漢人素矜尊大。而悅奉事于己者。況此時神宗失德。政在閹宦。而朝廷無人。邊隅叛亂。聞此言。則必喜以爲寔然。是或可庶乎援之不出矣。若不聽而出兵。則奮力死鬪。先挫援軍之鋒。而後全軍爲二。留一軍守王城。一軍退慶尙。據險要。多運糗糧。以爲久駐計。彼來攻王城。則一軍直向王城。以爲聲援。一軍乃入江原。而出彼後。則彼必又兵而當江原軍。王城二軍乘其虛而擊之。則彼力不敵。必退與江原兵合。而後王城二軍擊其前。江原一軍擊其後。前後夾擊。則彼雖衆且勇。必不戰而走。我不敢窮追之。王城軍還守其城。江原軍留畧其地。則京畿。江原。慶尙。三道不日而可得矣。乃與其民約賦稅。以充軍糧。休兵養氣。而後南畧忠清。忠清既舉。則全羅。黃海。二道。望風而潰。乘勢以謀其西北。則有智者不及謀。雖有勇者不及戰。氣屈鋒挫。不待七歲。而七道全爲我有矣。不知出於此。乘勝直入其地。幸彼昇平百年。民不知兵。一城破而萬壘瓦解。雖曰我威武亦天也。迨明兵出。揚威聲而壓我。我氣却爲之頗挫折。沈維敬輩。察我軍情。巧鼓簧舌。得以致講和之謀。至再用兵。兵氣不奮。戰屢不利者。蓋

韓人懲初敗守備防禦愈益嚴戒。士氣亦隨憤勵。彼今日之鋒銳於前日。而我今日之勢鈍於前日。遂至擲莫大生靈之命而不能取尺寸之地者。不知其勢之過也。夫能用兵者先察其情。而後侵伐可得而施焉。猶如良醫之察形貌氣脈而用藥無不當其疾。是以其用力也少而收功也大矣。若夫力戰無謀而用兵則設令有大勝亦僥倖而耳。余觀漢唐之所以興者不在於秦群雄之怯弱。而在於高祖太宗之自任之也。秦所以滅六國者不在於諸侯之衰弊。而在於秦之能排合從擠連衡之畧也。竊怪以公之雄才大略不出於此何也。目不見古今之成敗耳。不聽天下之形勢。獨智自用以任其聰明。是其所以敗也。雖然公者非常之英雄固非可以一事而論也。公嘗謂諸將曰。吾將以李氏爲前導滅朱氏而王漢土。余始謂是亦英雄欺人之常言已耳。後及讀明史愕然久之。乃知覆明國者公而非覺羅氏。蓋征韓七歲明之兵力爲之挫財用爲之盡。天下流賊亦因之起。則其腹心先受疾者公。而彼覺羅氏者成公之事者也。

10 石田三成論

昔織田右府之亡也。其臣以死抗太閤者獨柴田勝家是已。勝家死太閤始得志于天下。或謂石田三成關原之舉亦猶勝家之於太閤也。太閤薨關東威權日盛。而大坂之危既已迫焉。三成以一城主舉兵抗關東。成敗天也。其志可悲也。甚矣三成之欺天下也。生以欺當時。死亦以

欺後世。其陰險邪智豈非奸雄之尤者哉。蓋三成不啻德川氏之亂賊。抑亦豐臣氏之亂賊也。照公戮之亦不啻爲關東而爲大坂也。何哉。天下忠臣義士未嘗有相忌害者也。況於國危人疑之日乎。宜同心協力以謀國事。亦何暇至相忌害哉。蓋其相忌害者必也。一正一邪氣類殊異。勢不得不然矣。豐臣氏諸將如淺野幸長。加藤清正。忠誠固天下之所知也。令三成果忠。豐臣氏乎。則豈與此輩可爲忌害哉。然特相爲仇讎者。是其氣類殊異。而三成爲奸邪可知也。以奸邪之人而擁人孤寡。鳴罪募兵以爲似義之舉。此其所包藏亦可知也。昔者太閤挾三法師以討勝家。遂以得志天下。是三成所親視目擊。而心常存其故智。而獨憚照公英武。除照公則天下不足定也。於是挾豐豎子以鼓動天下。其陰險邪智豈非豐臣氏之亂賊哉。勝家死三法師不過爲一岐阜侯而耳。假令三成得志關東。則將以豎子處乎何地。其爲一大坂侯則幸矣。然則照公戮之爲大坂除亂賊也。何惟爲關東哉。夫勝家與太閤同織田氏臣。而勝家以死抗太閤者。憤奸雄智術挾公子以竊天下也。彼三成亦欲挾以竊天下。則二人之心事豈特天淵哉。嗚呼三成心事昭々如彼。而得欺後世竊忠義之名。此其陰險邪智抑非奸雄之尤者哉。

11 嫦娥奔月論

淮南子載羿得不死之藥於西王母。嫦娥竊之以奔月。遂託身於月。是爲蟾蜍。甚哉淮南子之

好恠也。夫月之在天。人之在地。大空茫茫。不知其幾萬里。非駕雲乘烟。則何以升之。人能駕雲乘烟邪。雲與烟山川地氣之所蒸。無體無形。凝以爲態。則不可駕乘焉。況乎月與人。其形質既異。月不可以通人人。不可以通月。假令有雲烟之可駕。乘人與月不相通也。雖然。月之與女。均大陰之精也。自其同氣觀之。月則在天。之女則在地。之月也。是故有月。則有女。有女。則亦有月。月與女。雖異天地。不同形質。而同氣之所相通。其理或然。然則嫦娥之奔月。謂之妖濫。恠豈可哉。嗚乎。此談其理已耳。抑於其實。何如邪。割一玉爲二玉。二玉之氣。可相通邪。分一水爲二水。二水之氣。可相通邪。玉與水。割之分之。則雖同氣同質。尙且不通也。況乎月與女。異天地。不同形質者邪。然則嫦娥之奔月。謂之妖濫。恠豈不可哉。且試使此事實邪。月則天地之理也。嫦娥則失節之婦也。以天地之理。與失節之婦。通此月。決非天地之理也。令月不天地之理也。何與失邪。運行或有時而差。然朔後生望後死。亘古今極天地。不易不差。則月固天地之理也。何與失節之婦。通。嗚乎。在彼而無此。實在此而亦無此。理則嫦娥之奔月。此妖妄之事也耳。夫以妖妄之事。爲實有之事。此淮南子之所以好恠。而後世詩人以之說月宮仙娥之妄。其好恠更甚乎。淮南子。

一一 貴穀賤貨策

今國家之患。莫甚於食貨之弊也。雖小猶足以害氣脈。而況其大弊乎。夫以有司朝夕所講求之政。日夜所撫循之民。勵精而施之。跂予而望其治。而食貨之大弊。爲之壅蔽。誠心不達。恩德不徧。水旱荒凶之害。至民不免饑亡。其弊不可得而言。而遂熟視而無如之何。此其故何也。食貨之弊。起于錢鈔。錢鈔之害。由于無實蓄。無實蓄。何以正之。正之抑亦有術矣。方今與昔日之勢。名實相反。孰有如錢鈔之甚者哉。昔日之鈔也。實蓄其半矣。今也。不及于十二三。而造數則三倍于昔日。嗚呼。此非今日之勢。所以金錢少而貴鈔夥。而賤百穀。由于斯致。賤且耗歟。故曰食貨之弊。起于錢鈔。錢鈔不正。其何以救之耶。然錢鈔之數。不下五十萬。此有司所以熟視而不得施術也。方今之一策。莫若廢三百五十鈔以下小者。廢之可以通三百四十九錢。通三百四十九錢。則錢之藏于下者。不得不出焉。此賴廢小鈔之勢。而可以正大鈔之弊。其如此。則錢不貴。鈔不賤。權在於商者。歸於官。穀價可以得平。穀價平而貯積不實者。未之有也。其於是誠心達恩德。徧水旱荒凶之害。民免饑亡。嗚呼。今之急者。其在于此乎。

(九一二橫井時靖藏寫本)

一二 讀諸葛武侯傳

司馬德操云。儒生俗士。何知時務。知時務在俊傑。此言可以戒天下之學者。蓋所貴乎學者。以

知見洞達明天人之理而適事變之宜行之正大光明如青天白日也。自孔孟而下苟躡道於其身者何嘗不如此。然而俗儒常泥章句訓詁之末而不知道之大本。所講脩身平天下之道。而其所以爲心者鮮不溺於人欲之私。論國之治亂則茫乎無知焉。是其不爲德操所斥者幾希。我輩日夜講習此學所以勉而脩勵者脩己治人之道。而責知識之不明鞭力行之不及必期賢人君子而止耳。夫道存於經求於此而足。雖然不求諸人則希賢之心其或不實也。是以求賢人君子之傳讀之。自三代而下莫諸葛武侯盛而德操之所謂俊傑者其人也。嗚乎三國之世是其何時也。舉天下爲功名奇貨之場。一智一能苟有寸長者紛然而起莫不銜於世者。然武侯抱膝朗吟如終身於耕耘者。一旦遭遇真主龍變鳳翥起漢室於既絕而明大義於萬世。心術事業正大光明真非百世之師者哉。則學者當希武侯爲人而躡其萬一斯可謂不背聖賢之道者矣。讀武侯傳書以質同學諸君子。

(小楠遺稿)

一四 讀漢紀

嘗怪西漢有天下二百餘年。德澤入人心者既深。而莽賊竊神器之日士大夫爭獻符瑞而能自潔者無幾人。甚矣名教之亡也。因而考其始末知所從來者蓋是文帝黜儒術而貴黃老之

大弊也。何則文帝苟安自守無有爲之志。舉天下以移其無爲之化。而士大夫以合時世爲通變。以得爵祿爲名譽。天地間又不知有綱常之大倫也。士風日弊。至元成以後天下義理之心斬伐銷鑠而無復存焉者。嗚呼是莽賊所以易竊神器而不憚何怪焉。及光武中興深知前代之弊。是以尊儒術而斥異端。抑奔競而重隱逸。汲々乎風勵天下士大夫之心。力矯西京委靡之陋。其所以激頑起懦者至。而風俗一變。士氣振興。其弊雖或有過激近名之憂。而比諸前代何翅霄壤而已哉。中世以後群奸並起。國家之危如絲髮。而不敢下手神器者何也。非諸君子名節守義以徇天下之力耶。抑余又有感焉。漢末大亂群雄並起。昭烈君臣不有尺土而起大義於天下。百敗不摧。遂正名號於一方。此已墜之三綱復明已亡之天下再興。而天下之忠臣義士有所憑藉焉。以慰其憤恨之氣。則光武崇尚風節之道於是可貴哉。夫名節之稱雖起於叔季。而扶持綱常者實賴乎此。則當衰世之時。謀國家者深鑒兩漢之得失。當以風勵其士氣。而培養國本。不然徒踏因循之徑。日墜於頽敗者。是繼西京之覆轍。不自知也。可勝嘆哉。

一五 讀島原志

天下太平之治將興。天且令不化之民聚以自殲。於是乎萬世悠久之業定矣。何以言之。昔武王崩成王幼。三監四國乘虛而扇亂。周公東征頑民無餘孽。周家八百年之天下至是而定矣。

嶋原之賊猶四國之叛。蓋坂城一炬火豐氏之族。豈噍類無遺哉。不過殲其魁而餘孽之存者不知幾萬人。誅之不可勝誅也。既不誅之。而子弟念其父兄之死。臣僕念其社稷之絕。憤恨入骨。一奸雄投其機而倡之。則焉得不脅其民而叛。嗚乎此勢之所必然。名雖曰賊實則豐氏之頑民也。夫癰疽之毒不發於背則發於腹。頑民之在天下猶疽毒之伏於身。不發於東則發於西。有此邪氣焉得不發。此亂發而平之。然後天下隱邪之毒除。清明澄淨之氣新。嗚乎嶋原之賊天將興太平之治。令之聚以自殲者歟。

(一四一—一五橫井時靖藏寫本)

一六 讀黃仲本朋友說

朱子跋黃仲本朋友說曰。人之大倫其別有五。自昔聖賢皆以爲天之所叙而非人之所能爲也。然以今考之。則惟父子兄弟爲天屬。而以人合者居其三焉。是則若有可疑者。然夫婦者天屬之所由以續者也。君臣者天屬之所賴以全者也。朋友者天屬之所賴以正者也。是則所以紀綱人道。建立人極。不可一日而偏廢。雖或以人而合。其實皆天理之自然。有不得不合者。此其所以爲天之所叙而非人之所能爲者也。然是三者之於人。或能具其形矣。而不能保其生。或能保其生矣。而不能存其理。必欲君臣父子兄弟夫婦之間。交盡其道而無悖焉。非有朋友

以責其善。輔其仁。其孰能使之然哉。故朋友之於人。倫其勢若輕。而所繫爲甚重。其分若疎。而所關爲至親。其名若小。而所職爲甚大。此古之聖人脩道立教。所以必重乎此。而不敢忽也。然自世教不明。君臣父子兄弟夫婦之間。既皆莫有盡其道者。而朋友之倫廢闕爲尤甚。世之君子雖或深病其然。未必深知其所以然也。予嘗思之。父子也。兄弟也。天屬之親也。非其乖離之極。固不能輕以相棄。而夫婦君臣之間。又有雜出于情物事勢。而不能自己者。以故雖或不盡其道。猶得以相牽聯比合。而不至於盡壞。至於朋友。則其親不足以相維。其情不足以相固。其勢不足以相攝。而爲之者。初未嘗知其理之所從。職之所任。其重有如此也。且其於君臣父子兄弟夫婦之間。猶或未嘗求盡其道。則固無所籍於責善輔仁之益。此其所以恩疎義薄。輕合而易離。亦無怪其相視漠然如行路之人也。夫人倫有五。而其理則一。朋友者又其所藉以維持是理。而不使至於悖焉者也。由夫四者之不求盡道。而朋友以無用廢。然朋友之道盡廢。而責善輔仁之職不舉。彼夫四者又安得獨力而久存哉。嗚呼。其亦可爲寒心也已。非夫彊學力行之君子。則孰能深察而亟反之哉。始予讀王深甫告友篇。感其言。若有補於世教者。徐而考之。則病其推之不及於天理之自然。顧以夫婦君臣一出於情勢之偶合。至於朋友則亦不求其端。直以爲聖人彊而附于四者之間也。誠如是也。則其殘壞廢絕。是乃理分之當然。無足深嘆。而其至是亦晚矣。近得黃君仲本朋友之說。讀之。其言天理人倫之意。乃有會於予心者。然

於朋友之道廢所以獨至於此則亦恐未究其所以然也。因書其後如此。庶乎其有發云。

(洪水文庫藏寫本所錄、題名編者所擬)

一七 讀鎖國論

鎖國論は享和年間の人志築和雄の譯したるエンケルト・ケンフル著鎖國論なるべし。此の論は完結に至らざれどもケンフルの鎖國論に共鳴して、小楠自ら盛に鎖國論を強調したる時代精神の一斑を窺ふに足るから載せることにした。

我邦孤峙東海中。得天地中物足人蕃。外焉有山海風濤之險。內焉有列國藩屏之固。雄視萬國二千年矣。昔日蒙古舉十萬軍來侵。一風濤淹滅之。爾後醜虜不敢萌覬覦之心者。抑天之于我邦。非有獨厚之者存焉哉。豐太閤以雄大之見。一切絕萬國之通。當今之制因之。獨許進港者清蘭二國。此二國我非修好結交。與書籍藥物有所需于彼。又非因其交通以窺察萬國之動靜。但二國之通久且謹。故許而不絕者。所以示我覆天之仁也。至近世和蘭學漸行有見。泰西諸州沿革之勢。遽愕其戰艦火器之大且巧。動以魯西細亞諸厄刺亞等吞并之事。虛喝我邦人。是其人眼無淵識。膽落虛聲。安知天下之勢。天下之勢。不唯我有眼者能知之。彼泰西人既已知之。乃如檢夫爾鎖國論。窺我山海之險。絕見我士氣之剛銳。知我土地所產之百物。自足而極服我鎖國卓越之見也。蓋泰西諸州大抵襟帶相接。猶我七道。不得不交互爲生。是

彼之與我。所以同球而殊地也。故在彼開通爲道。在我閉鎖爲道。各得其所宜。而後謂之順天。夫民所賴以爲生者天也。天之所賦。既殊地則治法亦不得不殊。是檢夫爾之所論。而各非所以安斯民之道哉。不唯檢夫爾泰西人所論。往往出于此。予聞志伊勃留杜言云。和蘭千七百年間。魯西細人奉其國王之命。輕軻廻旋東洋。窺測我海上之險易。海淺岸高。風濤暴起。稱嘆天險而去。志伊勃留杜在我邦者五年。悉我邦內外之情實。與舌官某書所見。特與檢夫爾合。則醜虜之絕志于我者。在彼既爲一定之見也。雖然吳子不云乎。在德而不在險。我賴其險而不脩德。則滔天之禍。覆地之變。何世之無。益脩其德。益固其鎖。不安醜虜既絕之念。而不賴天險之可賴。豈非天下所以保萬世之安之道哉。

方今五大州內列國分裂。強弱吞并爲帝爲王。朝治夕亂。無定。猶我永祿。天正際。而我邦獨願泰平之治。日益 (以下未完ノマ、ニテ缺文)

(横井時靖藏寫本)

一八 恭題 泰勝公和歌卷後

右和歌一首并序是 (細川氏初代藤孝) 泰勝公之所詠。而儆戒人臣者至矣。巨横井時存謹題卷後曰。凡我一藩人士。口有食。身有衣。病也有醫藥。死也有葬祭。有以成其生也。不唯有成其生。我父以是而

生我祖以是而生。推而及高祖太宗之先莫不以是而有成其生也。嗚呼是誰之賜哉。每一念思之敬懼之心悚然而起。粉身碎骨不足以報國家也。則希望寵榮僥倖非分。凡以營其私者何暇發於心哉。且夫君臣猶父子也。本乎天性而成乎自然。則愛君憂國出於不忍之誠。假令取疑於其君。以陷不實之罪。而一念不怨君者。是忠臣之心然也。恭惟秦勝公之於室町氏。流離顛沛之間。死生從之。既復其宗社。又諫其啓釁於強藩。忠言不用。身被擯斥。而社稷因以亡者。抑亦天也。於是脫然勇退。無復意於人世。獨屢訪故主於流竄之地。未嘗有一日忘室町氏也。嗚呼室町氏季世是何時也。舉天下亂臣賊子。而公獨以大義特立。此際終始不失臣節。則此卷所以道其心。而人臣之道蓋不外於此也。夫人臣之道。無古今無治亂。無賢愚無彼我。無或有變者。由是而行爲忠臣爲義士。推而及之父則孝。及兄則悌。爲夫婦之禮爲朋友之信。彝倫綱常之道盡此卷矣。則我一藩人士服膺公之言儀刑公之行。篤信而不疑。日夜砥礪。求所以爲臣之道。則私心日除。而道義日集。雖未必及古人正大之行。而亦可以報國家無窮之恩也。雖然學之不講。道之不明。安能信此卷。不信此卷。則問之天然不雜之心。其豈得不油然而發乎哉。

一九 題見聞私記後

見聞私記者長門崇文公之言行錄也。先是長門有黨民之亂。公時爲世子深憂至懼。至廢寢食。乃與書老臣解喻一藩人民。亂以是已。予始知長門有賢世子也。後有傳述齋林公之言者。曰公接人多矣。而未嘗見如長門世子者。溫良恭儉。蓋大賢之資也。予乃知世子天資之美也。既而聞公卒。竊謂此君不世而出而忽喪之。天未與其國乎。及其藩人來問之。則曰先君不唯天質之美也。好學親賢至誠愛民。年二十有二而承封。越月乃卒。卒之日一藩哭泣如喪父母也。予於是知公有學問之好。而仁愛入人心之深也。今茲仲春友人获收遊長門。得此冊子。歸反覆敬讀。乃嘆曰。公蓋以大賢之資。篤信聖人之道。治民必本乎脩身。脩身必自閨門始焉。欲法關雎麟趾之德。而行周官之法度。其立志之大。識見之明。直期三代。而自秦漢以下所不屑焉。嗟乎。令公永世。則其民觀感懣悌之德。興起禮讓之道。而忠厚雍化之風化。可以行者何疑焉。是豈唯一藩人民之不幸而已哉。抑又天下萬姓之不幸。非可慨嘆者歟。方今天下盛運列藩振興。其間非無一二名公也。然皆任私智。或以氣節爲志。或以功名爲心。鼓動振作其民人。雖有一時赫著之勢。而是蹈秦漢以下之邪徑者。何足貴焉。孔子曰。道之以德。齊之以禮。夫德禮所以爲治之本。而德又禮之本也。不本於此而治民。雖或爲速効。而害必到。顧弗察而已矣。抑秦平三百年星霜不爲不久也。天下三百藩侯伯不爲不多也。而信聖人之道。本於躬行之德。以治其民人者。唯有米澤鷹山公而已。蓋鷹山公之爲治也。自身而家。自家而國。造端乎夫

婦而德禮行於一藩。雖公已沒世而盛德事業深染民心。愈久而不能忘也。嗚呼聖道之治其効如此。而世方以功利權變治民。益治而益弊。不啻少悔悟者。其又何心也。論付於此。以告讀此卷者。天保癸卯冬十一月。

(一八一—一九小楠遺稿)

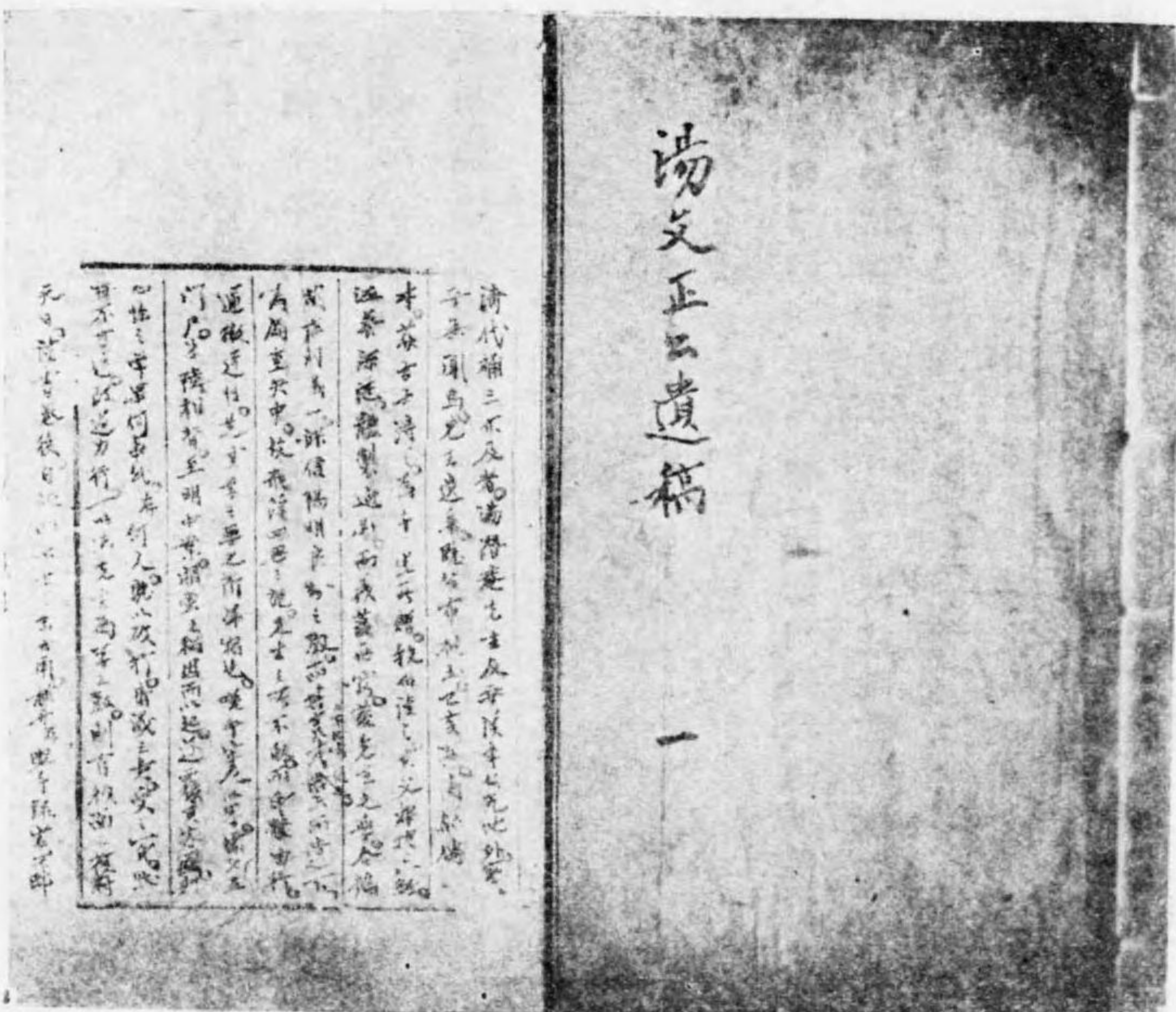
二〇 題犬追物圖後

友人某持犬追物圖來。命余書其後。披之人馬服色宛然如真。往日余把弓矢馳馬。此圖中。距今十餘年。每思之未嘗不慨然。丙申之春。吾到其場。舊情汪然。復試藝。則臂屈而不可滿。弓力疲而不可制。轡驅馳十回。以不墜為幸。既卒。藝悵然久之。夫吾壯年血氣尚盛。廢之十餘年。髀肉既生。無復往日之態。則知夫講武壯歲而廢其業者。令之復試。猶吾今日之拙。豈獨犬追物已哉。書實還之。

(橫井時靖藏寫本)

二一 湯文正公遺稿跋

清代稱三不及者。湯潛菴先生及安溪李公光地外。寥寥乎無聞焉。先生遺集既公布。彼士已



湯文正公遺稿の紙表と最終頁の小楠自筆跋文
(德富蘇峰藏)

亥夏商舶傳此本。荻吉士得之。為千里所贈。披而讀之。其文根據六經。涵養深湛。體製迫別。而義蘊無窮。蓋先生之學。合鵝湖鹿洞為一。深信陽明良知之教。而其言不必盡信之。或語上而遺下。為偏重失中。故龍溪四無之說。先生之所不取。身體力行。通微達性。是其學之要。之所歸宿也。嗟乎。宋元以來。儒者立門戶。朱陸相背。至明中葉。朋黨之禍。因而以起。遂覆其家國。則心性之學。果何事哉。存何人。既以破行清議之責。受之一身。然悔不可追。改過力行。一以法先生為學。

之教。則有顏面之復對天日。謹書卷後。自託門下士之末云爾。橫井存盟手錄。岩山下邸。

(徳富蘇峰藏)

二二 會澤正志書幅書後

此一幅。是水府藩士相澤翁^(德力)常藏之所書也。翁以黨禁囚於幕府。苦楚萬狀。天下所共知。義名高于星斗。辛亥之夏。余遊大坂。訪大久保要。二夕快談。臨別贈以此書。要土浦侯之臣也。侯爲大坂所司代。從任在坂者二年。於茲。要少壯遊學水府。從翁而學。與藤田虎之介輩交。談及水府之事。慷慨悲憤。顯於顏面。亦天下之義士也。書以傳於子孫者如此。嘉永五年正月二日

小楠堂主時存

(小川泰雄藏)

右會澤の書は

鸞駕播遷時岌岌。勤王並起。羽書急。孤軍據險。金湯堅。逆豎頓。兵蟻蛾集。大義興。人亂賊懼。精忠貫日。鬼神泣。誰言身死。偉功空。天柱地維爲樹立。

の詠史の作である。此の軸の箱の蓋裏には秋月胤永が左の如く記してゐる。

此幅熊本小川爲言君所藏。元係小楠横井翁所有。君曾爲横井家有所謀。遂謝以之云。余距今五十年。弘化甲辰訪會澤先生於水戸。爾後再三面之。純然篤行君子。可以爲一世師表者。後文久辛酉訪横井翁於幕府總裁松平春嶽公邸。乃與翁相謀。有所告岳公。翁以卓識偉斷助公。始知其有爲人蓋

天下之奇才也。今爲言君以二先生爲尙友。則其所得豈淺々乎哉。

明治二十七年十一月

秋月胤永錄時年七十有一

二三 五樂園詩鈔題言

『五樂園詩鈔』は元田東野の詩集。

嚴滄浪云。作詩有別才。不關學問。此言一出。令浮薄才子藉口。華麗風流。纖工雅淡。大旨以爲詩本色。譬如無源之水。無根之花。不翅不關係世道。大妨風教。夫學益深。則志益厚。志益厚。則天地之理。通徹于一心。可憂可喜之情。不能自己。而爲文爲詩。以發明正大光明之道。則其關係世道風教。可勝道乎。今試令此篇覽滄浪。其將下何評語。嗚乎。詩豈在于別才也哉。

横井平拜評

(五樂園詩鈔)

二四 甲斐宗運傳

甲斐宗運。世爲阿蘇氏老臣。父親直。天文中御船行房叛。阿蘇氏命親直討之。宗運時年十二。進而謂曰。兒生髮既燥。請命兒。可一戰而擒。親直奇其言。請阿蘇氏許之。宗運乃乘風雨襲御

横井小楠遺稿

六九九

船城斬行房阿蘇氏賞以御船之地親直歿宗運代爲大老先是菊池氏衰大友氏獨制九國阿蘇氏傾心屬之當宗運時嶋津氏起于薩龍造寺氏起于肥前大友氏威令不行九國將士多叛應二氏二氏併吞數國勢日强大而不敢窺肥後者憚宗運之材武也永祿七年熊庄城主木山惟久叛與宇土本鄉應嶋津氏阿蘇氏令宗運及甲佐早川兵攻之城固不拔宇土本鄉援兵襲早川軍城中應之出擊宗運聞之上馬而馳銳兵二百大呼擣宇土軍塵戰走之城兵膽落城遂陷岩尾城主黑仁田某納款于日向伊東氏宗運謂知之詒而召焉舍從士于外館擇健兵數百伴之令曰吹螺一聲齊殲之宗運手刃黑仁田而螺鳴伴兵起塵從士天正三年河尻鹿子木隈部宇土高橋諸將謀將攻御船宗運聞之逆擊託摩原隈部鹿子木高橋三年將隔白河陣宇土川尻兩將伏兵梶原擊其後宗運提兵僅三百直薄丹花灘敵亂流而進我兵迎半渡擊之敵殊死鬪我兵却磨而進又却宗運斬却者數人身先將士揮刀戰敵兵識宗運鑽矛而刺躍馬斬三人岸上軍氣奮磨而奔我兵乘勢奮擊斬獲無算宇土川尻不戰而敗四月相良義陽應嶋津氏舉大兵入益城分兵攻堅志田赤蜂尾兩城宗運聞諜令其子宗立率民兵躋飯彫山爲逃避之狀親提孤軍從間道伏旗鼓而馳至響原義陽方會將士宴我兵鼓譟斫營而入敵擾亂不知所爲進入幕中斬義陽玖摩軍大潰追擊得甲首四百餘級此役也以二百人破一萬餘敵宗運用奇往々類之嶋津氏將略肥肥之將士納款者皆爲宗運所

殺以爲不誘宗運則肥不可圖也乃遣使諭宗運宗運詰而得叛者七十名急令健士誅之于其家薩使咋舌而去宗運浴木崎溫泉暴疾而卒或云所毒殺年七十五實天正十一年也及疾革流涕曰勿令吾屍瘞路傍不及三年薩兵以弓末指之曰是故甲斐宗運墓也豈非大恥邪言終而死子四人長宗立宗立不類乃父宗運死薩軍果入于肥不及戰而降初嶋津氏城益城備候斥終宗運世通問不絕宗運死宗立襲殺其戍兵嶋津氏入于肥阿蘇氏因以亡外史氏曰我肥邦內往々多城墟蓋菊池氏衰諸將士矛楯據其邑而爭者百餘年天文弘治間一國有四十餘城云余嘗考之國誌如隈部赤星城小代諸族僅可以見其履歷而其餘則無傳焉者也及阿蘇氏起甲斐氏獨顯至今傳其事功歷々不晦滅者豈非由其忠勇謀畧服人心而然歟宗運嘗嘆曰吾得鳥雲陣于菊池氏吾死此法亦亡矣嗟乎使宗運生于關東用武之地焉知與謙信信玄並驅而不下此法亦傳後世不與二氏同稱邪如宗運者可謂一世豪傑矣余恐後人以宗運與隈部赤星輩同年而語也作宗運傳

二五 藤崎八幡社經堂記

八幡社之在天下無州不在焉而我州藤崎八幡社建於天慶中將門誅戮之時爾後九百餘年嚴然爲一州之崇神社右有一切經堂相傳唐僧某携來藏于此吾觀所藏之經刻本而非

寫本。蓋刻本始於五代之際。唐以前皆以傳寫行。則此經之非唐本可知也。夫今之經非古之經。然古嘗無此經。則今又何有此經。此經之藏此社本。雖異而經則同也。然則謂之某之經。豈不可哉。嗚乎。此社之悠久如彼。而此經之不朽如此。彼與此其將非偶然焉者也歟。

二六 友岡氏家祖祠堂記

天保某歲。遭友岡君某死。事之二百五十年。忌其裔孫子善建祠於堂之西北。祀之。子善與族人謀曰。維茲祠堂。無辭以刻。非所以妥先靈而示後昆也。以存外戚之姻。命爲之文。存於友岡氏。既有外戚之姻。又少嘗從子善遊。則此文不肯禮辭。案家譜及國史記。君之死。事也詳。加々井城之役。（細川氏二代出陣）松向公先登。敵將某（詳）追公。君進而擊某。被瘡而死。時年十七。實天正十一年某月日也。嗚呼。士生戰國。或以一鎗起身。或以一鎗捨生。捨生不必武之短。起身不必武之長。幸而生不幸而死。要之命也。命也者在天。不可奈之何。故炮烟掩天。戈戟奪日。前者斃後者顛。而有進有退。是我邦士氣之勇銳。而孰肯求生於其間哉。然而幸而生者有爵祿之榮。不幸而死者有暴死之名。二者相去不翅天壤。則命之於人。何其不齊之甚也。雖然。爵祿之榮者止於一世。而無餘。暴死之名者窮於百世。而不盡。是以語忠臣節士。伏仁死義之人。則百世下凜々生色。如夫爵祿功名顯於世者。抑亦何感人心之有。然則命之於人。未必無齊。而生之與死。亦

未必幸與不幸也。我藩士之祖先。或以一鎗起身。顯於世者不少。而以一鎗捨生。如友岡君。非留百世之名者邪。君之祀日。族人盡集。子善清酌。羞奠語座人曰。祖先之死。氣息尙存。松向公親藥呼名。撫背勞之者。甚至矣。祖先瞠目合掌而絕。言未畢。一座爲之淚下。存曰。昔者佐藤嗣信之死。源廷尉勞之者至矣。其言淒惋動人。蓋有嗣信之死。而廷尉得以免危。有廷尉之勞。而嗣信可以瞑目。然而忠臣節士。致命其主者不少。而其主之所以勞之。未嘗有如廷尉之厚。且至者也。今君之死。庶幾嗣信。而松向公之勞之。有似於廷尉。則君之爲榮。比之夫爵祿功名顯於世者。抑亦何如哉。嗚乎。人誰無死。死如君。豈非士夫之所願乎。君姓藤原。失名。世仕室町氏。所謂西岡三十六騎之一也。室町氏亡。仕我泰勝公。松向公。君沒無子。弟某繼家。至子善。凡九世。謂之勝龍寺家。勝龍寺者。泰勝公興業之地。而我藩士之仕。此時者名爲開國舊臣。今存者蓋不過十餘家云。

二七 墨湧石記

久我夫人遊于桂川。得奇石。質堅而色黝。磨之湧然生墨。因名曰墨湧石。夫人珍愛玩好之。餘躬揮彤管。書所以得之之由。且命侍臣寫江若水詩。併賜之竹原尼。尼感荷渥恩。欲有所奉謝焉。乃請國子先生及館中諸生。徵其文詩。存也。辱列菁莪之員。不可得而辭。思所以記之。按

山城府志及京師諸雜誌鴨水出硯石自昔而然。至桂川墨石則無見焉。其他國史所載珍異奇瑞之獻。及諸州風土記等之書舉土產彙品者多。而墨石之事未嘗有見也。且在彼漢土亦所甚希。唯曹公遺藏三臺墨石。及五龍山下所產烏石而已。夫墨石其希如此。而我桂川出焉。然而數千載間僅有徵一隱士之賦詠也耳。乃今於夫人顯焉者何也。蓋珍奇異靈之祥必出於至誠之所感而顯於歌詠之所動。大焉麟鳳龜龍小焉芝艸珠玉皆應德而感時者。世所甚希有必待其人而然也。恭惟夫人溫恭貞靜之德以和其內。婉婉愉悅之氣以達其外。其情性時發爲國什可以感鬼。可以和暴。則墨石之珍異感而出者無足怪矣。然則自今以往珍異百物感應呈祥。而歌詠之頌揚之者豈止於一墨石哉。自貝筆玉硯之奇以及雲箋冰絹龍琴鳳瑟之珍。將粲然集於蘭室瑤房之間。其如此則不啻存等記之天下將踴躍而記之。

(二四—二七橫井時靖藏寫本)

二八 九十歲硯記

硯以九十名者何。以九十翁之所相授受也。九十翁爲誰。西依赤松二先生是也。二先生磨之得壽各九十。則此硯壽祥之物。而名以九十有故也。夫壽得九十。是百千人中之一。而亦長生也哉。古今求長生莫秦皇漢武若也。令二君得此硯而磨之。則何以得壽矣。時無此硯妄信方

士之言。名山大川蒼海瀛洲窮天下之力。盡兆人之智。而求長生。不唯不得其壽。且以招致天下之禍亂。抑非至愚之甚邪。假令此硯在二君之時。磨之不以其道。尋常瓦石何壽祥之有。磨之以其道。神靈奇瑞必以得無量之壽。今夫令二君以治兆人之心。磨之。左右圖書闡禮樂。以求長生之心。而求天下之治安。以待方士之禮。而待天下之賢士。則仁被萬姓。而天下太平。何翅其壽九十而已哉。古之人嘗以之治天下。堯舜及禹。皆年百歲。此時天子萬福百姓亦安樂壽考。語云。仁者壽。豈非仁者而後壽者哉。夫知仁者而後壽。則此硯唯一頑石而已。雖然仁其不磨何以得之。故磨其仁者。磨之圖書磨之文章。磨之賢人君子之言行。磨之古今治亂之常變。或磨之他山之石。而此數者不磨之于硯。則何以記其要。不記其要。仁其何以磨乎。然則硯者君子所以磨仁之器。而一日不可以廢也。西依赤松二先生。以一世之碩學宿儒。既磨其仁。亦得其壽考。蓋因日磨此硯而然也。嗚乎。令二先生。生秦皇漢武之時。以其所得之道。進二君輔以治萬姓。則天下太平。壽考無量。何翅一硯石之可以爲壽祥之物而已哉。硯傳至吾師米元先生。(劍術之師。米田元太郎)先生篤信二先生之教。晨夕磨之。令德日尊。今年齡七十有八。步履輕翔神完而氣固。所謂仁者而後壽者。果而可信也哉。先生命記此硯。存辱列門下之士。安以不文辭焉。乃推其所以然之故。謹作九十歲硯記。并以祝先生之壽考無量云爾。

(弓削和三藏)

二九 白雪樓記

成瀨徑翁既老之年退隱玉名縣晒口。作一樓於居室之南。題之曰白雪之樓。後三年余北遊鹿門。沿水下晒口訪白雪樓。則翁喜而迎延而登樓。滿引巨觥。壯談其少壯時事。翁武人善鎗。試敲之則曰。蚤歲入齋高壽先生之門。與其徒傑豪交。血氣自負好使酒。每醉怒睨眈々逼人。人目以暴虎。一日先生講蒙求。至周孝侯折節讀書事。顧謂予曰。士之所以爲士。如周孝侯。真可謂大丈夫矣。子慚愧入骨不覺而俯。退而思之。彼孝侯懷絕人之才。是以一旦悛行。足以爲名士矣。予無其才。讀書何足立身。不如學武繼我家素之業也。於是折節學鎗。日夜攻其術者三十餘年。謂國家一旦有事。馳驅千乘萬騎中。一死可以報國也。言畢而起。操牀上鎗向空而揮。則風颯颯生樓中。既而拋鎗。慨然嘆曰。予齡今年七十又八。手能揮鎗。而足不能上馬。已哉。老驥徒懷千里之志耳。余既壯其矍鑠。又偉其氣節。乃浮太白祝之曰。齋子之門人傑輩出。各用於世。耀盛名于一時者如彼。而今安在哉。翁獨寓志於一鎗。恬然自樂。老而益壯。則其稟福之厚薄。抑亦何如哉。翁莞爾笑曰。有是哉。遂相共醉臥一樓中。夜間忽聞折竹聲如裂帛。虛響動樓。天明而起。則大雪滿山野。混茫一白。不見天地。是樓之名非獨爲予。今日道邪。不待其請而作之記云。

三〇 一日亭記

府城之南外郭之隅有亭。翼然臨乎絕壁。可以恣東南山海之觀者。爲一日之亭。(八代攝代松井氏)政暇游息之所也。在昔移封之初。先君(細川氏三代忠利)妙解公。大乎大夫之祖。佐渡守君之功。加賜邑地。班列世卿第一。後又賜第宅。此地以優賞其勞也。佐渡守君既老。營亭于斯。優游吟哦以自樂。公又時臨于此。顧園中之叢竹。命天嚴禪師大書一日之二字。賜以寵異之。然後一日亭爲都下名園之冠云。古大臣勳業顯赫。君臣無一芥之嫌。兼有清閑之福者亦難矣。況於澤及子孫。儼然爲一國元老與國同休戚者乎。竊惟佐渡守君忠誠一德。孚于上下。既以成創業之難。又以致守成之績。國家今日之盛隆。抑君與有力焉。則宜其享非常之寵。以致累世顯貴之榮也。嗚呼。松江氏之於藩。儼然爲大老。而世世忠誠報國。決大計。定群議。以爲宗社萬民之社者。不唯佐渡守君而已也。至今大夫弼諧盛際。嘉謨忠贊。以報上文武儉節。以導下勳精恪。勤終始如一日矣。方今藩內富厚。百事就緒。士馬之銳。文物之盛。致列藩絕無之盛者。抑非大夫忠誠爲之輔佐。而然邪。宜乎藩內顒顒然仰以爲名賢大夫也。而於大夫自視漠然。時或遊後園。寄情於山林曠野。托風月寓聲歌。未始知與望之叢於其身。是其懷襟之洒落。可以想像。則非與夫佐渡守君曠世而同契者乎哉。抑夫園之勝狀不少。而獨取名于竹者何耶。布清蔭於朱

夏挺勁節于玄冬。蒼蒼貫四時之運。稷餗飽風雨之變。真心不改。卓立千古者。唯竹爲然。嗚呼。先公之取以名亭者。豈非期松江氏世世忠誠報國如此竹哉。然則凡大夫之子若孫。宜忠誠自勵以報國家。若佐渡守君及今大夫。而後爲不背此亭之名矣。若夫不然。晏然安累世之顯貴。懵然忘一日之寓意。忠誠之心。有或不勝逸樂之欲。則先公命名之意廢矣。存也野質不文。辱記此亭。顧無可言者。敢竊言君家世世忠誠功勳。而推先公命名之意。謹爲之記。

(二九一三〇小楠遺稿)

三一 吐月軒記

余未窺吐月軒。嘗聞其名之與諸名莊藉藉乎文詩之間。今茲乙未初夏始得遊于此。至則蕭然一小軒。扁曰枕流。無泉石之致。無花木之美。唯東嶽當闌干。白水流軒下而已耳。其以之名之者何也。抑非以水月之大觀邪。夫東嶽之嶽。舉目而望。則烟雲之所凝變爲紅彩。光芒粲粲爲珠璣。爲玻璃。既而大月出。山金線射。波流錦漾。玉月之明與水之清。相蕩漾相混同。不知月之爲水。水之爲月也。然在天之月未嘗降而爲水。在地之水未嘗升而爲月。月自月。水自水。高低懸隔。不知其幾萬里也。今坐此軒起而觀明月之所升。如山吐月。臥而聽波瀾之韻。如枕清流。當其蕩漾混同也。起而觀者如在地。臥而聽者如在天。此豈非水月之大觀邪。余於是乎

知此軒之與諸名莊其名同藉藉乎文詩之間者。果不虛也。不唯同其名。抑亦有超然于此者。夫西溪龜泉諸莊。有月則無水。有水則無月。能有一而不能併有其二。月無以助其明。水無以益其清。然則有月謂之無月。有水謂之無水。豈不可邪。然則西溪龜泉諸莊與此軒不能爭其勝也必矣。於是呼童命酒。揮筆以記其文。明月在杯水。氣透骨。陶然一醉。憑欄而睡。不知余亦混水月爲廣寒之遊者也。

(橫井時靖藏寫本)

三二 雖無小室記

余向爲一室名之曰庸室。或曰庸有二。子思作書名之曰中庸。謂人有其常而不易也。後漢之人稱胡廣曰中庸。謂其無不可與。世能上下也。子思之中庸。至極之名也。胡廣之中庸。巧言之稱也。子將安處焉。曰吾所謂庸者。非子思之庸。亦非胡廣之庸。芒乎。慣乎。無知無聞。如嬰兒如昏愚。入則家人笑庸。出則友朋詆庸。此非一鄉一國之庸。天下古今之大庸也。吾之爲庸也。多矣。以是乎名室。豈又二子之庸哉。嗚呼。吾知吾庸之爲大庸。大庸者。其亦可以變歟。人之自處也不憤。則不啓。豪傑也庸劣也。憤與不憤。可以變其質之上下也。乃自奮曰。玉之蘊於石。頑然石也。輝光明耀。有時乎生。性之拘於質。昏然愚也。本然天理。有時乎發。其可敢自棄哉。於是

乎改庸曰雖無乃復自嘲曰此古之豪傑不待文王而興者以余之大庸不既甚邪復自解曰天下之庸人以庸自處是以其庸益庸劣而如胡廣之庸亦難矣余之大庸以豪傑自處其可以爲衆人之庸爲衆人之庸又可以爲豪傑之士既以爲豪傑之士則聖賢中庸之地於是乎可至矣此余之所以取名雖無而其豈夸然自矜哉亦平庸也耳雖然吾恐吾志之與此名相背將大庸而朽作雖無小室記。

三三 自拔石山至浣布溪記

金峯之脈逶迤而盡盡而聳東西者爲拔石山山形削成屹立徑急甚可僂僂而上至七八仞層石嶄嶄成丘逾石丘而得石洞乃拔石之處也洞中石理龜折工人斧其拆拆穿而石拔則轉於徑徑無曲折一轉至山下試轉一石千仞瞬息聲如雷霆余悚然立若身與石俱轉既而下逕急甚步以尻如跛者乞市狀可笑至半腹徑稍緩足始能步山下樹竹蒼鬱小徑曲折若窮而忽又廓然乃浣布溪也溪水清冽穿石嚙畦觸激之音鏘然如鳴玉溪之兩岸多士人別墅引泉移石窮山水之巧致惟予飽真山水意不欲觀是何足遊不觀而還嘻予學文者也以文論山水無直叙故雋無複叙故清不爲工故險而適不拘律故奇而新天機之所觸靈氣之所發成此山成此水問之天天不知也問之山水山水亦不知也不知其然而然者是非天

地之至文邪恍然有悟記以問世之學文者

三四 記南湖夜泛

歲戊戌之夏余自鬢歸住家園之東齋齋狹小暑甚不可居焉六月望一夕遊南洲洲在府城一里外其源出公之別園水勢稍壯到沙鳥橋爲浩流遂入溪毛澤則汪然大湖也日已沒飯顆諸峰空翠如滴既而月上東山最高峯長烟一空清光射波水涵天低萬象澈澈余輿情躍然呼小艇順流而下過畫圖橋泛大湖之中央遙望西南水烟中見長岸縈迴窮湖而不盡者此淨池公之所築設也在昔湖水泛濫居人蒙害公察利害築長岸而防之民始得安生嗟乎制法以便民者奚翅公而已哉而身死世變則并其姓名失之矣獨公之遺績歷二百餘年之久民思其德不能忘者豈非至誠愛民之所致哉抑余亦有所感者湖光月影今猶古公愛民治國之暇焉知泛此水賞此月迴迴游詠如今夕之興情也哉慨焉者久之還至畫圖橋則天將曉明月傾山東方已白同遊者鳳陽山人樞伯立榮城田千二子名某某

三五 送澤子寬重遊學江戶序

異常卓偉之士恃其所抱持動輒爲放蕩不羈之行此固常情之所不容物論沸騰并其所長

之才棄之。終身沈淪吞恨而死。衰世鬱抑士氣之風如此。豈非慨嘆之甚邪。唯其明君賢輔相之在上也。百政之急在於育才。毛髮絲粟莫不收焉。而況卓然于衆者乎哉。若夫行或失者則必令之矯正脩爲以成其所長之才。夫是以能鼓舞變化一世之人材。而偉能奇俊有爲之士奮然而起以自思見於世。庸常無能之徒亦自知其分而不敢抱僥倖之思。作新淬礪之政將於觀也。吾友澤子寬才與學兩富氣豪使酒壯年入翼以肆行見斥。後復命遊學江都行益不悛與俠豪之徒交。隨意放縱任氣視人。至人目以暴虎不敢指名。辛卯之冬歸省家庭。則物論沸騰爲士林所棄斥。而子寬不以爲意也。日釣南湖脫然塵世之外。欸乃漁歌以樂其心志。蓋子寬之心知矯脩之無益于身。而所長之才不復見于世也。茲歲三月命再遊學江戶。舉藩皆愕。余獨曰此舉固當然。非然不足以爲國家育才之道。夫高節篤行才大智深守常理而達機變者上材也。才秀識高英邁俊豪不拘檢束持重者中材也。諄諄守庸行謹謹拘格例而智力不能以應變者下材也。下材固不足用。而上材者百世一人以爲難得焉。則必擇中材之士可用其所長之才也。昔者感公中興之盛舉用必中材異能之士。而苟有所長之才不問其行何如。而顯擢於格例之外。故士之有一材一藝不脩小諒邊幅之行。思所以奮起樹立以自見於世。是以朝野之間俊傑之士往往輩出。得以爲赫赫作新之治矣。降至近世淬礪之政漸衰。取士不得不拘常格甄別進退激揚風勵之道失。而有識之士沉淪吞氣抱無涯之恨。

是所以子寬之不自愛而輕棄其身也。今夫超然于衆論之外起子寬於既廢之餘。令之洗濯舊污以自新刷。則知士氣之鬱抑沉淪于下者揚然而伸奮然而起。一材一藝異能奇俊之士。思所以自見於世。而闕冗無能之徒沉淪潛伏不敢抱分外之思也。夫如是寶曆赫赫之治將重於今日觀之。是余之所以感起踴躍而自奮於庸劣也。豈翅區區爲子寬賀之也哉。抑在子寬享無涯之大恩如此。則其所以報之者將何以爲焉。余且拭目俟之。

三六 送某公巡檢鎮西序

方今天下封建。三百列侯各有其地。各治其民。慎戒嚴密。承命大府。大府設諸道巡檢使。觀民之好惡。察政之得失。所以布王政而飭治功。其事亦大矣。夫觀察布政之在古也。王者之巡狩四方。所以觀風土人物。正禮樂制度。而天下之諸侯警戒奔走莫不畏且肅也。今之列侯猶古之諸侯。今之巡檢亦猶古之巡狩。代大府而行觀察布政之事。則任此職者其亦重且難哉。某公自某官擢巡檢鎮西。公之清節素著。信義之有根而德之有源。鎮西之民感戴信仰。歡然欣然以頌公德已耳。然則吾唯祝公之榮。無一言告公而可邪。韓子曰。知之而不以告人者不仁也。吾鎮西人其以山川雲物之態告公邪。公之臨我土。非徜徉遊觀焉。則山水烟霞之勝。所其聽而不悅。可以無告也。然則公之所聽而悅者。吾將何以告之。吾觀鎮西之地。廣莫拓土。列侯

封疆相接。公之此行。觀政于一方。接列侯之得道。觀風布政之得宜。公將何以處之。嗚呼。是公之所以寢而不安。食而不甘。吾知其不以自榮。而有所大難矣。苟知其難。則有一言以告公者。今夫巡檢之行。天下名雖觀風布政。而實則因之爲奸。是以朝出都門。情態卽變。暮到州縣。威福便行。馳迫郵驛。拆辱侯伯。賄賂公行。民不聊生。猶大軍之暴掠。人民屏息。及其去。初知生。嗚呼。巡檢之行。天下其亦大害哉。今公之擢任此職。吾知巡檢之害。聞大府。大府將矯其大弊。觀風布政。播德教於天下也。則公之此行。滌蕩舊弊。布新政。當先接列侯。以道禁賄賂。正屬吏之奸。夫如是。則怨者變。恩憂者變。喜鬱者伸。悲者歌。沾濡一方。施而及天下之民者。不難也。存也。化行之日。竊觀而側聽之。將欣躍歡舞。重頌其盛事。

三七 送長野立大序

鹿門長野立大久遊。府城與吾黨人士交。講古人爲己之學。實信而篤志。絕聲利而安。現在將歸而教其鄉人子弟。請言於予。予曰。方今學之弊也久矣。師之所以教。弟子之所以學。無非記誦文詞之事。忘本追末。懷利去義。至於所謂爲己之學。則蓋未有聞也。且夫鹿門四達之地。行旅商賈之所湊會。貨利淫蕩之習。舊而風俗之陋極矣。而今欲與之講學論道。多見其不知量也。雖然。均是人也。秉彝之心。不可磨滅。父子君臣之倫。無以風俗而廢。上下尊卑之分。不以古

今而改。天理不亡乎人心。而民彝行乎日用。猶四時之運。其間雖有風雨寒暑之乖戾。而春夏秋冬之序。未嘗有變者也。嗚呼。是道之命脈也。教之根本也。開而導之。豈有能不化而入道哉。故教之爲道。本諸固有之性。施諸日用之實。如木之有芽。因其善端擴之。如糸之有緒。就其知識。釋之不切。切然責其私心。欲自察而克焉。不規規然督其污行。欲自耻而改焉。無作爲以害其本。無預期以求其効。循循而導。漸而化。而其要則在自修而已。蓋非觀感則無起信者。非起信則無所施教。是以德厚則及人之効深。德薄則及人之効淺。如幹之有枝。如形之有影。蓋亦不能出其實得之外也。故有聖人之德。然後有聖人之効用矣。有賢人之德。然後有賢人之効用矣。有君子之德。然後有君子之効用矣。未有君子而有賢人之効用者。也。未有賢人而有聖人之効用者。也。是豈唯教之道然而已哉。治國平天下。皆莫非此理。此謂之本末也。自學術不明。士不知道。不務其本。而追其末。亡諸己。而求諸人。是其心不過取名釣利之計。則宜矣。道益不明。其可嘆已。立大與余講學者五年於茲矣。其於古之大學所以脩己治人之道。則莫不考究焉。與世之讀書者異。今以其得己者。欲施諸人。余知其必所爲也。立大勉旃。自今而後。聞鹿門之士。觀感而起。重禮義。貴廉耻。有孝悌忠信之風。霽然而行。是則立大之德之脩之驗也夫。弘化四年三月四日序

三八 擬朝鮮國王書

日本大將軍源某奉書朝鮮王。先者關白怒王不恭。銳兵百萬蹂躪王邦。王之赤子肝膽塗地。王雖還舊物。實同新造。關白歿。吾代執天下兵馬之權。猛將如林。虎賁如雲。神威之所鎮。四海載清。吾惟兵用於不得已。不殺乃天之心。斯大敷文教。用以安乂天下之民。吾雖不及古之先哲。俾萬方懷德。而不可不使四海知吾代豐氏定天下之意。故特遣使持書布告腹心。自今以往。通問修好。以相親睦。況王邦境壤相接。情如一家。隣好不修。至重用兵。夫孰所好。王請圖之。

三九 擬上某相公書

月日布衣某再拜上書某相公閣下。嘗讀唐韓愈上宰相書。竊謂舉用薦進。責在于宰相。我唯修吾之可爲之道而已。然愈敢進求於宰相者。不在中心憤懣。自抑不止而發者邪。雖有不自重之責。而其志可悲矣。唯宰相何人也。天下之士憤然譏之。何啻當時然也哉。昔歐陽文忠公之好士也。士有一言之合于道。不憚千里之遠而求之。此豈若世之好名者。勤延天下之士。以傾動海內哉。良以天下之事。非一人聰明才智之所獨能運也。故求士如此。其至者忠愛憂國之誠。凝結于中。不啻猶商賤夫之於利途。又如夫饑渴者之就食與水也。凡爲大臣者。以歐陽

公好士之心爲心。而後天下之士歸焉。既歸焉。則又應舉以任職。共謀宗廟社稷之安。令赫赫之美有所繼承。夫如此。則爲不負大臣輔弼之任矣。方今閣下抱經國之大才。當化理之至要。士之抱負才能者。孰有不致望於閣下者哉。閣下今歐陽公也。伏惟聖主在上。隆治丕新之政。莫急于舉賢退不肖。寤寐頃刻之間。務思得天下賢能之士。以備四海生民之望。是以小人攢斥君子登用。若閣下以不次擢拔之選。畀以人臣至貴之位。則閣下之所以報聖主其最大且急者。意在繼聖意得人材。以樹國家久遠之業也。方今千古一遇。爲大臣者。宜留心於進善類。以爲至治之化矣。昔在春秋時。管仲當齊國之政。隆治赫赫。天下仰其風。至萬世。頌桓公之德。而稱管仲之功者。不衰。然仲之所爲。獨自任其政。不博求人材。舉以共其事。是以仲死而險邪用事。齊國大亂。使仲早自爲慮。舉賢以繼其業。則雖有豎刁。易牙。開方之徒。而不足深以爲患也。今閣下蒞位既久。未嘗聞有推引後進矣。抑天下之大求之。無有當其望者邪。將國事繁多。未暇及之邪。竊恐太平無事。苟且因循。遷延日月。險邪隱奸。伺隙乘虛。一旦以致縱其黠巧之智矣。方今唯閣下可以聞此言。而某草莽野夫。學識淺劣。行無成。不復萌用世志。則非固負不自重之責者矣。但恐閣下當清明之日。有爲之秋。來天下憤然之譏。是以敢進冒不諱。狂愚之罪。自知誅戮。閣下幸憐容焉。

四〇 小野某墓表

小野君某歿而七十餘年矣。其外姪中島君某來諗曰。予外叔小野某之歿也不娶而家絕。其墓惟一沒字碑草深苔厚。每展拜之中心感愧。因思不及今表之。則後世或無以知也。欲煩子書履歷。以不朽之具。狀敢請。案狀曰。君諱氏俊。小野氏。稱源吉。本姓芳賀。祖考某有故。改小野氏。某仕于藩。臣小笠原氏。至君致仕。君少壯嗜武學。於西某技術精妙。窮居合兵法。組討之術。寶曆五年命居合兵法組討師範。賜三口班諸役人段。同八年賜切米七石。明和九年爲步小姓師範如故。以安永四年八月九日歿。浮屠氏私諡曰玄明院。卜兆於熊本出街妙教寺中合葬乎妹深入院墓。納金若干爲永世香火料。蓋君之遺意也。門人牧某繼其後。爲居合兵法師範。弟某爲組討師範。後河添某再爲三藝師範。河添某歿。牧某繼之。嗚乎。君家絕而無後。然其技術傳于世。其徒衆多。則君之無後亦猶在焉。抑予有感焉者。君之歿也七十餘年。一片墓碣在草苔中。而未以有表之者也。今得中島君表之。而百世之後。嚴然識爲小野君某之墓也。則中島君報親之厚。其何如哉。嘉永三年冬十月橫井時存撰。

四一 木野君墓表

君姓木野氏。方其名稱。庄左衛門。壯爲番方。入小姓組。擢組脇。轉鐵炮十挺頭。經二十挺。累進三十挺。前後祇役江戶者四。賜章服者二。生於某年某月日。歿於嘉永二年五月二十九日。春秋五十有八。葬於城南蓮政寺。從先壠也。其友橫井時存表其墓曰。嗚呼。君以質直易良之資。脩治心養氣之術。勇於見義。必爲而不求。近於名毀譽得喪。無以足累其心。而臨變處事。必出乎常情之外。嘗送囚之江戶。到新井關。關吏檢之無券。令不得過。君令人言曰。某以大府之命送囚。請以非常過。吏不可。往復數次。自朝至日中。不少易前言也。吏知不可奪。乃召君謂曰。當以非常許之。但子到都宜告主公。致無券之謝。君曰。謝不謝在於寡君。某非所知也。乃過關。小姓組之役。江戶也以輪次命例也。有或不然者。君時爲組脇。一日會客。客罵曰。非例如彼。而不能救焉。用組脇爲君。若不聞者。既而客散。獨留罵者。謂曰。子謂我不救之乎。不能則如此耳。出片紙於懷中。披之則辭職表也。罵者大慙服。予在江戶與君同邸。一日君來告曰。僕竊我金十兩。何以處之。予曰。客舍僕奴之賴。彼而爲之。太可惜也。屬吏之外。豈有他哉。君曰。吾亦知其然。然彼年少蕩心。花柳是以有盜心。且吾忽於藏金。所以易竊也。是其罪雖重。而情則輕。不若恕以保其生也。遂不屬吏。亦不出僕。僕亦深感動。不復爲惡也。君以不次擢三十挺。深感知己之恩。必思有所報焉。是以雖病惱日深。職事不少懈。先於捐館。二旬尙能馳馬試武。嗣子某以爲言。君曰。以不肖之身。蒙此擢拔。死而後已耳。吾命在旦夕。而未辭職。人將曰。暗進退。吾豈爲

名爲之哉。既而臥蓐。乃上辭職表。君少壯學拔刀之術於大里子。子授以一句曰。開半目見鼻端。是靜坐之術也。自是治心養氣終身無懈。嘗謂某曰。新井之厄吾分必死。而此心泰然不動。是少異於衆者。靜坐之効也。君志行之高大率如此。而與人交虛懷坦率。不設畦畛。杯酒之際。往往談笑諧謔。未嘗留意於世事。是以人目之爲。關於事情。是只以外貌見君者焉。得知其內之所存哉。嗟乎。吾與君交十餘年。於茲。花晨月夕。舉杯談笑。言或及心術之隱微。吾只據經而說理。而君則體究而心會。每思之未嘗不赧然服於心也。宋杲曰。如載一車兵器。不是殺人手段。我只有寸鐵便可殺人。若君者。非寸鐵殺人者哉。因并書之。使以表於墓上。後之君子庶有考焉。

(三八一四一橫井時靖藏寫本)

四二 池邊憲里墓表

余素聞池邊君之名久矣。及家兄爲郡宰。君頻頻來見焉。余亦接之。君質實不飾。嚴正人也。其言吏事。主清廉而糾胥吏之奸。斷爭訟而達冤民之情。不苟媮惰。事先衆以身。不姑息循。下行法必嚴。如夫勸農救荒。起利除害。凡所以愛養撫育斯民者。雖吏事之所最重且急。而根本不治。則其用奚得而行哉。是以君之所至。必先糾奸吏。斷爭訟。不少以姑息臨下。有或以嚴酷病

君者。君不顧也。余每慨今之郡吏。率長於富豪。狃於游惰。未嘗置心於民事。一旦及爲吏。上承官長之意。下徇屬吏之私。廢事曠職。浮沈取容而已。求其毅然行己如君者。豈易得哉。君名憲里。稱爲之允。其先出於菊池氏遺族。天正中。有池邊玄蕃者。喪亂失所。領落寓民間。以終。子孫世家。內田鄉上小田村。皆不仕。至君初入內田官舍。爲胥吏。擢郡代附橫目。轉田迎惣庄屋。自池田正院遷。鯨以弘化三年八月十一日終。終月遷小田。不果之也。齡五十有七。葬於上小田村先塋之域。君妻原口村某氏。舉一女。無男。養石原氏之子。憲道爲後。以女配之。憲道嗣爲杉島惣庄屋。及其來徵墓表。余謂之曰。官途如浮雲。憂喪則罔職。如子之先君子。志在民。而不在官。是以得毅然行己。子其勉之。見夫趨拜馬首。摩掌獻笑。仰人之氣息。以爲憂喜者。是豈有志於民哉。并書勵憲道。是又先君子之志也夫。

橫井時存記

(洪水文庫藏寫本)

四三 矢島忠左衛門の配三村氏碑隱の記

此棺は益城郡中山の御總庄屋矢嶋忠左衛門の配三村氏を納めしものなり。三村氏名は鶴和兵衛某の女。寛政十年三月朔日に生れ、文政二年屋しま氏に歸し、嘉永六年五

月廿一日春秋五十六歳にて終りぬ。此人真正の生れにして、義理に明らかに禍福利害にうつされず、又能なさけ深く人を憐を以て心とせり。家にありて能く祖父母に仕へ、兄妹と同じく賞せられて銀若干を給りぬ。既に嫁して家貧しく自ら農事を勤め蠶を養ひ、人の堪ぬ業を盡し舅姑に仕ぬ。やゝゆたかなるに到りて衣服飲食みづからの事は極めて儉素なれども、理に因て財を出すは聊も吝なる事なし。二男七女を生み子を教るに必真心を磨き行實を盡を以て心とせり。病て牀に在ること殆百五十日に及び、**疲勞**日々に進めども精神平生にかはらず、折に觸事に就き子を教へ戒ること到れりと云ふべければ、其子の母をしたひ忘れぬ餘りに、世替り時移山崩れ地拆けしるしの石も無く成りて此棺を發かん人のあはれみてうづみ給はん事を希て余に乞て其あらましを記せしむ。余と云ふものは熊本の横井時存にしてその子の矢嶋源介が師とし友としする人ぞかし。

(徳富蘆花著「竹崎順子」)

四四 龍喩

天下果無龍邪在焉。見之邪否。不見而曰在焉。將有其說邪。易曰雲從龍。既曰龍其在於天下

李退溪曰身一領之
將世間窮通詩夫蔡
辱一物置之度外
不以田於並臺既
辨詩此心則一齊也
五七分休歇矣

學者當先立本領本
領已立有可居之處
謂本領者在此一言而
其心脩養洒然脫却
則順境逆地無不適
貴立本領也 三寺君
見來訪講學二句道
同心合間此言告之則
以爲然 若將此去
國各回千里再會何
期乃不顧杜擘說錄
此語以代贈言嘉永
二年十一月

横井時存

三寺三作に與へたる小楠の筆蹟 (長野野幹藏)

也必矣。然則古在焉今無焉邪。在於古者豈無於今邪。蛇者吾知其爲蛇。蚪者吾知其爲蚪。至龍吾未知其爲龍也。今夫人指以爲龍者非蛇則蚪非蚪則蛇。蛇與蚪爲龍。於是眞龍者潛矣。嗚乎英雄豪傑之士世無常出。甚於龍。天下之衆夥多果無其人邪。術智之類英雄。權詐之似豪傑。人不知其爲術智權詐。信然以爲英雄豪傑之士。嗚乎眞龍不與蛇蚪伍。英雄豪傑之士於是晦其跡矣。夫有豢龍氏而眞龍見矣。有明主而英雄豪傑之士出矣。天下眞無其人邪。其眞不知其人也。

(横井時靖藏寫本)

四五 李語書後

李退溪曰。第一須先將世間窮通得失榮辱。一切置之度外。不以累於靈臺。既辨得此心。則所患已五七分休歇矣。學者當先立本領。本領已立有可居之處。所謂本領者在此一言。而真心脩養洒然脫却。則順境逆地無不適而泰然焉。是學所以貴立本領也。三寺君見來訪講學二句。道同心合間。以此言告之。

則深以爲然。君將歸其國。各國千里再會何期。乃不顧拙筆謹錄此語以代贈言。

嘉永二年十一月

横井時存拜

(長野幹藏)

小楠は常に此の言を愛したから徳富一敬が嘉永四年に小楠塾を辭して郷里に歸る時にも亦之を書き與へたのを蘇峯が藏してゐる。徳富のには「已立」の下に「斯」の字あり、「此之一言」を「李退溪之此言」、「修養」を「會得」、「順境」を「順地」、「逆境」を「逆地」となし、又「是學所以貴立本領也」を省いて「輩北徳富子將歸其郷余告之以此言更述其所以然者以爲贈言如此 嘉永四年九月小楠堂主書」と記してある。

四六 書與宗家横井次郎吉之語

祖先以百戰之勞僅起其家。而子孫安然有其業。每思之真不悚然起于内矣。而或怠祭事或荒職分而逸樂以送其生。不取罪於神明者幸也。

爲士夫者當以學文講武爲樂。玩好技藝一切以耽毒待之可以進德矣。

振起三千年神州男兒之士氣。一洗六大洲禽奔獸蹄之醜夷。是謂大丈夫之志。

生皇國不知皇國之道焉。知聖人之道真知聖人之道則知皇國之道。是道不二天地之間也。

爲横井君書

横子操

(徳富一義「東遊日録」)

四七 内藤泰吉に告ぐる語

一 士農工商及醫其職異なりといへ共苟も道を學ぶものは皆士なり。士にして志家職にあり、士と云べけんや。家職を卑として勉ざるは分を知らざるなり。思はずんばあるべからず。

一 西洋之書を讀むは第一彼諸國之治亂興廢政事兵道及士風人物に至る迄詳に研究し、天下の見聞を廣めずんばあるべからず。彼れ醫書のみを讀むは俗醫の陋なり。

一 我國以前の外寇專唐國を相手にせしに因て軍備中必儒者の手當あり。今日は專西夷にあれば通辯を學び緩急の用に備ふるは西洋醫之役なり。學ばずんばあるべからず。

一 東洞吉益氏云醫者非醫一人之病當醫天下之醫達哉言如此志を立業を勉む方には眞醫と云べし。

嘉永三年八月書以與泰吉子

横平識

(洪水文庫藏寫本)

明堯舜孔子之道盡西洋器械之術何止富國何止強兵布大義
 有逆於心勿尤人尤人損德有所欲爲勿正心正心破事君子之
 道在脩身

小楠の二甥送別語(横井時靖藏)

四八 送左・大二姪洋行

左は左平太
大は太平

明堯舜孔子之道盡西洋器械之術何止富國何止強兵布大義
 於四海而已。
 有逆於心勿尤人尤人損德有所欲爲勿正心正心破事君子之
 道在脩身。

(横井時靖藏)

四九 南朝史稿

本書は半面十一行毎行二十一字、廣版の無罫紙に小楠親ら筆したもので、今横井(時靖)家に藏せられてゐる。墨附すべて五十八葉は三分せられて、「一」は首から隱岐より還幸まで廿四葉、「二」は護良親王の入朝から延元元年十月新田氏一族の越前に於ける義戦まで廿七葉(もと「一」とは別冊だつたかの痕迹も見える)。「三」は「一」の中の幾章かの文を修正した七葉である。即ち「一」と「二」とは初稿、「三」は再稿であるらしい。再稿の存するが少く「南朝史稿」が何處まで筆を進められたかを明らかにせられぬは遺憾の至りだ。始の部分胡粉で消しては字を改めてあるが、終になると消したまゝで傍に書足してある。「三」に於てさへも)など眞の稿本で有る。「一」と「三」とは並べ出せば小楠の作文の用意も窺はれて興味もあるが、今は「三」の

存する限り「一」の取代へて之を出した。南木之夢を論じた文章は「三」にのみ存するのである。

本稿は開卷に「南朝史稿」と題し、後深草・龜山兩統迭立の由來を略述して、後醍醐帝の御即位よりを本文として上述の如く延元元年十月の記事に至りて止んで居る。蓋し南朝史は同年十二月後醍醐帝が吉野に潜幸せられ(此の時京都には光明帝おはす)てより起るべきで、後醍醐帝の當初からでは無いから、此の史稿では實はまだ南朝に及んで居らぬ。再稿では無論其處まで進んだらうと察せられる程未完成の物であるが、小楠が特に南朝史の撰に従事したことそれ自身が興味ある事實であるから之を明らかにする目的で左に掲げる事にした。小楠の本史の起稿及び中止につきては「横

南朝史稿

承久之亂北條義時遷後鳥羽土御門順德三帝于遠地立後堀川帝帝傳位于太子是爲四條帝帝崩無後北條泰時以土御門不與承久之事也立後嵯峨帝二子後深草遠山相繼昇位後嵯峨特愛龜山欲令其後承皇統也迨後宇多生輒立太子而長講堂領爲後深草湯沐邑後嵯峨崩後深草以不降志遠山不相善嘗爭政柄北條時宗知後嵯峨事乃得定天後宇多即位後深草憤恨欲削髮又

小楠自記「南朝史稿」の第一頁
(横井時靖藏)

井小楠傳第五章、四に記述して置いた。

承久之亂北條義時遷後鳥羽土御門順德三帝于遠地立後堀川帝帝傳位于太子是爲四條帝帝崩無後北條泰時以土御門不與承久之事也立後嵯峨帝帝二子後深草龜山相繼昇位後嵯峨特愛龜山欲令其後承皇統也迨後宇多生輒立太子而長講堂領爲後

深草湯沐邑。後嵯峨崩。後深草以不得志。與龜山不相善。嘗爭政柄。北條時宗不知。後嵯峨帝遺命也。訪大宮院太后。母。二帝太后告以屬龜山帝事。乃得定矣。後宇多即位。後深草憤恨欲削髮。又密遣使關東。以嵯峨帝意不獨屬龜山也。於是北條時宗以上皇皇子為後宇多儲貳。是為伏見帝。帝立三年。有賊淺原為賴。夜入宮中。謀逆不成自殺。北條氏檢之事。連龜山上皇。上皇賜書于貞時。誓無他。帝又密敕貞時曰。龜山之在位。憤承久事。陰有所圖。恐非卿利也。貞時乃立帝皇子。是為後伏見帝。後宇多上皇遣使貞時。責違後嵯峨帝遺命。貞時乃立後宇多皇子。是為後二條帝。因議定後深草。龜山兩統更立之策。限以十年。及帝崩。立後伏見之弟。是為花園帝。帝欲立後二條皇子邦良。承其後。龜山上皇特屬意于後宇多二子。遣使諭貞時立之。是為後醍醐帝。本紀。藤原定房傳。北條高時傳。正統記。太平記。增補。續史餘論。

文保二年春二月。帝即位。後宇多上皇聽政院內。三月立皇姪邦良為太子。本紀
 元享元年上皇還政。帝始萬機。勵精求治。十二月置記錄所。親聽訟。廢天下新關。但大津葛葉二關依舊置之。先是北條氏列世執天下之權。皇統□□一任其意。帝憤怒陰謀滅之。適北條高時失政。其家宰長崎高資等恣權。將士離心。多背叛者。帝竊喜之。令大納言藤原師賢中納言藤原隆資宰相平成輔。中納言藤原資朝右少辨藤原俊基稍延攬武人。俊基以要劇不暇。思屏居經畫大事。會延曆寺狀訴。俊基故誤讀狀中字。衆目嗤之。俊基為羞色。稱疾家居。竊

裝道士。觀察畿內關東海西民俗要地。資朝亦潛行東國。以結豪傑。美濃人士岐賴貞多治見國長。並以英武著。資朝資緣得見。會賴貞國長番直京師。乃欲共謀大事。而慮其或不聽。於是與俊基及師賢隆資左衛門督藤原實世僧游雅玄基武人足助重範等數延賴貞國長深相交驩。每會脫冠露髻。座無位次。令美姬單衣行。酒名曰無禮講。極盡歡心。遂告以大事。賴貞等傾心相謀。而恐物議。令僧玄慧講唐韓昌黎集。託以文會。南都僧徒稍多歸心者。本紀。資朝傳。高時傳。太平記。
 正中元年九月。六破羅府帥遣兵襲賴貞。國長于京師殺之。初賴貞族賴春妻齋藤利行女。利行六破羅府吏也。一夕賴春對妻泣下。妻怪之。問則以實告焉。妻走告利行。利行告之。六破羅府明旦府帥分兵討國長。賴貞賴貞起而理髮。見敵提刀奮鬪。久之。敵兵掩至。知不可免。走入寢所。潰腹死。一族盡鬪沒。敵軍襲國長。國長方被酒而臥。倉皇驚起。側有一妓助而擐甲。呼起族兵。小笠原通弘適依其舍。奔出察敵。見車輪旗章。知為六破羅兵。馳入呼衆曰。大謀已發。諸君宜決死。乃執弓箭登門。櫓大呼亂射。發二十三箭。殺傷如數。箴留一箭。執插腰間。拋箴呼曰。此箭可以備冥路也。乃啣刀鋒投櫓下死。國長及一族二十餘人環甲執兵。關門而待。敵不肯進。迫乃開門大呼恥敵。敵怒爭進。擊却之。敵更以生兵戰。自辰至午。殺傷甚多。既而敵兵一千人自舍背入。國長與二十人互刺而死。至是北條高時遣兵收資朝。俊基致之鎌倉。鞠問不服。高時憤甚。將議□帝。帝遣中納言藤原宣房賜書誓以無他。高時奉還其書。釋俊基還京師。遂

流資朝於佐渡本紀：顯宗長高時傳：太平記：增補

嘉曆元年三月。太子邦良薨。立後伏見皇子量仁爲太子。先是廷臣多貳太子者。帝憤之。欲廢太子立長子尊良。詔北條氏諭之。北條氏不奉詔。至是太子薨。帝又欲立二子護良。高時更立量仁親王爲儲貳。帝大怒以爲人臣與議。皇統在古未聞之。且後嵯峨帝遺詔。噉如明鏡。然屢違之。何其不臣之甚。乃遣藤原定房詔高時曰。朝廷立太子。關東肯挾異議。終不厭天心。後深草宗世有長講堂。領雖登祚之日。併奉之。而龜山宗潛龍無復有奉邑。甚無謂也。必奉十年迭立之約。當以長講堂領奉附朕也。高時又不奉詔。帝憤恚陰謀北條氏。乃與皇子尊雲謀誘諸寺僧徒。因以尊雲爲山門座主。護良廢棄講讀。專習武技。矯捷絕倫。頗通韜畧。見者以爲非座首所宜爲。莫不怪焉。帝屢幸延曆東大東福寺等。以收僧徒之心。又託皇后生子。召諸寺僧呪詛北條氏。本紀：護良廢原定房傳：正統記：太平記

元德二年四月盜殺大判事中原章房。初帝謀討北條氏于章房。章房固諫止之。帝恐語泄。陰命參議平成輔圖之。成輔乃募刺客伺章房出刺殺之。成輔傳

五月高時遣兵捕僧圓觀。文觀忠圓致之鎌倉。圓觀不首詛北條氏。高時鞠而得實。乃再收俊基。會後伏見上皇使人來具告朝廷之謀。高時大怒。議圖帝及皇子遷之遠境。公卿黨者斬之。遣二階堂貞藤等率兵三千至京師。尊雲親王諜知其謀。馳使奏曰。高時遣兵西上。欲遷乘輿

于絕島。殺臣尊雲。陛下宜乘夜幸南都。更假御服于近臣。陽爲陛下以赴叡山。揚言車駕避賊。賊聞之必盡銳來攻本寺。僧兵拒之數日。則徵畿內勤王兵夾攻之。賊必矣。願陛下速用臣策。不然則大事去矣。時大納言師賢中納言藤房弟宰相季房宿直。帝召與議。藤房曰。事急矣。宜用皇子策。乃裝宮人輿乘。帝及神器奔。中納言源具行大納言藤原公敏左近衛少將源忠顯等追至。帝更御竹輿。大膳太夫重康樂工豐原兼秋隨身。秦久武昇之赴南都。遂幸笠置寺。使大納言師賢服龍衣。詐稱帝赴叡山。中納言隆資左近衛中將爲明源定平等隨之。僧徒大喜。來集一夕得三萬。而六破羅帥謂帝在宮中也。遣兵索之不獲。則収大納言宜房等四人而去。於是以萬人攻叡山。尊雲與尊澄將僧兵六千陣八王寺。別以三百逆擊于辛崎。走之。斬賊將海東仲家。遂議以本院爲行在。僧徒悉集。會風揚輿簾。見師賢龍衣而坐也。相顧愕然。乃悉散去。師賢等奔笠置。護良兵亦散。乃與尊澄分路出奔。本紀：尊雲傳：高時傳：太平記

八月帝在笠置。詔畿內勤王莫復應命者。帝憂之。適夢紫宸殿庭有一大樹。南枝最繁。其下設御座。百官班列。有二童子來跪。指座泣奏曰。天下無地容陛下。唯此可以坐也。既覺。念文木從南楠也。意有姓楠者出扶朕以定禍亂。因召山僧訪之曰。地方豪傑有姓楠者乎。對曰。金剛山下有楠正成者。其祖出橘諸兄。而落爲土豪。母祈志貴山生正成。山神毘沙門也。以故小字多門。以材武著。帝曰是也。使藤房往召正成。正成即決意隨。藤房詣行在。帝令藤房言曰。討賊之

事。朕一以託汝。抑汝以何策決必勝。正成感激對曰。東夷大逆。自招天誅。但中興之道。有智與勇也。東夷有勇而無智。較于勇。舉天下兵。不足以當武藏相模。較于智。是易與耳。雖然。勝敗常也。不可以少屨折變其志矣。正成而未死也。陛下毋復勞。叡慮乃辭。行在城赤坂。將以奉乘輿焉。備後人櫻山茲俊起兵據一宮城。正成故傳。參考太平記。

橫存曰甚矣。史之不可信也。欲美其人。託以附會。不唯無益。適足以害忠臣義士之大節矣。余於南木之夢。深爲楠公憾之也。果如史之所言。則公是顧利避害之徒。何爲天下大節之臣。何哉。天子大難近在咫尺。公坐視之。待詔即起。夫生其土食其粟。而坐視其君之大難。不敢輒援之。非利害有所制焉。而圖成敗之勢者哉。圖成敗之勢。待詔即起。是高德茲俊輩尙且所不爲。而以公大節甘然爲之。余知其必不然也。帝之在笠置也。近畿將士方持兩端。無一人入援者。意公慨然獨起而赴其難。獻策定議。辭還赤坂。以誘四方勤王之義氣者。不待史而明矣。不然。則危據赤坂。固守千破劍。以千百就盡之卒。戰百萬日滋之師。義氣奮然。不少變折。以致中興之大勳者。安能得然也哉。然史者不察其實。美公平生爲之附會。以擬高宗。文王之夢。令其大節隱滅。不傳。致疑于千秋。甚矣史之不可信也。夫妄莫甚乎夢。夢而有實。天下何事有不實焉。高宗。文王之夢。奚知出于史者文飾而然哉。余遂未能信之也。

九月六破羅二帥發兵七萬犯笠置城。城兵三千人擁錦旗嚴肅守陴。賊軍氣褫不肯輒進。足

助重範登櫓呼曰。身是參河人。足助重範也。欽奉天子之命。守此城門。先軍旗號非美濃。尾張兵乎。車駕所御。謂六破羅公可親詣也。命大和工鍛一二箭鏃。公等請試其利。乃滿引而發。達二丁外。中一騎將而顛。有一賊以身蔽屍。手扣其心曰。君技不似所聞。請再射之。重範以爲彼蓋特重鎧。乃射其兜。應弦而殞。南都僧本性房多力。乘高投石。賊不得進而退。適高時遣北條貞直。足利高氏等六十三將。舉八州兵十餘萬。西上。未至笠置。賊兵乘夜襲城。城遂陷。將士潰散。錦織俊政奮勵曰。奉詔討賊。義當死。逃將何往。袒肩力鬪。矢竭刀折。與其子某。衆十三人。割腹而死。石川義純父子亦力戰自殺。親王以下文武官僚盡就執。帝與藤房。季房奔有王山。將赴赤坂。賊執以奉平等院。遂徙之六破羅。帝命備行幸儀。乃往。於是賊奉皇太子即位。光嚴帝。請帝傳神器。帝令藤房傳旨曰。此器歷朝所授受。雖世有亂臣。未聞恣相與奪。且璽鏡遺之笠置。唯有寶劍。若或近迫。玉體朕將有用之。不聽。賊迫請之。乃授以鏡及新劍璽。每旦沐浴拜皇祖。如常禮。賊頗憚之。僧良忠謀奪帝不果。尋就虜。本紀。重範高時傳。參考太平記。

正成之城赤坂也。城方可二丁。三面平地。兵僅五百人。取農粟充糧。慮行在不守。方欲迎駕拒賊。賊陷笠置。乘勢來攻。兵亡慮三十萬。正成令弟正季。族和田正遠。率兵三百伏城外山中。以待東軍。東軍至。望見其城。憫笑曰。此可隻手掀耳。爭下馬肉薄攻之。城兵齊射。殺傷千餘人。東軍沮卻卸甲而息。正季分兵爲二。馳入賊軍。呼譟擊之。正成以二百人開門突出。磨兵亂射。東

軍擾亂棄器械而奔。且日東軍分爲二軍。一設伏一攻城。正成豫設複墻。俟其肉薄絕繩。壓之。因投巨石大材。壓殺七百人。居五日。敵更蒙盾齊進。以鐵搭鉤。埤埤殆壞。正成令士卒以長柄杓沃沸湯。敵焦爛而退。東軍於是築營爲持久之計。而城中兵餘五日食。正成謀衆曰。吾先天下起兵討賊。死固其分也。然臨事而懼。好謀而成。勇士所尙。今我佯死。賊必去。去則復起。令賊勞奔命。是制勝之道也。衆曰善。乃爲二大坑。填以死屍。積薪其上。留一卒戒曰。我行遠發火。乘風雨夜稍遁入金剛山。及火發。東軍爭上城。見坑中積屍。以爲正成信死。乃引兵東還。櫻山。茲俊既略國內。將出兵于隣州。聞笠置陷。正成死。衆皆散去。茲俊遂自殺。正成及茲俊傳。太平記。增補。

元弘二年二月。高時遷帝于隱岐。其禮比承久頗厚。參議忠顯一條頭大夫行房。嬪藤原氏從。三月。遷尊良親王于土佐。尊澄親王于讚岐。恒良親王于但馬。流大納言師賢于下總。大納言公敏于下野。權中納言藤房于常陸。參議季房于下野。殺平成輔于相模。足助重範于京師。本紀

四月。車駕至隱岐。以國分寺爲行在。置兵護衛。初。帝之在笠置也。備後人兒島高德起兵。將赴援行在。聞笠置陷。楠氏敗乃止。聞帝之西遷也。謂其衆曰。我聞志士仁人者。殺身以爲仁。將與諸君。奪駕舉義。卽死。耀名于千秋。衆奮從之。伏舟坂山而待。久之不至。遣人候之。車駕向山陰道。乃間行至杉坂。既過矣。衆遂散去。於是高德獨變服。到行在。護衛甚嚴。不得見帝。乃夜入行館。斫櫻樹。書之曰。天莫空勾踐。時非無范蠡。且日衛兵聚視。無知所以也。遂奏之。帝視之。欣然。

心知有勤王者也。高德傳

五月。正成出金剛山。以兵五百攻赤坂城。城將湯淺定佛徵糧于紀伊。正成謀知之。遣兵奪之。充甲其苞。使卒三百爲送糧者。荷到城下。別出兵爲追擊之狀。城兵望見。以爲敵奪我糧也。開門納之。三百人取甲于苞。大呼奮戰。外兵應之。盡入城中。定佛不及戰而降。正成併其兵。徇和泉河內。得二千人。進陣天王寺。京畿大震。六破羅二帥。遣隅田通治。高橋宗康。將兵五千來攻。正成設三伏于天王寺側。別以羸兵三百拒渡邊橋。賊望而易之。輒渡橋進。我兵佯走。賊追至天王寺。伏發掩敵。敵軍相呼而却。正成奮擊乘之。賊兵爭橋墜溺者無算。大敗而還。會宇都宮公綱來援。六波羅二帥命公綱來擊。公綱以紀清兩黨五百人發。和田某謂正成曰。隅田高橋五千兵。我輒破之。彼公綱五百逆擊。正成默然。久之曰。兵在和而不在於衆。公綱坂東驍將。加以紀清兩黨。且承敗衄之餘。以寡兵來擬。其志在必死。我藉使克彼。必多傷我衆。天下大事何止今日。宜愛士力以圖後舉也。我將不戰而屈之。卽拔營而去。公綱代營之。正成卽夜遣卒三百。加以民兵。炬火山野。漸多漸近。公綱嚴兵待者三晝夜。一軍氣屈。乃引還。正成復軍天王寺。嚴禁焚掠。威信並布。遠近多來屬者。寺有上宮太子讖文。正成請見之。曰。當人王九十五代。天下一亂而主不安。此時東魚來吞四海。日沒西天。三百七十餘日。西鳥來食東魚。其後海內歸一三年。如彌猴者。掠天下三十餘年。大凶變歸一元。正成指謂其衆曰。所謂人王九

十五代方當今上。而東魚非高時乎。西鳥食東魚。當有起兵滅關東之人也。日沒西天三百七十餘日。明指上在隱岐。復辟蓋在明年之春也。諸君勗之。衆皆奮勵。乃收兵還金剛山。相千破劍城之。令別將守赤坂。正成傳

六月高時殺中納言資朝于佐渡。資朝為人英明果斷。抱有為之志。常憤時世。正和中。權中納言藤原爲兼謀滅北條氏。事泄。流土佐。資朝遇之于道路。目送嘆曰。大丈夫處世。得如此而足。嘗與內大臣藤原實衡直禁內。會西大寺僧靜然入朝。清瘦長身。鬚眉皓白。實衡起而敬之。資朝曰。此老瘦耳。何敬之乎。又嘗愛盆樹。聚斡條盤屈者。一日避雨于東寺門。見丐兒癡殘跛。蹙其醜穢。曰。所謂怪奇如此。不如平常之可尙也。還家以盆樹盡棄之。其志操卓然不與世同。好惡也如此。臨死作偈曰。五蘊假成形。四大今歸空。將首當白刃。截斷一陣風。資朝之在佐渡也。其子國光年甫十三。自京赴省。就監吏請見不許。國光憤之。及資朝死。夜調監吏將有所報焉。吏適易寢。見本間某臥。某又資朝者。國光意此亦一時之仇。乃殺某。逃京師。茲月高時又殺中納言具行于近江。右中辨俊基于葛原岡。俊基作偈曰。古來一句。無死無生。萬里雲盡。長江水清。水清。木紀實朝。俊基傳。

茲冬尊雲親王起兵據吉野山。先是尊雲出叡山。遷南都般若寺。笠置陷。賊遣兵圍寺。尊雲不知所爲。傍有三經函。一函蓋空。經出。乃跳匿函中。以經自覆。擬又胸間而臥。賊兵周索不獲。遂

檢二函。一函以空蓋不檢而去。尊雲度彼逸。一函必再來檢。急移匿別函。賊果返檢。傾函出經。戲曰。大塔宮不在也。大塔宮。大塔宮。因稱大塔宮。唯大唐玄奘三藏。在耳。大笑而去。唐塔。於是尊雲與村上義光片岡八郎。矢田彥七。平賀三郎。及僧光林。房赤松。則祐。木寺相模。房參。河房實。武藏房等。九人爲道士裝。負笈走熊野。所經深谷層嶺。無人煙。饑困旬餘。始抵十津川。憩一廢祠。玄尊適乞一家。見家童出。問主人名。曰。是戶野兵衛者也。玄尊素聞其名。乃入門覘察。會家有疾病。玄尊陽爲道士語。一女奴出。接曰。主母罹邪氣。願煩師之祈禳。玄尊指廢祠曰。老師在彼。奇功如神。乃請尊雲誦經呪祈。病者忽愈。兵衛出謝曰。山家無物可供。願止數日。以解羈疲耳。一夕兵衛對爐謂曰。師未聞乎。大塔宮避難熊野。別當定遍素黨北條氏。非駐駕之地。弊邑雖小。四方負險。人心素勇而武。昔日平維盛來依我祖。卒得保全。今大塔宮幸來于此。某將死生奉之。尊雲曰。大塔宮果來。君實爲之用。曰。我門雖微。一旦唱義。吉野十八鄉。誰肯背命。尊雲乃目勝。憲勝憲促膝進指。尊雲曰。是卽大塔宮也。兵衛熟視。猶有疑心。片岡八郎。矢田彥七。脫巾露額。乃大驚曰。果非真道士也。於是築室奉之。扼絕險阻。爲守備之計。兵衛舅竹原八郎。迎致其家。尊雲蓄髮更名護良。納八郎女有寵。八郎益奉戴無貳。四方近鄉稍歸心。既而賊購其首千金。土豪變志。乃入吉野山路。于竿瀨。令庄司啓行。庄司不奉命。乃與錦旗去。村上義光後至。見庄司兵持錦旗。問故。大怒罵曰。我君討賊。汝匹夫敢爲不逞。奪旗掀賊去。到小原。玉置庄司據險絕路。

乃遣片岡八郎矢田彥七諭之。玉置不答而入。室內騷然。窺之則甲二人走。玉置馳數十騎追之。返戰斬一騎。敵兵亂射。八郎傷二矢。磨彥七曰去矣。速報皇子。前鬪死之。護良聞之謂衆。事既迫何避之爲。我死劈面割鼻。命不識別。不然白我死。天下勤王義膽落。衆咸奮激爭赴。玉置兵會野長瀬六郎兄弟率兵來援。玉置兵不戰而潰。抵吉野。據寺爲城。以兵三千守。護良傳

三年正月帝在隱岐。二月賊將二階堂貞藤以兵六萬攻吉野。接戰七晝夜。城固不拔。會賊乘夜縋城而入。縱火呼譟。外兵應之。城遂陷。護良親執薙刀。率左右二十餘人戰鬪。賊兵披靡。護良甲被七箭。頰腕傷兩刃。流血淋漓。退入幕中。命酒與將士訣。滿引巨觥。立嚼三爵。木寺勝憲貫首于刀鋒。歌舞侑之。村上義光被十六箭奔謁曰。臣戰內門。聽引訣之聲。凄然而還。城既陷。不可復爲。請速奔。幸賜臣錦甲。侵尊伴以死。護良曰。死可共死。何必獨生之爲。義光大聲罵曰。何怯。以是舉大義。可憾哉。速脫甲。起解甲緒。於是護良以爲然。乃賜錦甲。潛然涕下曰。我生所冥福。死同冥路。遂出城奔。義光穿錦甲登櫓。大聲呼護良名。啣刀鋒投櫓下死。義光子藏人義隆欲從共死。義光戒之曰。父子之義則然。而且存命以任皇子。緩急乃隨。護良奔。敵兵追急。義隆止死。於是護良逃匿高野山。護良傳

村上義光傳
是月高時遷恒性親王子越中尋狀之。本紀

護良之在吉野也。遣赤松則祐諭其父則村舉兵。則村起兵播磨。城苦繩據之。兵凡一千人。分

守杉坂山里。以絕山陽山陰二道。進城馬邪山。據之。於是京師失西海之援。軍勢日益振。伊豫人土居通治得能通言。並起兵勤王。進土佐長門。探題北條時直以兵艦三百來攻。通治通言逆戰。星岡大敗之。四國兵多來屬者。乃議于今治。謀東攻京師。則村土居

賊將阿曾時治攻赤坂城。城兵力拒殺傷過當。賊絕水道。城乃陷。赤坂吉野既陷。畿內勤王獨在正成也。關東三軍盡萃。千破劍城。而西南諸道兵應高時。檄者亦會焉。稱八十萬合勢薄攻。正成以千餘人拒之。城東西臨谷。南北接金剛山。壁立數千仞。賊兵恃衆四面仰攻。正成令士卒投巨石隨亂射之。大敗而奔。賊令十二史記死傷。三晝夜不閉筆。乃令軍中嚴禁攻城。設營環圍。城有五泉。大旱不涸。正成更作太槽數百貯水。雨則引屋漏。槽養以黃土。以故水常有餘。賊議謂叢爾山巔不可有水。毋乘夜出汲乎。前攻赤坂。絕水乃陷。此謀可襲也。令名越守東溪。久之無出汲者。正成瞰其稍怠。以兵三百乘夜疾擊走之。奪其旗幟而還。旦日樹之城上。呼曰。此名越公所贈。有公徽號。我無所用。遣一族人來取之。因大笑之。名越慙恚。舉族薄城。城上豫懸巨材發而投之。仍大射之。死傷略盡。於是賊益禁戰。長圍苦之。正成作藁人數十。被以甲。蓋羅列城外。乘曉霧大閱。賊相告曰。城兵窮蹙出戰也。爭而赴之。我兵略發數箭。遂巡入城。敵薄藁人。則連投巨石。殺傷八百人。賊又作雲梯長二十丈。跨壑架城。銳兵數千乘梯進薄。正成令投炬火。啣筒灌油。以助火氣。梯絕陷。壑焚死數千人。六破羅二帥遣宇都宮公綱來援。公綱以

手兵攻城。鑿陷城櫓。正成應機拒之。賊竟不能拔。諸道豪傑望正成之風起。兵應官軍。護良又令民兵絕賊糧道。賊兵大困。逃亡相繼。正成傳。太平記。

閏二月帝竊出隱岐。奔伯耆。依名和長年。先是高時以天下多勤王者。慮帝逃出。乃戒監吏佐佐木清高益嚴守備。清高更令州郡兵警衛。行在邊絕中外。不得通。富士名義綱守中門。竊謀奪帝。帝一夕使侍女賜酒。義綱因白曰。皇上未聞乎。楠正成據金剛山。舉義。關東兵百萬攻之。不得拔也。伊藤惟群起兵備前城。三石絕山陽道。赤松則村奉護良親王。令畧播攝二國。進陣摩邪山。勢震五畿。而土居得能二氏起南海。大破北條時直。四國兵盡屬二氏。或唱理軍艦來迎車駕。或將攻京師也。是皇運將回之秋也。然聞高時更謀不良。以臣番直之時。宜出行在帆千振港。幸出雲。伯耆之間。臣伴追而隨之。帝不輒信也。乃賜侍姬察之。義綱感激。益堅忠節。於是遣義綱于出雲。諭鹽谷高貞。高貞拘義綱不還。帝乃僞稱宮人夜出行在奔。獨少將忠顯從之。叩一民家。主人熟視帝狀貌。知非常人也。乃負而至千振港。託之舟人。舟人亦有感喜色。忠顯告以實。揚帆而馳。顧見十數艘近則清高也。舟人匿帝及忠顯于舟底。覆以魚苞。坐其上而釣。清高兵來索。舟人詐曰。嚮京裝者二人發港。去在數里外。清高走之。既而敵舸百餘艘又追至。會風止。所御舟不得進。帝投佛舍利于海。默祈。風忽暴起。敵舸不知所之。漂蕩四日。遂到名和港。忠顯問港人士豪可倚者。荅以名和長高。乃獨至其家。傳詔。長高方集族而宴。未有

荅也。弟長重進曰。古今人之所重名也。今辱帝者。自託死生以奉之。舉名于百世耳。何議之爲。長高乃決意曰。度賊兵且至。長重去迎。帝奉駕船上山。諸君宜繼至。即隨數人。擐甲上馬。而馳迎。帝名和港。急卒無輿。長重被新薦于甲。背負帝登山。帝羸困甚。藉木葉進食。遂御船上山。長高令邑人運我倉粟于山者。人賞錢五百。一日致五千石。乃燒其家。率百五十人以護行在。伐樹爲塞。列扉爲垣。弟氏高計以松煙薰布。晝近國諸豪章幟樹列山上。明日清高以兵三千來攻。望見旌旗。大沮。我兵以寡少蔽樹而射。射殺一將。賊兵八百來降。清高不之知也。麾兵急攻。適日沒。雷雨驟至。長重及弟長生等乘雨奮擊。擠賊兵于谷。墜千餘人。清高僅以身免。帝製文及和歌。賜長高曰。以示汝忠于百世也。於是授長高左衛門尉兼伯耆守。賜名長年。富士名義綱。鹽谷高貞以千餘騎先至。山陰山陽諸豪望風來屬者數十姓。軍勢大振。本紀。富士名義綱。忠顯長年傳。三月賊將佐佐木時信等以兵五千攻摩耶山。赤松則村令羸兵三百誘敵于山下。敵望見易之。輒進迫之。我兵佯走。追至七曲坂。坂險絕。賊不肯進。赤松則祐飽間光泰乘高亂射。賊兵擾亂。則村以五百人奮擊。大敗之。賊更發兵一萬來攻。則村率三千人下山逆擊。會驟雨。憩小村。賊軍數千掩至。則村以五十騎突戰。從兵殆殲。只餘六騎。乃撤章幟。混亂兵。有一將將上馬。則村佯爲賤者扶乘之。目衆爲赴敵狀。馳入本軍。明日則村進擊賊于瀨川。筑前守貞範佐用範家。宇野國賴。中山光能。飽間光泰等七騎。草林登山突出。賊軍大騷。乃下馬亂射。無復虛

箭我軍七百騎大聲奮擊。賊軍敗奔。則村將收軍。則祐曰賊盡銳來一敗膽落。直攻京師。拔六破羅必矣。衆善之。分兵二軍。乘夜縱火而進。黎明至桂川。賊兵六萬臨川而陣。則祐舉鞭亂流。飽問光泰。伊藤介久。河原宗充。宇野國賴。小寺勝憲。繼渡。勝憲馬溺。泗水底先衆上岸。範資。貞範。磨軍渡。賊兵氣奪不戰而走。則村長驅入京。我別軍將左衛門佐忠俊進入。七條。縱火街舍。光嚴帝奔于六破羅。時既薄暮。則村以寡兵。按軍不進。賊縱騎絕背我軍大敗。貞範。則祐渡河。追賊欲馳入六破羅。全軍既敗。乃棄章幟。雜賊中。賊將呼曰敵雜我軍。彼渡河人馬必濕。見濕搏擊。貞範等知不可紛並轡馳敵。從兵盡沒。奔入本軍。則村收敗兵得一千騎。分爲二軍。進戰七條。賊又縱騎絕後。我軍遂敗。奔保山崎。則村傳北條本太平記

是月菊池武時起兵。肥後討北條英時于博多。不克死之。初武時與少貳貞經。大友貞宗。協謀勤王。密奏行在。帝喜之。賜以錦旗。既而謀泄。英時時在博多。召武時。武時欲先發。遣使少貳大友約期。貞宗觀望不答。貞經聞王師屢敗也。遂斬其使。送首英時。武時大怒曰。恨爲奴輩所紿。奴輩不與。我豈可不戰乎。即以百五十騎發。過櫛田祠。馬俄不前。乃罵曰。武時臨戰。何物神肯咎無禮。賦和歌。顧射其龜。武士ノ上ノ騎ニスチニ思フ心ハ神モシルラン馬輒前。前攻英時。英時大敗。將自殺。會少貳大友大兵來援。武時度不可克。分兵五十屬長子武重。戒曰。起兵勤王。死固其分也。汝宜還國。完城聚兵。上定國家禍亂。下復乃父仇讐。汝所以報我莫大于此。武重請從共死。武時不聽曰。存汝爲

天下。武重乃揮涕而去。於是武時與三子賴隆。督殘兵。不顧援軍。進入城中。奮戰死之。武時傳太平記赤松則村以左近衛中將源定平。詐稱靜尊親王。連營八幡。男山。扼絕水陸兩路。六破羅府帥遣兵來攻。則村聞之。率兵先發。距京一里許。沿道設伏。敵至。伏發。擁楯而射。一軍橫出。衝之一軍。縈斷其後。賊駭。顧大潰。尋與定平及僧良忠等攻京師。不利。帝令源忠顯與兒島高德率山陰山陽兵來援。忠顯行收兵得三萬。太田守延奉。恒良親王。舉兵丹波。與忠顯會。合兵軍于岑堂。僧良忠軍男山。則村軍山崎。兵部卿護良與叡山僧兵。約將戮力入京師。而忠顯獨欲專功。孤軍進戰。輒敗。守延死之。高德及名和高方留而力戰。忠顯遣使召還。謂高德曰。敗軍氣索。不可再戰。且營近賊。恐有不虞。不如少退。以圖後舉。高德切諫之曰。勝敗在運。小衄何憂。但有進而無退。赤松則村以一千兵陣山崎。三進三敗。猶能守之。況我殘兵比賊尙多。何退之爲。若虞賊夜襲。我請往扼七條橋。遂以三百人守橋備敵。夜半。願望嶺堂炬火稍少。高德料忠顯逃矣。引兵而還。遇荻野朝忠。曰。大將既奔。往視其營。錦旗仆地。器械狼藉。高德大罵曰。怯將何不令墜。暫壑而死。乃取錦旗。追及朝忠。收潰兵守高山寺城。則村傳高德傳四月高時遣名越高家。足利高氏。以大兵援六破羅。高氏遣使行在納款。高氏源義家之裔也。初義家臨終遺書其家曰。吾七世之孫必有取天下之權者。七世適當家時。家時以爲時未至也。祈八幡神曰。吾後以三世際取天下之權。遺書而自殺。家時子貞氏欲滅北條氏。不果。高